

## 鹿児島時代の稲盛和夫—幼年時代から学生時代まで—

吉田 健一〔鹿児島大学稲盛アカデミー特任講師〕

### Kazuo Inamori in Kagoshima-From childhood to his college days

YOSHIDA Ken'ichi〔Senior Assistant Professor, Kagoshima University, Inamori Academy〕

キーワード：薩摩の風土 信仰の原点 戦時中の教育 郷中教育 学制改革

#### 目次

##### はじめに

- (1) 鹿児島市薬師町に出生
- (2) 稲盛家のルーツと西田学区の歴史
- (3) 最初の宗教体験—かくれ念仏との邂逅—
- (4) 鹿児島市立西田小学校時代
- (5) 郷中教育について
- (6) 薩摩の三大行事と示現流
- (7) 鹿児島一中の受験不合格と鹿児島中学への進学
- (8) 病気になり、谷口雅春『生命の實相』と出会う
- (9) 鹿児島の戦災と戦後の稲盛家
- (10) 紙袋の行商経験
- (11) 学制改革時代の様子と新制玉龍高校時代
- (12) 鹿児島大学工学部に入学
- (13) 恩師島田先生との出会い—入来粘土の研究を行う—

##### おわりに

#### はじめに—本稿について—

本稿は稲盛和夫氏（以下、稲盛と略す）の鹿児島時代の事績を詳細に明らかにすることを目標としている。稲盛の鹿児島時代を知る資料としては、既に本人の自伝である『稲盛和夫のガキの自叙伝』（日本経済新聞社・2002年）と加藤勝美氏の『ある少年の夢』（現代創造社・昭和54年）がある。

『稲盛和夫のガキの自叙伝』は稲盛自らが日本経済新聞に連載した「私の履歴書」を元にしたもので、平成14年（2002年）に日本経済新聞社から刊行された。後に、平成16年（2004年）に文庫版でも出版されている。全体からいえば一部分だが、この本の中の「I」の部分の「三時間泣き」から「罪滅ぼしの友情」まで5章分には本人による鹿児島時代の思い出が記述されている。また、自伝ではないが、稲盛本人による回想的なものに、読売

新聞に連載された「時代の証言者」という企画がある<sup>1</sup>。これは、記者の質問に稲盛が答えていったものだが、この中でも少し鹿児島時代の思い出に触れられている。

『ある少年の夢』は加藤勝美氏によるもので、稲盛の出生から、京セラが創業20周年を向かえた昭和54年（1979年）までを扱っている。この本は稲盛の前半生の歩みを知る上では現在でも非常に参考になる本である。この本の「泣き虫の章」から「出郷の章」までの4章に鹿児島時代の稲盛の様子が描かれている。

本稿は、純粋に歴史的な記述を残すという執筆した。本稿においては、本文中では評論的な要素はできるだけ排除したが、部分的に少しは筆者の考え方も書いた。また、全体を通じて言えることについて「おわりに」に記述した。本稿においては、稲盛の個人としての事績について焦点を当てながらも、その背景にある鹿児島の歴史、文化、地域性、風土やその中から生まれた思想について重点的に記述することを心がけた。

また、稲盛の信仰心の原点についても重点的に記述した。信仰に関する部分は記述が難しい部分であった。鹿児島時代に稲盛がもった信仰として今日まで大きな影響を受けたものは「かくれ念仏」と「生命の實相」（生長の家の教義本）があるが、前者は鹿児島の風土・歴史の文脈でも説明できるものでもある。後者は、純粋に個人的な内面の体験である。

信仰の問題については、本当の意味で内面に踏み込むことまではできないものであるが前後関係については明らかにしたつもりである。

また、本稿では、特に稲盛が後に小学校や高校の同窓会誌などに行った寄稿文などを積極的に本文に組み入れることにした。同窓会誌のようなローカルな刊行物に寄せた稲盛の短文から当時の様子が生き活きと伝わってくるからである。

本稿の記述において、筆者はできうる限り、当時のことを知っておられる方へのインタビューを試みた。前述した、加藤勝美氏が『ある少年の夢』を書かれた昭和54年（1979年）からは、既に32年もの月日が流れている。当然のことであるが、32年もの歳月が流れば、稲盛の少年時代を直接知っておられる方の多くは亡くなっておられる。しかし、そんな状況の中でも、少しでも稲盛の鹿児島時代を知っておられる方へのインタビューを試みた。

本文に記述するが、小学校時代の同級生の崎元吉博氏、旧制鹿児島中学校から新制玉龍高校の同級生の大迫隆氏と川辺恵久氏、鹿児島大学時代の恩師、島田欣二先生にはお話しを伺うことができた。大迫氏、島田先生には複数回お会いした。また、直接、稲盛に面識のない方でも鹿児島の文化について詳しい方に戦前の郷中教育について実際のところを伺った。稲盛の原点である西田学区の方々であった。

本稿では、郷土史を記した冊子なども参考にした。この郷土史の冊子自体がいくつかの「参考文献」からなりたっているもの場合は筆者が本稿に記した内容は孫引きとなった。稲盛の生涯についての事実関係については、特に本文で断ってはいないが、全て先に記し

---

1 2004年4月6日から5月3日まで「起業・稲盛和夫」として、読売新聞の「時代の証言者」欄に連載された。聞き手は読売新聞大阪本社調査研究室の斎藤治氏。この中でも稲盛は少年時代について回想している。これに加筆修正されたものが2005年6月読売新聞社から『時代の証言者「企業経営」』として資生堂の福原義春氏と稲盛が一冊になったブックレットが出版された。この中のp. 49からp. 52部分で、稲盛は鹿児島時代について述べている。

た『稲盛和夫のガキの自叙伝』と『ある少年の夢』によっている。事実についての骨格は特に断ることなくこの2冊から得られた情報である。『稲盛和夫のガキの自叙伝』による記述を本稿で特に紹介する時は「自伝」と記すことにした。

### (1) 鹿児島市薬師町に出生

稲盛和夫は、昭和7年（1932年）1月21日に、鹿児島市薬師町（現在の城西1丁目）に誕生した。薬師町は城山の下を流れる甲突川のほとりにあり、現在でも稲盛の生家は残っている。本稿執筆の2011年現在、末弟の実氏が住んでおられる。稲盛の生家とほど近い城山は西南戦争で西郷隆盛が最後に籠った洞窟のあるところとして有名なところである。

稲盛は、父暎市、母キミの次男として生まれた。男4人女3人の7人兄弟の次男であった。和夫が生まれた時は、まだ3年上の兄、利則がいただけであった<sup>2</sup>。

父の暎市には3人の弟がいた。稲盛からみれば全て叔父に当たる。明治40年（1907年）生まれの暎市の6年下で大正2年（1913年）生まれの市助、さらに4年下で大正6年（1917年）生まれの兼一、さらに1年下で大正7年（1918年）生まれの兼雄の3人である<sup>3</sup>。



（左：城山観光ホテルから桜島を臨む：筆者撮影）



（右：現在の鶴丸城跡：筆者撮影）

両親は、印刷屋を経営していたが、家業に忙しく、出生届は1月31日に提出され戸籍上の稲盛の誕生日は1月30日となっている。父の暎市は元々は印刷屋に勤めていたのが、中古の印刷機械を人から譲ってもらい、自宅を作業場として独立していた。そこに稲盛和夫が生まれた。暎市は徹夜をしても納期を守る真面目な仕事ぶりで周囲の信頼を得ている人物であった<sup>4</sup>。

自伝によると、母のキミは、和夫少年が外で喧嘩をして負けてきたら、かたき討ちをしてこいと言って箒をもたせるような勝気なところもあった。子供の頃の稲盛は活発な少年

2 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）p. 18及び、加藤勝美『ある少年の夢』（現代創造社・昭和54年）p. 20参照。

3 粕谷昌志「自主研究「稲盛名誉会長 思想の源流 No.1」『生命の実相』について」（研究レポート1「京セラ秘書室経営研究部」）p. 28の家系図参照。この家系図は、粕谷氏が稲盛利則元京セラ監査役に聞いてまとめたものである。

4 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）p. 19参照。

で楽しい思い出をたくさん持っている<sup>5</sup>。

稲盛は、子供時代にはピワ狩りによく行った。当時の桜島は自生のピワ林が広がっていたという。和夫少年はふだんよく兄の利則とよく遊んだ。兄は魚を捕るのが大変うまく、稲盛はこの兄と甲突川によく一緒に行き遊んだ<sup>6</sup>。

両親について稲盛は『あしたうらら』<sup>7</sup>の中で、以下のように回想している。稲盛はこの記念誌に「生い立ちと両親」という題名で寄稿しているがその中の最終章「私の両親」に以下の記述がある。

「私の性格は、どこに由来するのだろうかと考えることがある。

父峽市は真面目で、几帳面な人だった。紙袋の製造なんかするよりも、闇市で紙を横流しすればもっと儲かることがわかっていたにもかかわらず、背中を丸めて紙を裁断するほうを選んだ人である。母キミは、父に戦前のように印刷業を再開してもらいたいと願っていたようだが、そうするためには莫大な借金をして新たに印刷機械を買わなくてはならない。人並み以上に慎重で借金を恐れていた父は、結局母からいくら勧められてもそうすることはしなかった。

私も企業経営において慎重であることが一番大事だと考えてきた。また、借金をすることを戒めてきた。

このあたりは父の血を引いているのだと思う。

一方、父とは正反対に、母親は明朗快活な人だった。この母の血も引いているため、私はどんな逆境に置かれようとも、明るさを忘れないでいられる。

父峽市は男ばかりの四人兄弟の長男で、尋常小学校を卒業するとすぐ印刷屋に丁稚奉公に出た。後に独立を果たすが、20歳のときに私の祖母にあたる、母親イセズルを亡くしている。私の祖父にあたる、父親七郎には再婚話があったそうだが、息子峽市に嫁をもらったほうが良いということになって、私の母キミが19歳で嫁にきたわけである。父の弟たちは、まだ小さかったので、私の母は、彼らの母親代わりも務めたらしい。

父は独立して成功を収め、私の生家となる島津屋敷の一角にある家を買った。私が子供の頃でも、周囲にはまだ薩摩藩の気風や、封建的な階級意識が残っており、学校の主席簿には、氏名の後に平民と士族を区別する欄もあった。

親戚から聞いたのだが、父の一番下の弟がまだ小学生だった頃、血を流して帰ってきたことがあったそうだ。家から二筋離れたところに、旧制七高に通う高校生がいたが、『うるさくて勉強できない』と怒鳴られ、殴られたのだ。

私の母親は『七高という、いくら立派な学校に通っていても、少し騒いだぐらいで、まだ小学生の子供を殴るなど許せない』と言って、父に抗議にいくよう促すのだが、おとなしい性格の父は、『きっと弟がよほど大きな声で騒いだのだろう』と言って、逆に弟の方を責めた。

母は、近所の士族風を更かせる連中がかねがね気に食わなかったのだろう。父がいかな

---

5 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）p. 20参照。

6 前掲書p. 20参照。

7 稲盛の卒業した鹿児島市立西田小学校の昭和19年卒業生によって組織されている「西田一九会」による記念誌。2000年1月発行。紀元2000年を記念して穂高出版から発行された。

いと見ると、みずから木刀を構え、父の弟の手を引き、七高生の家まで押しかけて、『オイ、出てこい』とやったそうである。

この母親の武勇伝は、私が生まれる前のことだが、それを聞いて、私はさもありなんと思った。というのは、私にも同じような経験があるからだ。私が喧嘩に負けて泣いて帰ったとき、母から理由を尋ねられ、『自分は正しいと思った喧嘩をしたが、負けてしまった』と答えると、『そう思うなら、どうして泣いて帰ってくるのか』と叱られ、塀に立てかけてあったほうきを持たされて、『もう一回やっておいで』とリターンマッチをけしかけられたことがあったのである。

もちろん、厳しいばかりの母親ではなかった。

毎年12月4日の赤穂浪士討ち入りの日、鹿児島では小学校4年までは、昼から学校の講堂に集められて義士の忠義を教えられた。5年生以上になると夕方から講堂の板張りの床に正座させられ、校長先生が『赤穂義士伝』を読むのを聞かされた。南国鹿児島といっても、この季節はさすがに寒く、冷たさと足のしびれで、話しの内容はさっぱりわからない。

ようやく午後十時頃になって、講読が終わる。凍えて家に帰ってくると、いつも母が門の前で待っていてくれる。家に入ると、母が用意してくれたぜんざいが火鉢の上でぐつぐつと煮えている。凍てついた身を抱えて帰ってきた私にとって、それは本当に甘くおいしいぜんざいだった。

私の母はそんな優しいところも、たくさんあった。この母キミも平成4年（1992年）に亡くなり、後を追うようにして、平成6年（1994年）には父畷市も鬼籍に入った<sup>8</sup>。

## （2） 稲盛家のルーツと西田学区の歴史

稲盛自身は薬師町で生まれたが、稲盛家のルーツは現在の鹿児島市域の北西部小山田にある。稲盛の祖父の七郎（1878年～1946年）の代までは小山田に住んでいた<sup>9</sup>。

小山田は平成の大合併の前の鹿児島市域の北西端にあり、甲突川の中流域に位置している。かつては日置郡に属していた。現在では国道3号線が東西を通っており、国道328号線が交差点から分岐している。

小山田という地名は古く鎌倉時代から見られ、薩摩国満家院の領内であり、江戸時代初期までは隣接する郡山と共に満家院に属していた。「満家院」の領域は、現在の鹿児島市小山田町・皆与志町域及び旧日置郡郡山町域であった<sup>10</sup>。「満家院」の「院」は、1040年代以降の平安後期以降成立した地方行政単位のことである。「院」は「国」（薩摩国や大隅国等）の下に置かれていた。薩摩国—満家院・鹿児島郡等である。「院」という行政単位が置かれた理由は、人々が納めた年貢をおさめた倉を「院」と称したことから、その「院」に年貢をおさめた人々が居住している地域を「院」と称するようになったといわれている。

---

8 西田十九会『あしたうらら』（2000年・穂高出版）pp. 19-32参照。

9 加藤勝美『ある少年の夢』（現代創造社・昭和54年）p. 18参照。

10 『日本歴史地名大系(47)鹿児島県の地名』（平凡社・1998年）の「満家院」の項を参照。



(国道3号線沿い小山田町に入るあたりの看板：筆者撮影)



(現在の鹿児島市小山田町の風景：筆者撮影)

日置郡小山田村となったのはその後である。村高は「天保郷帳」によると2097石余、「旧高旧領」には1836石であったとある。遅くとも明治4年(1871年)以前に鹿児島郡に移管された<sup>11</sup>。明治22年(1889年)に町村制が施行され、この時に伊敷村の大字「小山田」となり、昭和25年(1950年)に伊敷村が鹿児島市に編入され「小山田町」に改称された<sup>12</sup>。

小山田は山間の僻地で耕作面積の極めて少ない土地柄だった。その一軒に稲盛家があったが、一郎を頭とする7人兄弟の末っ子であった七郎が分けてもらった土地は谷あいの隅の三畝だった。そこは日当たりの悪いじめじめとした湿地であり、6人家族が食べて行く

11 鹿児島県総務部参事室編『鹿児島県市町村変遷史』(1967年)参照。

12 下中弘『鹿児島の地名』(日本歴史地名大系・平凡社・1998年) p. 175「小山田村」の項他を参照した。

には困難であった。そのため祖父の七郎は、稲盛の父である畷市が小学校6年の時に荷物を大八車に乗せて市内の西田町に出てきた。七郎は桜島大根などを仕入れて市内で行商をして歩き、畷市は小学校を出ると、すぐに市内の印刷屋に丁稚奉公に出て家計を助けた<sup>13</sup>。

畷市は明治40年（1907年）生まれで、丁稚奉公に出たのは大正7年（1918年）前後のことだった。歴史的にはシベリア出兵やそれに伴う米騒動が起こった年である。母（稲盛からすれば祖母）のイセズル（上野イセズル。1881年～1927年）が47歳で昭和2年（1927年）に亡くなり、七郎には再婚話があったが、それよりも長男の畷市に嫁をもらった方が良さだろうという話しになり、昭和3年（1928年）畷市は、小山田を七郎一家より1年早く出て市内の錦江湾沿いの天保山に一家を構えていた、溜家の娘キミと結婚した<sup>14</sup>。

畷市が結婚した時、すぐ下の弟が16歳、その下に小学校4年と1年の弟がいた。畷市とキミが結婚した次の年の昭和4年（1929年）4月11日に夫婦にとっては長男であり、稲盛にとって長兄である利則が生まれた。利則に続いて生まれたのが和夫であった<sup>15</sup>。

当時、薬師町（現在の城西1丁目を含む）は島津家の土地が区画整備された所で「島津どんの屋敷」と呼ばれていた。市内でも早くに区画整備がされたところであった。当時はすでに「屋敷」ではなく「島津住宅」とも呼ばれていた。昭和10年（1935年）頃にはすでに住宅はあつたらしく、郡部の方から引っ越してきた人が多かった。

七郎一家は小山田から出てきた当初は西田町に住んだが、大八車の行商で原良に来ることがあった。島津家の苗木を植えたと思われる苗場あとに家を借りていた人が又貸しをしてそれを七郎が借り、そこに住むようになった。父の畷市が18歳、大正14年（1925年）のことであった<sup>16</sup>。

畷市は印刷屋の丁稚奉公と名刺印刷の内職をへて自ら印刷屋を始めることになった。印刷屋は「稲盛調進堂」といった。そのうち、隣の家が空き家となり、畷市は買うつもりはないと断っていたが、仲介人が畷市の言い値で家主と話しをつけるといい、結局、畷市はその家を買うことになった<sup>17</sup>。

稲盛が誕生した薬師町は、明治22年（1889年）4月の鹿児島市制実施にともなって「薬師馬場町」となり、明治32年（1899年）の1月9日の町名改正によって「薬師町」となった。また明治44年（1911年）9月22日に鹿児島郡西田村の一部を合併して現在に至っている。薬師町という町名は、昔、薩摩藩主島津家の別殿があり、そこにあった薬草苑に、薬師如来像が祭ってあったことに由来するとの伝承がある<sup>18</sup>。現在、その薬師堂は城西公園内に祭られている。当時、小山田の辺りは農業が多く、郡山に行くと少し士族がいたと

---

13 加藤勝美『ある少年の夢』（現代創造社・昭和54年）pp. 18—19参照。

14 前掲書p. 19参照。

15 前掲書pp. 20参照。

16 前掲書p. 20参照。

17 前掲書pp. 20—21。

18 薬師町の成り立ちについては、西田校区公民館運営審議会編「郷土史誌2版」（1980年）p. 55参照。この中に、故池田米男氏の記録に「むかしは島津家の別殿の所在地で薬草苑があり、この苑内に薬師如来像が祭ってあった。今も薬師様奉妃の小堂が町内にあり、薬師町の町名はこれによる」と記されているという旨の記述がある。

いう。特に当時の薬師町には旧士族の人々が多く住んでおり、後から少し離れた郡部から出てきて島津住宅に住むようになった七郎などの新住民とは多少の壁があったようだ。

『あしたうらら』の中の稲盛の文章にも「母は、近所の士族風を更かせる連中がかねがね気に食わなかったのだろう」とあるが、近所にはまだ封建時代の士族意識をもっている人々が多くいる時代だった。稲盛自身も、後に公務員、官僚（役人）というものを嫌うようになるのだが、幼年期に経験した士族風を吹かす人々への反感が長く続いたのではないかと考えられる。



(左：鹿児島市城西町にある現在の稲盛の生家：筆者撮影)

(右：西田文化協会：筆者撮影)

昭和37年（1962年）11月、鹿児島市行政区画変更にもとない、薬師町内区域の1区、2区、3区の理事が協議した結果、3町内会に分割することが決定した。昭和38年（1963年）4月から現在の町名となった。薬師町1区と2区と呼ばれていた地域は現在は薬師町1丁目、薬師2丁目となっている。稲盛の生家がある地域（薬師町3区）は城西1丁目となった。この地域は東は甲突川に沿っており原良本通の北側に位置する。昔は薩摩藩主島津家の別殿があり、梅苑、薬苑があった<sup>19</sup>。現在も町内に島津興業本社がある。

この辺りは鹿児島の中でも歴史のある有数の文教地区である。現在の西田校区は、西田校区公民館運営審議会を構成している常磐町、西田町、薬師1丁目、薬師2丁目、鷹師町、城西1丁目の6町からなりたっている。西田学区から見ると、北側に吉野・吉田・郡山が位置しており、南方に谷山・喜入方面、東側（桜島側）には市内中心部の繁華街や港・海を隔てて桜島、そして西側（武岡側）は低い台地になっている<sup>20</sup>。また、北側に城山、東側に桜島を眺望できる場所にある。

19 西田校区公民館運営審議会編「郷土史誌2版」（1980年）pp. 55-56参照。

20 前掲書p. 4参照。





(左：稲盛の生家からほど近い昭和橋から甲突川を臨む：筆者撮影)

(右：稲盛の生家に一番近いバス停「新照院」：筆者撮影)

明治維新の変革、西南戦争の終結で世の中が落ち着いてくると、城下町であった鹿児島においても、織物授産城場、蚕糸講習所、鹿児島授産場などの生産工場が誕生していった。明治時代に設立された会社が甲突川の北部地区に位置したのに対して、大正時代は武町、薬師町、原良町、高麗町、下荒田町など甲突川南部地区に多くの会社が設立された。これは大正2年（1913年）に現在の鹿児島本線のうち、鹿児島・東市来間の鉄道が開通したことや、高見馬場・武駅（現在の鹿児島中央駅）間などの電車の開通によって交通が便利になったためである。薬師町もこの時期に発展していった<sup>21</sup>。

西田校区の工業は明治の頃は、維新で禄を失った旧士族が内職として始めた傘の骨削りなどがあつた。大正の頃になると、この地区でも大島紬が盛んに生産されるようになって行った。大正6年（1917年）に職工5人以上の工場は市内全体で279工場あり、西田にも10カ所ほどあつたと記録されている。昭和になってからも大島紬は盛んであり、市内全体で1301工場、西田地区にも45の工場があつた<sup>22</sup>。

西田校区は、藩政時代には参勤交代の交通の要所であつたところから、今でもお借宿、水飲み場、西田橋、新上橋、筋違橋、街道、薩英戦争の本陣跡などの由緒ある史跡や西郷屋敷や西郷墓地など貴重な文化遺産が多く存在している。

西田校区は日本の近代化以降、稲盛の先輩にあたる多くの著名な人物を輩出している。また直接に西田の出身でなくてもゆかりの人物も多い。国学者で皇学所御用係を務め、維新後に宮内庁歌道御用係に任じられ宮廷歌人となった八田知紀（1799年～1873年）、幕末期に西郷・大久保に次ぐ実力者として活躍し、明治6年（1873年）の政争では西郷に従い鹿児島に帰り私学校を創設し、西南戦争で西郷と共に闘った村田新八（1836年～1877年）がそれぞれ西田、薬師町の生まれである<sup>23</sup>。特に村田新八の誕生地は現在の城西1丁目当たる地区で稲盛の誕生地とはすぐ近くである。

また、大政奉還を構想したといわれる薩摩藩家老の小松帯刀（1835年～1870年）も、城下に生まれたが、幕末から維新时期に原良町に屋敷を構えていた。さらには、維新时期日本

21 西田校区公民館運営審議会編「郷土史誌2版」（1980年）p. 8参照。

22 前掲書p. 10。

23 前掲書pp. 59-64を参照した。この一覧の中には「稲盛和夫」も紹介されている。

の警察制度の生みの親で、初代警視総監となった川路利良（1835年～1879年）も生まれは城外皆与志比志島だが17歳の時に鷹師町に移住している<sup>24</sup>。



（左：小松帯刀像。宝山ホール前：筆者撮影）

（右：松方正義像。甲突川沿い：筆者撮影）

他にも、警視総監を務め、明治22年（1890年）山本権兵衛内閣と続く松方正義内閣（いずれも薩摩加治屋町出身）で海軍大臣、その後、初代台湾総督、内部大臣、外務大臣を務めた樺山資紀（1837年～1922年）も西田町の生まれである<sup>25</sup>。

時代は下るが、鈴木貫太郎内閣の外相として第二次大戦の終戦工作に当たった東郷茂徳も日置郡伊集院（現在の日置市伊集院）の生まれだが西田町に居住していた。このように西田校区は日本の近代化の過程、さらにはその後も多くの著名人を輩出している。

稲盛が鹿児島にいたのは昭和30年（1955年）までであるが、この時点で薬師町の世帯数は1551世帯、人口は5700人であった<sup>26</sup>。

### （3）最初の宗教体験—かくれ念仏との邂逅—

稲盛にとって、後の精神形成について影響を与える大きなできごとが小学校入学前にあった。

稲盛は、著書『生き方—人間として一番大切なこと—』（2004年・サンマーク出版）の中で、自身の最初の宗教体験としてかくれ念仏について以下のように記述している。

「…自分自身を振り返ってみると、この感謝する心は、私の道徳観の根底を地下水脈のように流れているもので、そこには次のような幼児期の体験が深く作用しています。

私の実家は鹿児島にありますが、まだ四つか五つのころ、父親に連れられて、『隠れ念

24 西田校区公民館運営審議会編「郷土史誌2版」（1980年）pp. 59—64参照。

25 前掲書pp. 59—64参照。

26 前掲書p. 58参照。

仏』に同行したことがあります。隠れ念仏とは、徳川時代に薩摩藩によって一向宗が弾圧されたとき、信仰心の篤い人たちによってひそかに守りつづけられた宗教的習慣で、私が幼いころには、まだその習わしが残っていたものと思われま

す。他の何組かの親子もいっしょに、日没後の暗い山道を提灯の明かりを頼りに昇っていく。みんな無言で、恐ろしいような神秘的な思いに浸されながら、幼い私も必死で父親の後をついていきました。

昇った先には一軒の家があり、その中に入ると、押し入れの中に立派な仏壇が置かれていて、その前で袈裟を着たお坊さんがお経を上げていました。小さなロウソクが数本灯っているだけで家の中はひどく暗く、その薄闇に溶け込むように、私はめいめい席を取りました。

子どもたちはお坊さんの後ろに正座させられ、静かに低い声で続くお経を聞いていましたが、読経が終わると、一人ずつ線香を上げて拝むようにいわれ、私もそのとおりにしました。

そのとき、お坊さんが子どもたちに短い言葉をかけてくれたのですが、もう一度来るようにいわれた子どももいる中で、私はお坊さんから、『おまえはもう、これでいい（来る必要がない）、今日のお参りですんだ』と告げられました。

さらに、『これから毎日、『なんまん、なんまん、ありがとう』と行って仏さんに感謝なさい。生きている間、それだけすればよろしい』といい、父に向かっても、この子はもう連れてこなくていいですよ、と“おすみつき”を与えてくれました。

幼い私には、それが何か試験に合格したような、免許皆伝と認められたような気がして、誇らしく、うれしかったのを覚えています。

それは私にとって最初の宗教体験ともいえる印象深い経験でしたが、そのときに教えられた感謝することの大切さは、私の心の原型をつくったように思います。そして、実際、いまでもことあるごとに、『なんまん、なんまん、ありがとう』という感謝のフレーズが無意識のうちに口をついて出たり、耳の奥によみがえってくるのです。

ヨーロッパの聖堂などを訪れたときも、その荘厳さに打たれて、思わずこの言葉を唱えたほどで、それは宗教、宗派を超えて私の中に血肉化している『祈り』の言葉であり、心の奥底にまでしみ込んでいる『内なる口ぐせ』といえます。

なんまん、なんまん、ありがとう。子どもにもやさしく覚えやすい祈りの言葉。それは私の信仰心の原型となった言葉であり、また、私の中に感謝する心を培うきっかけともなった言葉でした。

いつもこの言葉をつぶやくことで、だれに対しても、何についても、いいときはもちろん、悪いときもありがとうと感謝する心を涵養し、できるだけ正しく生きようと努めてきたつもりです<sup>27</sup>。

かくれ念仏とは一般的には江戸時代に権力から禁止された浄土真宗（一向宗）の信仰を権力の目から逃れて信仰すること、またはそれを行う者や集団のことを指す。南九州の旧薩摩藩や旧人吉藩では300年にわたって浄土真宗が弾圧されていたために、今でもこれらの信仰形態の名残が残っている。

---

27 稲盛和夫『生き方—人間として一番大切なこと—』サンマーク出版・2004年pp. 140—143。

西本願寺鹿児島別院によると、鹿児島に親鸞を開祖とする浄土真宗が伝わったのは、室町時代中期の1505年ごろであるとされる。この時から日本の歴史でも他に類を見ない、約300年にもわたる薩摩における浄土真宗への弾圧が始まった。浄土真宗の教えが人々の間に流布するようになると、為政者による浄土真宗排除の機運が生じたからであった。

西本願寺鹿児島別院のHPによれば真宗が排除された理由は「阿弥陀如来の前には、全ての生きとし生ける命は等しく尊い」<sup>28</sup>という浄土真宗の教えが当時の封建体制にそぐわなかったからだとある。以下、西本願寺鹿児島別院のHPから「かくれ念仏の歴史」を引用する。

「浄土真宗のみ教えが人々の間に流布すると、為政者による浄土真宗排斥の気運が生じました。それは『阿弥陀如来の前には、全ての生きとし生けるいのちは等しく尊い』という浄土真宗の教えが、当時の封建体制に相添ぐわなかったからです。そして真宗信者の結束力による統一的な行動が、政治的に利用され、一向一揆へと進展する危険性をはらんで、封建体制にとっては危険を感じたものであったからと言われています。

以来、真宗信者の摘発は続きますが、慶長2年(1597)2月22日、第17代島津義弘によって正式に真宗が禁止されたのでした。

弾圧は厳しく、特に郷土層への摘発がなされ、身分を百姓へ移し、また居住地をも移すという処分が行われましたが、これは士分の削減と兵農分離政策をおしすすめ、近世的支配体制を確立しようとする薩摩藩の政策と大きく関係したものだと思われます。

幕末期の天保6年(1835年)、弾圧は極みに達し、この時期に摘発された本尊は2,000幅、門徒は14万人以上と言われ、弾圧と殉教の悲話は現在に伝えられています。

このような弾圧の続くなか、真宗信者は講(地域ごとの信仰者による集まり)を結成し、ひそかに山深い辺土や船上やガマ(洞穴)の中で法座を開き、また肥後水俣の源光寺や西念寺に聴聞に赴き、信仰を存続しました。花尾念仏洞、田島念仏洞、立山念仏洞など、現在も鹿児島、宮崎の各所にその遺跡は残存しています。

約300年という暗黒の弾圧を経て、明治9年9月5日、ついに鹿児島に『信教自由の令』が布達されました。京都・本願寺は時を移さず鹿児島開教に着手しました。

幾多の苦難に耐えつづけた門徒の熱い意志により、現在の地に最初の別院が創設されたのが明治11年10月21日。その後、別院は、西南戦争罹災民救済、学校建設、殖産等、当時の鹿児島県の産業と文化の発展に寄与し、開教も着実に進みます<sup>29</sup>。

真宗信者の結束力による統一的な行動が、政治的にも利用され、一向一揆へ進展する危険性をはらんでいたことから、封建体制にとっては危険を感じるものであった。このことから真宗は弾圧されて行った。

---

28 「西本願寺鹿児島別院」HP (<http://www.hongwanji-kagoshima.or.jp/>) 参照。

29 前掲「かくれ念仏の歴史」(<http://www.hongwanji-kagoshima.or.jp/kakure.htm>) 参照。



(現在の西本願寺鹿児島別院：筆者撮影)

だが、全国的に真宗がどこでも江戸時代に藩主によって強い弾圧を受けたわけではなかった。薩摩藩においては真宗は厳しく弾圧されたというのは特筆すべきことである。激しい弾圧の大きなきっかけとなったのは、慶長2年（1597年）に第17代当主の島津義弘が正式に真宗が禁止したことによる。

芳即正氏によれば、「かくれ念仏」と命名したのは鹿児島大学教授をつとめた桃園恵真氏<sup>30</sup>である。禁止の時期については、慶長2年（1597年）2月21日、再度、朝鮮出兵する義弘が出した禁令が全藩的な禁止令の初めのものだった。

芳氏によれば、かくれキリシタンが長崎でも浦上地区という一部に潜在していたのに対し、かくれ念仏は奄美が不明なものの、ほぼ全藩的に秘密信者が存在していたと考えられている。薩摩藩の郷村統治の仕組みは巧妙で厳しいものであったにもかかわらず、信者が浄土真宗の信仰を守り抜くことができたのには理由があった。信者は「講」と呼ばれる信者の組織を作っていたからであった<sup>31</sup>。

「講」の組織については現在でも十分に解明されているとは言い難いが、大体のところは次のようであったといわれている。その単位は方限や村、あるいは数カ村、また郷、時には数郷にわたるものがあつた。方限は今日の地方組織でいえば小字、村は大字に当たり、また郷は今日の町村に相当する。この場合、村の中の小さな集落を単位に番役という僧侶の代役がいた。番役は葬式や彼岸会、報恩講などをつとめた。番役の上に世話役、さらに講頭がいて講全体を取り仕切っていたが、必ずしも一律の名称があつたわけではなかったようだ<sup>32</sup>。

弾圧は厳しく、特に郷士層への摘発がなされ、身分を百姓へ移し、居住地も移すという処分が行われた。これについては、西本願寺鹿児島別院の説明にもあつたが、士身分のものの削減と農分離政策を推し進める近世的支配体制の確立を推し進めようとする薩摩藩の政策と大きく関連したものと考えられている。幕末期の天保6年（1835年）に弾圧は極み

30 桃園恵真（ももぞの・えしん）は、大正3年、熊本県生まれ。鹿児島市薬師町に永住。旧制佐賀高校をへて東京大学文学部国史学科卒業。戦後、旧制第七高等学校教授、鹿児島大学法文学部教授を歴任。薩摩真宗、禁制史の研究を行う。かくれ念仏についての研究の第一人者。平成6年没。

31 芳即正「かくれ念仏と講組織」（鹿児島県高等学校歴史部会編・『鹿児島史学』1990年・第45号・平成12年）参照。

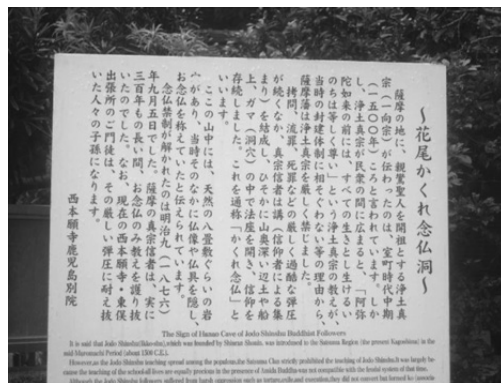
32 前掲論文参照。

に達し、この時期に摘発された本尊は2000幅、門徒は14万人以上といわれ、弾圧と殉教の悲話は現在に伝えられている。

このような弾圧の続くなか、真宗信者は地域ごとの信仰者による集まりを結成し、ひそかに山深い辺土や船上やガマとよばれる洞穴の中で法座を開いてきた。また、肥後水俣の源光寺や西念寺に聴聞に赴き信仰を維持してきた。

現在でも鹿児島・宮崎には代表的な隠れ念仏の洞窟跡として花尾念仏洞、田島念仏洞、立山念仏洞などの遺跡が残っている。

約300年の弾圧期を経て、明治9年（1876年）9月5日に鹿児島で「信教自由の令」が布達されると、京都の本願寺は鹿児島開教に着手した。



（左：花尾の「隠念仏」バス停留所：筆者撮影）

（右：登り口にある西本願寺鹿児島別院による案内板：筆者撮影）

ただこれは明治になって近代国家になったことによって信教の自由が認められたからという単純なものではない。そこにはもっと薩摩・鹿児島独特の歴史があった。薩摩ではまず明治元年（1868年）に廃仏毀釈が行われた。それは徹底的な廃仏毀釈であり全ての寺は破壊され神社にかえられた。その結果、真宗以外の寺も壊され、全ての仏教各派が勢力を後退させた。そして前述したように明治9年（1876年）になって真宗禁制が解かれた。だが、西南戦争が明治10年（1877年）に始まったために、事実上の解禁はその後になった<sup>33</sup>。

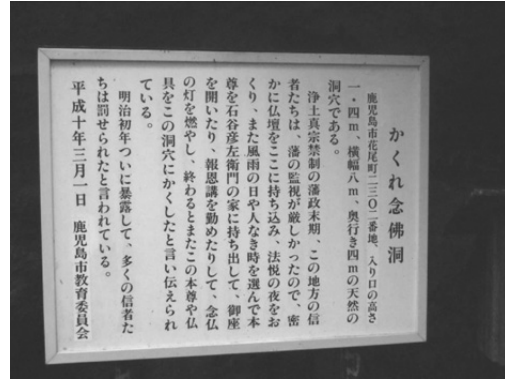
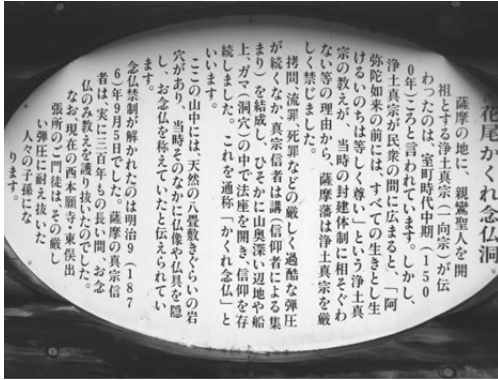
明治維新後の「信教自由の令」まで鹿児島において浄土真宗の信仰が禁止されていたということは驚くべきことであり、この宗教弾圧は鹿児島においては、決して遠い昔の歴史上の出来ごとではないのである。

筆者は本稿執筆にあたって、花尾念仏洞を実際に見に行ってきた。ここは現在の小山田から一番近くに残っている洞窟の遺跡である。稲盛が子どもの時に体験した隠れ念仏は「昇った先には一軒の家があり、その中に入ると、押し入れの中に立派な仏壇が置かれていて、その前で袈裟を着たお坊さんがお経を上げていました<sup>34</sup>」。という文章にあるように家で行われていたものであり、昭和の初めには洞窟での集会は行われていなかったが、禁制時代の洞窟がどのようなものであったかを確認するために行ってみた。

33 本稿のかくれ念仏についての記述は、前掲の芳即正「かくれ念仏と講組織」（鹿児島県高等学校歴史部会編・『鹿児島史学』199年第45号・平成12年）参照にした。

34 稲盛和夫『生き方—人間として一番大切なこと—』サンマーク出版・2004年pp. 140。

花尾かくれ念仏洞は現在の地名でいうと鹿児島市花尾町にある。かつては日置郡郡山町であった。鹿児島市内から車でちょうど1時間くらい行ったところである。花尾神社前というところから細い道を走って行くと地元だけを走っている「あいばす」という小さなバスの「隠念仏」というバス停留所があった。(写真参照)。



(左：中ほどにある「花尾かくれ念仏洞」の案内板)

(右：洞窟の近くにある鹿児島市教育委員会による案内板)

バス停留所の横に花尾念仏洞への登り口がある。ここからは山道になっているが途中までは車で登れた。この洞窟の説明の案内板は合計で3枚もあった。最初の登り口にあるものは西本願寺鹿児島別院によるものだった。途中までは車で細い道を登ると駐車場があった。そこにも看板があった。さらにそこからは山道が続き20分ほど登って行くのであるが、洞窟の前にも案内板があった。

鹿児島市教育委員会による、洞窟の一番近くにある案内板には「浄土真宗禁制の藩政末期、この地方の信者たちは、藩の監視が厳しかったので、密かに仏壇をここに持ち込み、法悦の夜をおくり、また風雨の日や人なき時を選んで本尊を石谷彦左衛門の家に持ち出して、御座を開いたり、報恩講を務めたりして、念仏の灯を燃やし、終わるとまたここに本尊をかくしたと言いつたといわれている。明治初年ついに暴露して、多くの信者たちが罰せられたと言われている」と書いてあった。(写真参照)。



(左：洞窟へと続く道：筆者撮影)

(右：同じく洞窟へと続く道：筆者撮影)

筆者は、今も残されているこの洞窟の中に入った。案内板によると中は畳8畳分くらい

の広さだということであった。今も地元の人によって世話がなされており、中には本尊の阿弥陀如来像が安置されていた。また参拝者は自由に蠟燭と線香を捧げて良いということだったので、筆者も蠟燭と線香に火をつけて立てた。内部はひんやりとした感じであった。

作家の五木寛之氏はここを実際に訪れたことがあるようで、その著書の中にこの場所を訪れた時のことが述べられている<sup>35</sup>。そして隠れ念仏の章の最後で、五木氏は「あらためて『隠れ念仏』の系譜をたどってみて、庶民というか、名もなき人々のあいだで、このような精神的伝統が代々受け継がれてきたのは、大変なことだと感じさせられた。日本の歴史をふり帰るとき、私たちはどうしても織田信長から豊臣秀吉、豊臣秀吉から徳川家康、というふうに、為政者の歴史だけを見てしまいがちだ。しかし、極度の貧しさと苦しきのなかで、自らの命を犠牲にして信仰の仲間を守るとか、あくまで信仰を棄てずに殉教するというような、知られざる庶民の歴史もある。明治維新のころ、とくに薩摩からでたヒーローたちが大活躍した。(中略)しかし、そういう華々しいヒーローたちの背景に、それこそ名も残さず、物語になることもなく、『血吹き涙の三百年』のなかで生き抜いた人たちが存在する。そういう人々もまたすごいものだなあ、と思わずにはいられない。(中略)日本人のこころの歴史の〈記憶〉として、大切に残していかなければいけないのではなからうか<sup>36</sup>」。と述べておられる。



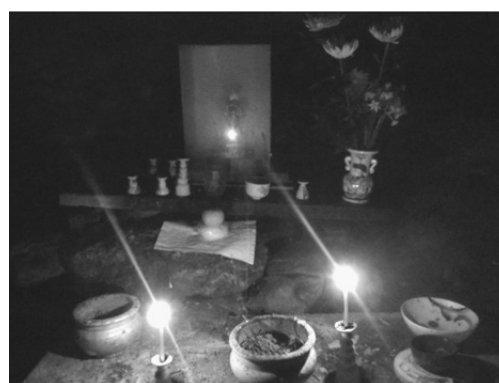
(左：花尾かくれ念仏洞の入り口：筆者撮影)



(右：花尾念仏洞顕彰碑：筆者撮影)



(花尾かくれ念仏洞の内部の様子：筆者撮影)



35 五木寛之『日本人のこころ2』(講談社・2001年)の第1部『『隠れ念仏』と知られざる宗教弾圧』

36 前掲書pp.69-70。



稲盛の祖父七郎は若い時までは小山田にいた。稲盛の幼少期の体験への言及からそれ以前の稲盛家の先祖もかくれ念仏の信者だったことは間違いないだろう。筆者は小山田に行って土地の古老に話を伺うところまではできなかった。京セラの粕谷昌志氏は小山田地区でのかくれ念仏の歴史について丹念に聞き取りをされている<sup>37</sup>。それによると、稲盛が昭和初期に受けた小山田のかくれ念仏は近年まで続いていたとのことである<sup>38</sup>。さらにこの高い秘匿性は小山田でも、兄弟でもかくれ念仏について知っているものと知らないものがあるくらいに徹底したものであったようだ<sup>39</sup>。粕谷氏の研究レポートには、かくれ念仏の空間的な広がりについては、鹿児島市小山田町から、川田町、東俣町、皆与志町の一部までと思われるとある<sup>40</sup>。

そして、粕谷氏は話を聞かれた郷土史家の徳留一男氏の話として、この地区はかつての荘園時代の行政区分である院でいえば「満家院」にあたるので、この行政区分にかくれ念仏の淵源を求めることができるのではないかと述べておられる<sup>41</sup>。しかし、また粕谷氏は自身が話を聞かれた、かくれ念仏研究の第一人者の鹿児島大学の森田清美氏の意見として、江戸時代の薩摩の行政区分では、この地域（小山田）は日置郡郡山郷にあたることから、小山田地区のかくれ念仏の広がりには院にまでさかのぼらなくとも説明できるのではないかと考えられるとも述べておられる<sup>42</sup>。

実際に現在残っている洞窟跡は小山田に近いところではこの花尾かくれ念仏洞だけである。稲盛の数代前の先祖にあたる人たちが集まっていたのはこの洞窟だったのであろうか。筆者はそのように考えたのだが確信はもてなかった。現在残ってはいないが、江戸末期にまであった他の洞窟があるのか否かが分からないからである。もっと昔には稲盛家発祥の地に近くに別のかくれ念仏の洞窟がかつてはあったのかもしれないし、今現在、残っている洞窟のみがかつてのかくれ念仏跡なのかは判然としない。

しかし、花尾かくれ念仏洞があるのは、平成の市町村合併後の地名でいえば「鹿児島市花尾町」であるが、以前は日置郡郡山町であった。上述した粕谷氏の研究による森田氏の説を普通に読むと、江戸時代には小山田が郡山郷にあるとある。広く「郡山」と呼ばれていた地域と「小山田」と呼ばれていた地域は鎌倉時代以来隣同士で同じ「院」に属しており、江戸時代は「郡山郷」だった。ということは、この地区のかくれ念仏の信者はかなり広範囲にわたって現在残っている花尾かくれ念仏洞に集まっていたのではないかと、十分に考えられる。

稲盛にとってこの幼いころの宗教体験は決して自覚的な信仰ではなかったかもしれない。だが、稲盛の精神の深いところで、その後も生き続けることとなった。前述の粕谷氏はかくれ念仏が稲盛に与えた影響として、「宗教体験が与えた影響」、「組織の連帯が与えた影響」、「組織の無頼性が与えた影響」、「信者の殉教が与えた影響」、「倫理性が与えた

---

37 粕谷昌志「稲盛名誉会長思想の源流No.3 ～かくれ念仏について～」（京セラ経営研究部・2011年）

38 前掲pp. 11-12。

39 前掲pp. 11-12。

40 前掲pp. 11-12。

41 前掲pp. 11-12。

42 前掲pp. 11-12。

影響」の5つをあげ、それぞれが「人格形成」、「リーダー」、「変革者」、「経営者」、「啓蒙家・慈善家」としての後の稲盛に大きな影響を与えたと述べておられる<sup>43</sup>。

粕谷氏は「…稲盛名誉会長の様々な側面、たとえば稀代の経営者、傑出したリーダー、時代の変革者、また警世の啓蒙家、さらには利他の慈善家などの萌芽は全て、『かくれ念仏』に見いだすことができる。稲盛名誉会長が現在、京セラやKDDI、また盛和塾、稲盛財団、そして日航の再建等において展開される広範なご活動。それらはみな、幼少の頃に受けられた『御座』の一夜を重ね合わせて見ることで、より鮮明にその像が結び始めるのである<sup>44</sup>」と述べて、稲盛の全ての原点にかくれ念仏の体験があると解釈されている。この点については筆者も見解を同じくするものである。稲盛自身の信仰はこの後にみる『生命の実相』との出会い、その後の臨済宗の老師との出会いによるものなど重層的であるが原点にかくれ念仏があることは確かであろう。

#### (4) 鹿児島市立西田小学校時代

稲盛は、昭和13年(1938年)4月、鹿児島市立西田小学校に入学した。自伝によると、小学校に上がるまでは大変な泣き虫であったようだ。一度泣き出したら3時間は泣きやまないというくらいの泣き虫で、大変に手のかかる子供だった。小学校の入学式には母親と一緒にあったから良かったものの、次の日には1人で行かなくてはならないと知った和夫少年は学校に行かないといい出すような泣き虫であった。そのために、小学校入学後1週間は母キミにつれられて登校した。

しかし、内弁慶で人見知りをする稲盛も徐々に学校に慣れて行った。友達との遊びが面白くなってきたからである。稲盛は1年生が終わる頃の成績はオール甲の優等生であった。母のキミも「うちの和夫は甲ばかり。親せきにもこんなできる子はいなかった」と近所に触れまわるほどであった<sup>45</sup>。

西田小学校は、日本の学校制度発足と同時にその前身が誕生した非常に長い歴史のある小学校である。この地域は、藩政時代は西田郷中、常盤郷中と呼ばれる地域だった。明治5年(1872年)8月、学制が敷かれると共に武岡東麓の常磐町殿様墓の北側(武墓地)にあった西田町第15郷校を小学校にするための準備が開始された。明治8年(1875年)12月、その墓地内に西郷隆盛の揮毫「武小学」の門標を掲げ、その年を西田小学校の発祥の年とした。その後、明治20年(1887年)3月、「武小学」を西田本通りの中央にある酒屋跡に移し、西田尋常小学校と校名を改めた<sup>46</sup>。

明治22年(1889年)に鹿児島市制が施行された当時、市内には中洲、八幡、西田、大竜、山下、松原、名山の7校があった。明治39年(1906年)4月1日に松原、西田、中洲、八幡の4校には2年の高等科が併設され校名も尋常高等小学校と改称された。この時に尋常小学校の修業年限が4年から6年になり、義務教育6年制が実現した<sup>47</sup>。

43 粕谷昌志「稲盛名誉会長思想の源流No.3 ～かくれ念仏について～」(京セラ経営研究部・2011年) pp. 11-12。

44 前掲pp. 17-19。

45 前掲p. 20。

46 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』(文庫版・日本経済新聞社・2004年) pp. 24-25。

47 西田小学校創立130周年記念事業実行委員会編「西田小創立百三十年史記念誌 にしだ」pp. 71-74。

その後、西田小学校は大正12年（1923年）7月、西田町から現在の場所である薬師町に移転した。稲盛の入学は昭和13年（1938年）であるが、入学の3年後の昭和16年（1941年）には国民学校令が施行され西田国民学校と改称された<sup>48</sup>。

すでに稲盛の卒業後ではあるが、昭和20年4月の段階で児童数は2670人であった。昭和20年6月には鹿児島は大空襲を受けるが、この時に西田小学校は校舎も全焼している<sup>49</sup>。

平成17年（2005年）12月には、創立130周年記念式典が行われたが、稲盛は多くの在校生、保護者、校区民が参加するなか、児童を相手に「君の夢は必ず実現する」とのテーマで記念講演を行った<sup>50</sup>。

西田小学校時代の思い出については、後年稲盛は以下の文章を記している。以下は、稲盛は昭和61年に西田小創立百十周年記念実行委員会より出版された、『西田小創立百十周年新校舎落成記念誌』に寄稿した文章である。



（現在の鹿児島市立西田小学校：筆者撮影）

「私の家は、鹿児島実業高校の近くで、甲突川から一筋入ったところにあり、現在でも年老いた両親が、そこに住んでいます。西田小学校までは、校区内でも最も遠い道のりで、家庭訪問の時も、私の家が一番最後でした。先生といっしょに、友達の家を回りながら、最後に私の家まで案内したのをよく覚えています。

家の近くの甲突川には、当時、魚がいっぱい泳いでいて、ハエ<sup>51</sup>、フナ、コイ、エビ、ウナギ、カニと、沢山の獲物が、毎日のように私たちを呼んでいました。学校から帰ると、宿題はそっちのけで、勉強道具は縁側に放り投げて、川へと走っていったものでした。魚たちの誘惑や、当時家の回りに沢山の悪童連中との遊びで、小学1年のときは上の方だった成績も、6年を卒業する時は、中位になっていました。しかし、あの楽しかった少年時代、遊びも、友だちもいっしょにいろいろと工夫したことが、社会人となって、多くの人を動かし指導する立場となった今日、いろいろな面で生きていると思っています。

質実剛健な校風の西田小学校では、当時、3年生ぐらいから示現流を教わり、冬の寒い

48 西田小学校創立130周年記念事業実行委員会編「西田小創立百三十年史記念誌 にしだ」pp. 71-77。

49 前掲pp. 71-77。

50 前掲pp. 71-77。

51 「ハエ」とは日本産のコイ科の淡水魚のうち、中型で細長い体長をもつものの総称。「ハヤ」「ハヨ」ともいう。主なハエには、アブラハヤ、ウグイ、オイカワなど。

日でも、裸足で霜柱を踏んで、樅の木をたたいたものです。また、学校への行き帰りは勿論、校内でも素足だったので、冬の朝礼の時など、霜焼けで真赤に腫れた足元の霜柱が融けて、ジュクジュクになり、冷たさや痛さを超えて、足が神経麻痺をおこしていました。そういう厳しい環境で鍛えられた少年時代の経験が、現在、困難や苦境を乗り越える糧となっています。

甲突川の魚とりと並んで楽しかったのは、めじろとりでした。冬になると、近くの山に行き、おとりの入った籠と熟した柿、それにトリモチを塗った小枝を置き、それに止まっためじろをとる時のあの逸る気持、今思い出しても胸が高鳴ってきます。

夏は甲突川で魚とり、冬は近くの山でめじろとりと、鹿児島の素朴な自然の中で、無邪気に戯れていた小学校時代の思い出が、目を閉じると走馬灯のように浮かんできます<sup>52</sup>。

この寄稿文から、稲盛は自身の少年時代に対しては非常に楽しい思い出をもっていることが伺える。

小学校時代の稲盛については、同級生の以下のような証言が得られた。筆者がインタビューをした崎元吉博氏は、稲盛の小学校4年生時の同級生で元中学校教師である。

西田小学校は、稲盛の在学した当時は、1学年の人数は360人で、学校は共学だがクラスは男女別だったという。男子3クラス、女子3クラス。1クラスは60人くらいだったという。学校全体では2600人くらいの生徒がいた。当時は皇紀2600年頃で生徒の人数はそれと同じ人数だといっていたという<sup>53</sup>。



(稲盛の実家の近くから城山の方向を臨む。手前は甲突川：筆者撮影)

当時から西田小学校は文教地区なので、もぐりで来ていた生徒も多かったという。それらの人々は田舎からきていたとのことであった。生徒は県下から集まり、出水や曾於郡などからくる人がいた。県下の人々は皆、県立一中（現在の鶴丸高校）を目指していたからであった<sup>54</sup>。

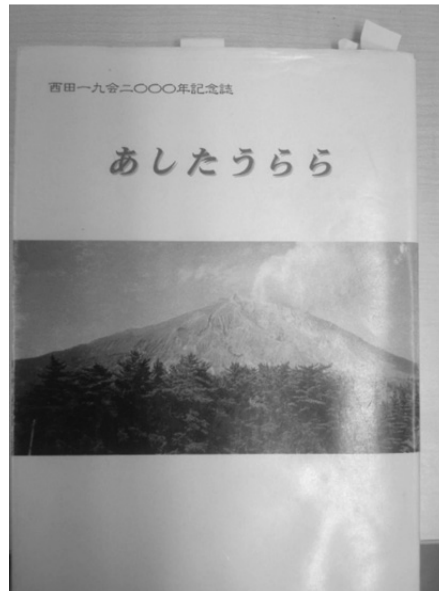
当時の稲盛は崎元氏によれば相撲の選手とか、足が速いとか学業の方でも目立つ方ではなかった。また稲盛が『あしたうらら』（穂高書店・2000年）に書いてあることと関係があるが、当時、稲盛は担任に睨まれていた。

52 西田小創設百十周年記念実行委員会『西田小創設百十周年新校舎落成記念誌』（昭和61年）p. 31。

53 筆者による平成22年3月16日の崎元吉博氏へのインタビューから。

54 前掲。筆者による崎元氏へのインタビューから。

この本の中で、稲盛は小学校の3年生くらいからはガキ大将になっていたことを回想している。ガキ大将であったことについては次のような記述がある。



(『あしたうらら』西田一九会・穂高書店・2000年)

「根は内弁慶で臆病なものだから、小学校に入学しても、最初の頃は母親がついてきてくれなければ学校へもいけないほどだった。しかし、二年、三年と学年が進むと、すっかり慣れ、子分のような友達もでき、だんだんガキ大将のようになってきた。

しかし、ガキ大将は、卑怯なところを少しでも見せれば、すぐに自分についてきてくれる友達から見放されてしまう。だから本当は臆病なくせに、勝てないとわかっている喧嘩もしなければならなかった。また、勇気を奮い起こしても猛者に立ち向かうこともしばしばあった。思い返せば、この当時から、集団を率いるためには、どうあらねばならないかを遊びながらではあったが、少しずつ学んでいたような気がする。

この頃、クラスにいつも仲間外れになっている子供がいた。その子が、私の気を引けば一緒に遊んでもらえると思ったのだろう。ある日、『五十銭銀貨を持っている』と言いだした。当時、私がもらっていた小遣いは一日一銭だったので、五十銭などというのは夢のような話だった。

子供がそんな大金を持っているはずはないと思うから、最初は無視していたが、何度も私のところにやってきては五十銭のことを言う。そこで本当にもっているのかと聞いてみると、『たしかに持っている』

と言う。『おばあちゃんからもらったお金だから、稲盛君が自由に使っていい』と言うのである。『それじゃあ、持ってこい』と言うと、何日か経って、たしかに持ってきた。『本当に僕が使ってもいいのか』と念を押すと、『使ってもいい』と言う。

そこで私は思い切って駄菓子を買えるだけ買い、友達に分け与えた。生まれて初めて大金を使い、ときならぬ大判振舞いもできたので私はことのほか上機嫌だった。

ところが、翌日、学校へいくと、その子のお母さんが来ていた。すぐに私は職員室に呼ばれて、有無を言わさず先生から叱られた。五十銭はその子がお母さんの財布から抜き取っ

てきたものだった。その子はあることか、母親と先生に『稲盛が『持ってこなければいじめ』と命じて、むりやり盗ませた』と嘘をついていた。私は、その子になんども念を押し、確認したのだから、『悪いことはなにもしていない』と言い張るのだが、結局私が悪者にされてしまった。

また、こんなこともあった。同じクラスに、台湾から引き揚げてきたばかりの子供がいた。額の上に、ちょうど一銭銅貨大のハゲがあって、みんなから一銭ハゲと言われていじめられていた。ある日、その子が私に、『家の柿がたわわに実っていて、おじいさんが『稲盛くんたちを呼んで、みんなで柿をとって食べたらいい』と言っている』と申し出てきた。

先ほどの五十銭玉の子と同じだと思い、私は生返事を返していた。しかし、あまりしつこく誘うものだから本当かもしれないと思い、『それじゃあ今日柿をとりについてもいいか』と聞くと、『今日はおじいちゃんが留守だから駄目だ』と言う。次の日にまた私が聞くと、何か別の理由をつけて駄目だと言う。そうやって何度かはぐらかされたが、ある日、『今日もおじいちゃんが留守だから駄目だ』と言うのを、一度いいと言ったのだからかまわないはずだと、10人ぐらい仲間を引きつけて、たわわに実った柿をひとつ残らずとってしまった。

ところがこれもやはり嘘で、あとになって、そのおじいちゃんがカンカンになって、学校に怒鳴り込んできた。

『柿をとらせなければいじめ』と、私がその子を脅したことになっていて、先生からまたこっぴどく叱られる羽目になった。

今、思い出せば、こんなガキ大将だったおかげで、その後の人生で役立ったことがふたつある。

ひとつは人間の心をいかにして掌握するかということ、遊びながらであろうとも学んだことであり、もうひとつは、言葉の真の意味を見きわめることの大切さを知ったということである。つまり、前者は、リーダーになろうとする人間には、勇気が必要であることや、自己犠牲を払わなければならないこと、後者は自分の尺度をもって勝手に判断してはならないということである<sup>55</sup>。

またこの文章の続きに「えこひいきに反発」というパラグラフがある。

「ガキ大将だったと言っても、むやみに暴力を振るうようなことはなかった。しかし、六年生になった頃、『イジメ』らしきものをしたこともある。

新学年になると、担任の家庭訪問がある。先生は、訪問を予定している家の児童を引きつけて、学校に近いところから一軒ずつ訪問していく。商売をやっているような家は、お母さんが忙しいものだから、店先で立ち話をする程度で終わる。ただ少し裕福な家になると、『ちょっとお上がりください』ということになって、少し時間がかかるようになる。私の家は学校から一番遠いところにあつたので、私は自分の順番がくるまで、門の外で待っていなければならなかった。

担当の先生は、近所のある一軒の屋敷に入ったのだが、なかなか出てこない。私は早く解放されたて遊びたい一心だから、やきもきしながら待っているのに、先生は一向に出てくる気配がない。私は友達に頼んで、家の中の様子を探らせてみた。すると、先生と奥さ

55 西田十九会『あしたうらら』(2000年・徳高出版) pp. 20-23.

んが、座卓をはさんで差し向かいに座り、おいしそうに饅頭を食べながら、楽しそうに話し込んでいるらしい。ようやく面談も終わり、先生を送るため玄関に出てきた奥さんは、私の母親とは全く違い、きれいに着飾っていた。

結局この家に一時間以上もいたものだから、あとは時間がない。ようやく私の家に着くと、それまで待っていた母親と、玄関先でひとことふたこと話し、さっさと帰ってしまった。

一時間以上も居座り、話し込んだ家があるかと思えば、ほとんど話しもせず帰ってしまう家もある。このことは、子供心にも、『教育者として公平ではない。えこひいきではないか』と思えた。

翌日から改めて観察していると、くだんの子供に対して、先生がとても親切なことに気がついた。たとえば授業中、『今のところがわからんもんは手をあげろ』と先生が言う。その子が手をあげると、机のところまで行って、優しい言葉をかけながら親切丁寧に教える。

そこで我々悪ガキたちも、わからないときは手をあげようという申し合わせをして、一斉に手をあげると、『おまえらは勉強していないから、わからないのもあたり前だ』と言って、そばに寄ってこようとしめない。

私たち悪ガキは、ますます先生がえこひいきをしていると思い、その意趣返しで、その子をいじめるようになった。

あるとき、私の仲間の一人が、ふとした拍子から、その子の顔に少し怪我をさせてしまった。私たちからいじめられていることを親や先生に言えば、しっぺ返しがかかるかもしれないと恐れていたのか、それまでその子はいじめられていることをずっと黙っていた。しかし、顔についた傷は隠しようがない。家に帰り、母親に問い詰められて、それまでのことを洗いざらいしゃべってしまったらしい。

翌日、私が登校すると、いつもとは雰囲気違っていた。普段ならばすぐ、私のそばに寄ってくる友達の顔が見えない。また、授業が始まる時間になっても、先生が教室に現われなかった。私は何か嫌な予感がしていたところ、案の定、職員室へ呼ばれることになった。そこでは、私の友達が立たされ、先生の尋問を受けていた。驚いたことに、彼らは口を揃えて、『稲盛がやれというのでやったんだ』と答えているではないか。

結局、私は先生からこっぴどく叱られる羽目になった。

『おまえはなんでいじめた』

『先生がえこひいきしたからだ』

私は家庭訪問でのこと、教室でのことなどをあげて、口答えをする。

私が言いおわるか終らないうちに、鉄拳が飛んできた。痛かったし、烈火のごとく怒った先生の顔は怖かった。

しかし、私には、『悪いのは自分ではなく、先生だ』という強い思いがあるから、身体は怯（ひる）んでいても、私の目は怯んではいなかった。それが先生の目にはふて腐れているように映ったのだろう。殴られて倒れたところを、さらに襟首をつかまれて引き起こされ、平手打ちを数発食った。

鹿児島では、年長者や目上の人に口答えをすると、『議をいうな』と言われ、制裁を受けて当然だった。

しかし、それでも私は『正義はどこにあるのだ』という風情で、先生の顔をにらみつけた。

やがて、私の母親が学校に呼び出されてやってきた。恐縮する母親の前で、先生は私がどれほどの悪さをしたかを説明したあと、さらにとどめを刺した。

『お母さん、稲盛は我が校始まって以来のワルです。こんなワルは卒業させないでおきたいところです。本人は一中へいきたいと言っていますが、とても入れません。それどころか、今の内申書ではどこの中学にも入れません』

そう言われて、私は呆然としてしまった。そして先生の宣告どおり、後日もらった小学校最終学年の成績は散々な結果で終わることとなった。

さて、この日の夕方、暗くなるころになってようやく、私は先生から放免された。母親と一緒にトボトボと家路を辿（たど）りながら、いくら温厚な父でも、今日ばかりは雷を落とすだろうと私は覚悟していた<sup>56</sup>。

ここには、6年生の時の担任教師とのやりとりについて書かれている。稲盛は小学校時代全体の暮らしについては、楽しい思い出として記憶しているが、6年の担任に関しては相性が合わなかったようだ。後年になって稲盛がかなり詳細にそのことを振り返って書いているところを見ると、そのように考えるのが順当なようである。

この文章を読む限り、この事件とこの時の担任は、微笑ましい昔話ではなく、今考えても楽しくない思い出として記憶されているようだ。正義感の強い稲盛にとっては、このような人物とその振るまいは目上の人間で担任であったとしても納得がいかなかったのであろう。

ただ、この話には後日談があった。稲盛は同じ文章にそのことを書いている。稲盛たちのグループがいじめたというその人は鎌田氏という人物で、後に鹿児島二中（現在の甲南高校）に進まれたが、稲盛とは小学校卒業後は顔を合わせることはなかった。後年、稲盛が鹿児島に帰った時に、平原氏という鹿児島銀行の頭取から島津興業（島津家ゆかりの会社）の社長を務めた人物が鹿児島財界の音頭をとって稲盛の歓迎会を開いた。それが縁となって平原氏が関西に行った時には必ず稲盛を訪れるようになったという。ある日、その平原氏の娘婿という人から稲盛に電話があったという。

その人が鎌田氏だった。鎌田氏は当時ビール会社の人事部長をされていたが、シェアが下がる一方なので人員整理を行っていたという。そして、鎌田氏は何人もの首を切った自分だけが会社に残るのは良くないと思い、退職を考えておられ、そこで、稲盛に京セラへの就職依頼をされてきたのだという。鎌田氏はその後、京セラに入社され、最終的には北海道セルラー電話株式会社の専務まで務められたという。この文章を読む限り、稲盛は、鎌田氏へは少年の頃から悪い感情はなく、稲盛が納得のいかない思いをもっていたのは、えこひいきをした6年生時の担任だったようだ。

## (5) 郷中教育について

稲盛は、自伝の中で「郷中教育」について「…弱虫がまともに育ったのは鹿児島独特の郷中教育で鍛えられた面がある。本来は武士の子弟の寺子屋だ。明治以降も各地域で先輩

---

56 西田十九会『あしたうらら』（2000年・穂高出版）pp. 23-25。



が後輩の心身を鍛練する場として存続していた。薩摩藩に伝わる示現流の稽古もあった<sup>57</sup>。と述べている。

『あしたうらら』（西田一九会・穂高書店・2000年）に収められた「西郷と大久保」という文章でも稲盛は次のように述べている。

「鹿児島では、終戦まで学校教育のほかに、それぞれの町内単位で、郷中教育と呼ばれる独特の教育が行われていた。私も小さい頃に、学舎と呼ばれる施設で、その教育を受けたことを覚えている。そこで私は、初歩的な日本の歴史や中国の古典、または鹿児島独自の剣法である、示現流なども教えてもらった。その中で、薩摩が生んだ偉人である、西郷隆盛について徹底的に教えてもらったことが、特に今でも印象に残っている。

それまで、西郷隆盛の功績については、いろいろと聞いていたが、そこで初めて彼の人物となり偉大な功績について、体系的に学ぶことができた。その記憶は、知らず知らずのうちに、私の考え方に影響を与えているように思う<sup>58</sup>」。

郷中教育とは薩摩（鹿児島）の伝統的な教育でその研究書も多い。薩摩藩では、古くから地域ごとに異年齢集団を形成し、青年の自治組織による修養教育が行われてきた。松本彦三郎氏の『郷中教育の研究—薩摩精神の真髓—』（尚古集成館・2007年復刊）によると、「郷中教育は藩政時代の数百年の久しきに亘り、薩摩藩島津氏の領内に、ことに主としてその城下に行われて来た青少年教育」である<sup>59</sup>。

郷中教育は（今の市内部の辺りでは）地域単位の方限（ほうぎり）を基礎として行われた。その郷中は「咄相中」（はなしあいちゅう）から発したものである。「咄相中」はお互いに心の通じる仲間が一箇所に集まってお互いに語り合う仲間同士のことである。そこで話し合われるのはお互いの心身の修養に関してであった。仲間同士は自分の年齢に同じもの、近いもの、異なったものという風に形成された。

薩摩藩時代に行われていた前近代の「郷中教育」は、明治4年（1871年）廃藩置県と共に郷中制度がなくなると同時に廃止された。だが、明治10年（1877年）頃、旧郷中（地域）を基礎として郷中教育復活のための学舎が起こる。西南戦争が終わった直後のことである。本稿においては、明治維新後、近代国家になってから、明治10年（1877年）前後に起こった学舎によって行われてきた教育も広義の「郷中教育」という表現で記述していく。稲盛の著書の中に出て来る「郷中教育」も勿論この意味で使われている。

維新前の薩摩藩時代に行われていた歴史的な郷中教育と区別し、正確を期すために、明治から戦前の鹿児島で学舎を中心に行われていた教育を「郷中教育の流れを汲む精神修養教育」と記述するべきだが、ここでは「郷中教育」という表現で統一する。

筆者は稲盛が受けたという当時の郷中教育（厳密に言えばその流れを汲む教育）の実情について当時を知る学会関係の方々にインタビューを試みた。筆者が個人的に知りあった松山道氏（元自彊学舎常務理事）のご紹介で多くの方が協力して下さった。その一人は前述した崎元吉博氏である。さらに稲盛の出身の西田小学校区にあった自彊学舎の理事長（当時）吉村松治氏を紹介して頂き、松山氏、吉村氏の他、宮内信正氏（現在、自彊学舎理事

57 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）pp. 25—26。

58 西田十九会『あしたうらら』（2000年・穂高出版）p. 233。

59 松本彦三郎『郷中教育の研究—薩摩精神の真髓—』（尚古集成館・2007年復刊）p. 15。

長。元校長)、東久雄氏、宮内博史氏 (信正氏の弟)、税所篤央氏の計6名の方に同時にインタビューをさせて頂いた。



(現在の自彊学舎全景：筆者撮影)



(自彊学舎の門柱：筆者撮影)



(自彊学舎の案内看板：筆者撮影)

自彊学舎は稲盛の出身の西田小学校学区にある。平成20年(2008年)11月には舎創立130周年式典が実施された。自彊学舎は、『舎史(百年記念号)』(財団法人自彊学舎・昭和53年)によると、西南戦争の翌年の明治11年(1878年)に、西田清氏によって創始された「共同塾」と、同じ年に佐々木弥九郎、和田亮一氏の発意によって誕生した「常盤学舎」をその前身とする。西南戦争で鹿児島島の街は焼け、人々の心も荒廃した。学舎はそこからの立ち直りを求めて設立されたのであった<sup>60</sup>。

60 筆者による平成22年3月18日の自彊学舎関係者インタビューによる。



(自彊学舎の中の様子：「自彊学舎」提供)

この両学舎は明治42年（1909年）に合併運動が進み、明治44年（1911年）に統合された。その時に、薬師町西田校西側の現在の位置に移り、「自彊学舎」と改称した。その後、「常盤学舎」という名の学舎が常盤町の日枝神社の近くに、昭和6年（1931年）から昭和15、16年（1940、41年）くらいまで存在したが、これは、明治の学舎とは直接の関係はない。昭和に存在した「常盤学舎」についての資料がないかも調べてみた。松山氏が自彊学舎の舎生であった徳留則夫氏に問い合わせたが、参考となる資料は残ってはいなかった。

舎の歴史の前半は戦争の時代であった。西南戦争で焼けた鹿児島の復興を目指して設立された学舎であったが、第二次世界大戦の空襲で再び鹿児島は焦土と化した。

吉村氏（インタビュー当時：自彊学舎理事長）によると、郷中教育という言葉は数十年前から盛んに使われるようになったが、郷中教育がある頃はそういう言葉はなかったとのことであった。つまりは明治に江戸時代の旧地域ごとに学舎が復活して来た時もその当時の人々が、学舎で行われる話し合いによる精神教育を「郷中教育」と称していたわけはなかったのだ。郷中（ごじゅう）というのは、郷の中で行っているから「郷中教育」というのではなく、郷と中（じゅう）は別であるという。

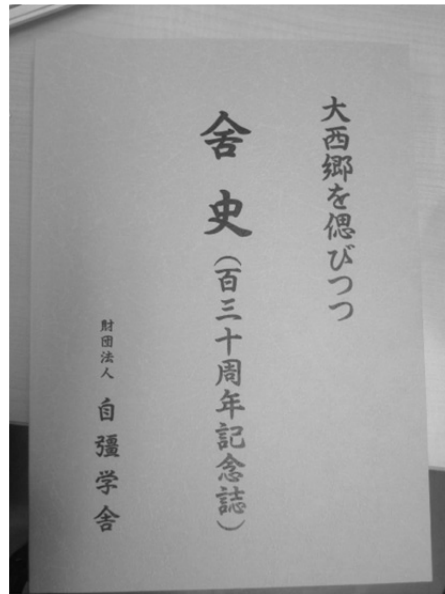
郷は「郷に入れば郷に従え」といういい方で使う「郷」の意味だが、中はその「中」という意味ではなく、重箱の「重」と同じ意味を持つという。また「咄相中」というのがどこの舎にもあったという。また郷中は方限を単位をしていたが、郷中という言葉がそのまま方限（町内の単位）を意味する言葉なのではない。人の家庭の中に入るとすべてが見えるが、「中」というのはその中で子供の教育や進路などを話し合い良い方向に持って行くことだという。

郷中と方限は別のものである。そもそも「方限」は今の鹿児島市内だけで使っていたものである。鹿児島市内以外の県内（出水や知覧などの郡部）でも郷中教育は行われており、鹿児島市内においては、方限単位でこの教育を実施していた。教員をしておられた宮内信正氏（現：自彊学舎理事長）によると、教員時代に地方をまわっていて、かつての鹿児島はセクト意識（地域意識）がかなり強かったと感じたという。

宮内氏はその原因は、島津氏の教えにもあるのではないかと考えておられた。昔は例えば、同じ西田方限でも西田と常盤、常盤と原良、西田と原良といったより小さな地域同志で石の投げ合いをしたこともあるという。当時（昭和初期から戦前）は子供の時からそう

いう意識を植え付けられたようである。だが、鹿児島にいる時は小さな地域で対立していても、ある程度大きくなって別の場所に行くと鹿児島の間人は団結力が非常に強いという。

『舎史（百三十周年記念誌）—大西郷を偲びつつ—』（財団法人自彊学舎・平成21年刊）には、学舎同士の喧嘩のことが書かれている。学校同士の喧嘩が激しかった時代もあったようだ。自彊学舎では、妙円寺参り、曾我どんの傘焼きなどが特に重要な行事であった。これらの行事の時は他の舎に負けないように人を多く参加させた。舎は元々は士族の子弟の集まりだったが戦前に国民皆兵になってからは、実際には士族と平民の区別はなくなっていたという。



（『舎史（百三十周年記念誌）—大西郷を偲びつつ—』平成21年）

舎は行事の時には人を集めなくてはならないので、妙円寺参りの時などは、舎に入っている子供は友達を連れて行ったという。戦時中も妙円寺参りは続いていた。昭和20年（1945年）は焼け野原になったので中止されたが、前年の昭和19年（1944年）には行われていたという。

戦争の空襲で鹿児島市内も多くが焼失したが、そのことによって、戦後は舎の活動もできなくなった。戦後の風潮の中では「舎」という言葉を使うな、という時代であり「学舎」が「児童塾」と言い変えられた時期もあった。GHQは神道指令なども出しているのに、日本の精神的な活動について、軍国主義と関連すると見なしたものは全て停止させたが、自彊学舎も何か指令を受けなかったのか疑問に思いこの点も尋ねた。これに関しては、6人の方へのインタビューでの見解では、特に何も指令はなかったはずだということだった。軍閥に関係のある行事はやめるように指令されたが、妙円寺参りなどはローカルなものでもあり引っかけからなかったのではないかということだった。

自彊学舎に関して、占領期に活動ができなかったのは、どこから命令されたからではなくひとえに経済的な理由と社会の混乱によるものだったとの見方であった。妙円寺参りに関しては昭和26年（1951年）には明らかに復活していたということだった。舎自体の復興がなったのは、昭和29年（1954年）のことであった。

東氏によると、昭和初期の西田学区の全体の子供の数は全体で2600人、1学年が約360人もいたという。そして1クラスは写真で数えてみると65人程であったという。単純に男女が約半数ずつとすると全学年で男子学生は1300人となるが、このうち自彊学舎に来ていた子供は10人くらい、比率でいうと0. 数%だという。つまり、小学校の中でも実際、正式に学舎のメンバーとなっていた子供はごく少数であったのだ。

また、学舎でのみ「郷中教育」がなされていたのではなく、原良村自体が学舎と同じ教育をしていたということだった。舎はまず、平日の放課後は3時頃からやっており、今日でいうと、ある意味では学童保育のようなものでもあったという。一般に郷中教育といわれるものは学舎以外にも学校で行うのも、町内で行うものもあったとのことであった。

人々が郷中教育という言葉を使う時、何が郷中教育であるかは厳密に言えば、単に場所によって規定されるものではなく、その教育の中身、内容、スタイルによると考えられる。但し、吉村氏によると、学校で行うのも町内会で行うのも同じく郷中教育ではあるが、舎は特別な場所であったらしい。年長者のいうことを聞かなかった時には、舎では（体を）打ったり、叩いたりされることがあり、舎は他とは違った濃縮した場所であったという。現在の学童保育とは似て非なるもので精神性に重きが置かれていたことが特徴であった。

東氏によると、学校では戦争のための軍国教育もやったということであった。精神教育をより重視する学舎が当時の世潮に全く影響されなかったとは考えにくい、舎では小学校のように特別な軍事教練はなかった。当時、学舎における教育は「詮議」が中心であったという。また積善会というものが1週間に1回あり、反省会のようなものが行われていたという。

吉村氏によると、舎は平和な所で民主的な所であったという。ただ、20歳になるまでとなつてからは全く扱いが違つたと話された。子供は1つ年齢が違えば神様で縦の規律は非常に厳しいものがあつたようだ。だが20歳をすぎて長老（おせ）になれば皆、対等となり徹底して話し合いをしたという。途中で鹿児島を出られた松山氏によると、自分はそこまでどり着けず、ただ「議をいうな」で殴られた記憶ばかりだとのことであった。

税所氏の証言によると、舎では誰も喧嘩はせず、喧嘩をしているのも見たことはないとのことであった。これは序列が決まっており、一緒に生活している兄弟のようなものだったからだという証言であった。ただ、縦の序列は年齢で決まっているが、横（同年齢）の序列は喧嘩で決まり、それは、すぐに入れかわるということだった。当時は特に転校生が喧嘩の対象になつたらしい。喧嘩を好まない生徒も喧嘩の対象となつたようである。今では想像もつかないくらいに地域間（小学校間）でもよく喧嘩し、転校生は最初、必ずいじめの対象にもなつたようである。

終戦間近の頃の学舎は活動も困難な状況であった。舎屋も昭和20年（1945年）6月には焼けてしまった。建物が焼けたので学舎活動ではなくなつてしまった。戦後の自彊学舎は、陸士（陸軍士官学校）の学生で卒業前に戦争が終わり、戦争に行けなかった福永敬造氏という人が帰ってきてから復興された。福永氏の他に海兵（海軍兵学校）の人が2人終戦で鹿児島に帰ってきたという。これらの人が鹿児島に帰ってきた時、鹿児島は焼け野原で大変な状況であったが、彼らは戦前の教育を受けているので、どうかしないといけなとを考え、戦後の自彊学舎の復興が始まつたという。

宮内（信正）氏によれば今の自彊学舎の原点はそこにあり、海兵と陸士で戦争に行けな

かった人の怨念が入っているという。戦争に負けた怨念ではなく、行けなかったことの怨念である。稲盛もこのような環境のなかで薩摩・鹿児島に伝わる伝統的な文化を学び、考え方を身につけていった。

稲盛が終戦を迎えたのは13歳の時である。戦後は鹿児島にも進駐軍がきた。連合軍は今の甲南高校（当時鹿児島二中）に常駐しており、そこが兵舎のようになっていた。

東氏によると、氏は当時すでに旧制中学を卒業しておられたが、仕事はなく焼け跡の整理をしておられたという。占領軍（米軍）からの要請で町内会の隣組から何人か人を出さなければならないということになって、アメリカ軍のいるところの掃除をしたり、武岡から砲弾を海に捨てに行くなどの仕事に駆り出されという。主に17、8歳の若者が引っ張り出されたとのことであった。稲盛は終戦当時、まだ13歳だったからこのような仕事には従事していない。

当時は二中に軍令部があり、軍政部は市役所内におかれていた。当時、県庁は終戦直前の6月17日の大空襲で焼けてなくなっていた。県庁は一時、市外に移っていた時代があり、鹿児島大学の前身である七高（旧制第七高等学校）も出水に移ったことがあった。戦時中は学校でも男女別々で、兄妹でも一緒に歩けば叱られるということだったが戦後は徐々にそのような気風も変化して行った<sup>61</sup>。

#### (6) 薩摩の三大行事と示現流

ここで薩摩の三大行事についてふれておきたい。ここに出てくる「妙円寺参り」と「曾我どんの傘焼き」に「赤穂義臣伝輪読会」を加えた行事が薩摩（鹿児島）の三大行事といわれており、薩摩隼人について語る時に触れないわけにはいかない。郷中教育の中でもこの三大行事への参加は特に重視された。

「妙円寺参り」は郷土の先輩の歩みに関するものだが、「赤穂義臣伝輪読会」と「曾我どんの傘焼き」は薩摩藩から離れた別の藩のできごとである。だが、共に敵討の事件であるという共通点がある。義臣伝の「義臣」とは忠義の士のことであり、いわゆる『忠臣蔵』で有名な赤穂四十七士のことである。「曾我どんの傘焼き」はさらに古く今から800年以上前の建久9年（1193年）の出来事を記念している。曾我十郎・五郎の兄弟が、源頼朝が富士の裾野で巻狩りをした夜に、父の仇である工藤祐経を討ち取ったという故事にちなみ、その孝心を讃える行事である。

「妙円寺参り」は天下分け目の関ヶ原の戦いでの敗戦をしのぐための行事である。慶長5年（1600年）の関ヶ原の戦いはすでに400年以上前のできごとだが、これほどの長い時間、負け戦の記憶を伝え、無念さを語って語り伝えてきたのが「妙円寺参り」である。妙円寺は鹿児島市内から約20キロ離れた現在の日置市伊集院町にかつてあった寺の名前である。明治2年の廃仏毀釈によって現在は徳重神社となっており、御祭神は第17代の薩摩藩主島津義弘である。妙円寺はかつては義弘の菩提寺でもあった。

---

61 この節の記述は全て、筆者による自彊学舎関係者インタビューによる。



(現在の「妙円寺参り」の様子：写真は「自彊学舎」提供)

慶長5年（1600年）の旧暦の9月15日の早朝から始まった関ヶ原の戦いは徳川家康を総大将とする東軍の勝利に終わった。関ヶ原の戦いで島津義弘は、最初、東軍の伏見城に入ってこの城を守備する予定であったといわれる。だが、鳥居元忠の反対にあい、仕方なしに西軍に加わった。闘いは小早川秀秋の寝返りによって西軍は総崩れになった。この時、義弘軍は東軍に囲まれたが、果敢に敵中突破を強行して戦場を脱出し近江から伊勢路を落ちのびて行った。千数百人いた義弘の手勢は主従わずか数十人まで減ってしまい、義弘の甥である島津豊久は戦死した。義弘は60歳を超えていたが初めての敗戦であり、島津家の家中にとっては重大な大事件であった。

そして薩摩藩ではその後、関ヶ原の戦いでなくなった将卒の無念に思いを馳せ、藩士たちの菩提を弔うためにいつの頃からか、鹿児島城下から伊集院の妙円寺まで徒歩で参詣を始めるようになった。行事としての妙円寺参りがいつから始まったかは定かではない。少なくとも江戸時代から始められたことは間違いがない。妙円寺参りは、水上坂を越え、横井を通り、伊集院へと往復10里（約40キロ弱）の道である。「チェスト関ヶ原」と大きく書いた幟などを押し立てて行ったという。薩摩隼人は、何事かを為さんとする時、「チェスト行け」とか「チェストー」と絶叫することがあるが、これは関ヶ原の敵中突破の故事にならって奮起するための闘いの声である。妙円寺参りをする鹿児島の二才（子供）達は関ヶ原の苦難をしのぶために、薩摩隼人らしい美意識によって、いかに難儀をして歩き抜くかを競った<sup>62</sup>。

曾我どんの傘焼きは、旧暦に5月28日に甲突川の河原で繰り広げられる祭典である。かつては天保山や与次郎ヶ浜でも同じような火と水の祭りが行なわれ鹿児島の夏の風物詩となっていた。

この行事は、鎌倉時代の有名な曾我兄弟の敵討に由来する。建久9年（1193年）5月28日（旧暦）、源頼朝は富士の裾野で巻狩りを催した。その夜は激しい豪雨だったが、曾我十郎祐成と弟の五郎時致の兄弟が、18年の苦労の末、父の仇である工藤祐経を討ち取った。この時、兄弟は闇夜のなかで、松明の代わりに唐傘を燃やして周囲を照らし、祐経の陣屋に討ち入った。この故事にちなんで、曾我兄弟の孝行心を讃えて起こったのが、「曾我どんの傘焼き」である。

---

62 金蔵照雄『隼人の末裔 薩摩の男たち』（春苑堂出版・平成15年）pp. 195-198参照。

戦前の鹿児島では、この日が近づいてくると二才（大きい目の子供。若者）の指示で稚児（7才から14才の子供）が郷中の家を一軒一軒まわって、古いから傘を集めてまわった。11歳から14歳までの長稚児（おせちご）1人と7歳から10歳までの小稚児3人くらいが一組となって各家庭をまわると、どこの家庭でもかねてから準備しておいた古傘をわたしてくれた。この間に稚児たちは、社会生活のしきたりやルール、礼儀を身をもって体験していった。これらの行事で稚児たちは大人の手を借りることなく、長稚児や二才たち年長者の指導のもと自然と集団生活や共同作業のルールを身につけていった。大人たちはそれを見守り、援助はするものの干渉はせず、若者達の自主性を尊重した。

これらの年長者（二才）が年少者である稚児（さらに稚児に長稚児と子稚児がある）を指導するというのが郷中教育の特色であった。稲盛も日常的に、年長者から生活の様々な局面で厳しく指導をされて育っていった。

平成23年、筆者は実際に曾我どんの傘焼きを見てきた。平成22年は口蹄疫の為に中止になったのだが、平成23年は2年振りに行われるとのことだったので、平成23年7月17日の夕刻から、傘焼きの行われる甲突川の高麗橋と高見橋の間に行った。夕方の6時ごろからすでに人は多く集まっていた。まだ周囲は明るく、川に築かれた土俵のような土を四角くもった部分に色とりどりの和傘が組み合わされて積み上げられていた。今では日常生活で和傘を使うことなど滅多にないので、この行事は、岐阜県の和傘振興会の協力を得て成り立っているとのことである<sup>63</sup>。



（平成23年の「曾我どんの傘焼き」の様子：筆者撮影）

63 「鹿児島三大行事保存会」HP (<http://kasayaki.karakasa.com/>) 参照。



稲盛は、また自伝の中で「鹿児島では小学校五年生頃になると、夕方から講堂の板張りの床に正座させられ、校長先生が『赤穂義士伝』を読むのを聞かされた。南国鹿児島といってもこの季節はさすがに寒い。冷たさと足のしびれで話を聞くどころではない。これが夜の十時ごろまで続く」と述べている<sup>64</sup>。

これは、旧暦の12月14日に行なわれていた「赤穂義臣輪読会」の思い出のことである。

「赤穂義臣伝輪読会」も「曾我どんの傘やき」同様、薩摩（鹿児島）のできごとではないが鹿児島において長い時間傳承されてきた行事である。『赤穂義臣伝』を読み通す輪読会がいつから始められたかははっきり分かっていない。だが、学舎を中心にして戦前までは県下各地で盛んに行なわれていたという。

旧暦12月14日の夕刻になると、若者達は学舎（地方にあっては学校や青年舎）に集まる。そして一同が正座するなか、15巻に及び大冊の『赤穂義臣伝』の輪読が始まる。読み手は交替しながら夜を徹して夜明けまで朗読が続けられる。現在では以前のように大々的には行なわれてはおらず、これらの行事は年々衰微の一途をたどっている。今日では、鹿児島三大大行事保存会の努力に頼って命脈を保っているのが実情のようである<sup>65</sup>。だが、かつての薩摩の若者たちは、このようにして稚児の時代から、忠孝の道や、我慢、忍耐の大切さなどを学んだのであった。稲盛が終戦を迎えたころは、これらの行事もまだ盛んに行なわれていた。

また当時の小学校では示現流の稽古は義務付けられていたとのことであった。崎元氏の証言では、小学校に行けば、太刀打ちをまず、10から15分やってから教室に入ったという。示現流について稲盛は、自伝の中で「…弱虫がまともに育ったのは鹿児島独特の郷中教育で鍛えられた面がある。…薩摩藩に伝わる示現流の稽古もあった<sup>66</sup>」と述べている。

稲盛の習った示現流はどのようなものだったのであろうか。今日、「じげんりゅう」と呼ばれるものには、東郷流と薬丸流がある。この両者は違った流派であるが実際には鹿児島以外ではかなり混同されている。



（「自顕流」の奉納演武の様子：写真は「自彊学舎」提供）

64 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）p. 22。

65 金蔵照雄『隼人の末裔 薩摩の男たち』（春苑堂出版・平成15年）p. 205参照。

66 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）p. 26。

薬丸流は（幕末の）郷中教育に取り入れられた。そのために、幕末期に下級武士の間に飛躍的に広まった。そして、その教育を受けた門弟の中から維新の元勳が多く出たこともあり、「明治維新は薬丸流が叩き上げた」とも言われている。幕末の京都で新撰組が畏れたのもこの薬丸流である。どちらを習うかは学校によって違い、西田小学校は東郷流だった。このことから、稲盛が西田小学校で稽古をしていたとすると、薬丸流ではなく、東郷流示現流を習っていたと考えるのが自然である。

インタビューの中でもこの示現流については質問した。吉村氏によると自彊学舎では、自身が通われていた当時は薬丸（自顕流）を教えていたという。松山氏の証言によると、昭和15年（1940年）までは薬丸流、その後、昭和16年（1941年）から昭和56年（1981年）は東郷示現流に変わり、最近では薬丸流に戻っているという。

稲盛の自伝には「…薩摩藩に伝わる示現流の稽古」<sup>67</sup>とあり、本人が「示現流」との記述をしている以上、東郷流を習っていたと解釈するのが自然である。学舎が薬丸流だったことから、短期間だけ薬丸流の方も習った可能性も完全には否定できない。

（東郷）示現流は、古くから伝わった方の示現流であり、幕末に下級武士を中心に流行した方の（薬丸）自顕流とは別である。しかし、巷間「示現流＝一撃必殺」というイメージがあるためか、両者を混同した記述もしばしばものの本には見られる。「薬丸流（自顕流）」も「（東郷）示現流」も「一の太刀を疑わず」「二の太刀要らず」といい、先手必勝の鋭い攻撃が特徴である。稽古での違いは、示現流が立木に向かって激しく左右に攻撃するのに対し、（薬丸）自顕流は、横木を反復して打つ練習をする。

先に確認したことと重複するが、当時は、県下の小学校で「郷中教育」を行っており、ある学舎でのみやっているというものではなかった。その中に剣術もあった。当時の郷中教育について崎元氏は、「元々、薩摩の気風の中で続いてきたものではあったが、戦争という時代特有の影響もあったのではないか」ということをいわれた。薩摩・鹿児島は西南戦争以来、ずっと戦争が続いてきた。元々、薩摩の気風というものがあり、近代の西南戦争以来ずっと戦争が続いており、さらには、第二次大戦となった。郷中教育にも当時の国策にあった少年を育てるという部分は当然あったのであった。

戦争の時期は、島津公に忠誠を誓うという部分を、国家（天皇陛下）に置き換えるとそのまま、戦中の教育に合うので、戦争に利用されたという側面があった。また、元々、郷中教育は武士団養成のための教育だから、戦時中の教育とは合致したのだった。

戦後、GHQが実際のところ、どの程度郷中教育を危険視したか、見逃されたのかは不明である。だが、戦後は混乱期で経済的理由もあったので、学舎活動がすぐには復興できなかったのは事実であった。

戦後のGHQがどう判断したかを別にしても、戦前の郷中教育が、第二次世界大戦とは切っても切り離せないものとの認識は実態に近いものであろう。郷中教育の場を利用して軍国主義的な価値観が子供たちに刷り込まれて行ったことは想像に難くない。但し、これは日本全国が（今日の言葉でいう）軍国主義の時代だったので、鹿児島が特別に好戦的な教育をしたということではない。

当時の子供の生活は、全て戦時体制に合わされており、女性の服装はモンペだった。学

67 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）p. 26。

校でも軍事教練があり、徴兵を受ける前の子供を訓練したという。鉄砲の打ち方などの訓練があった。また、当時は職業軍人の教員が学校にいた。教員で徴兵された人が学校に戻ってきたのではなく、職業軍人で戦地から帰ってきて教員になった人たちがいて、それらの人が学校に配属されていたのである。

崎元氏の回想によれば、当時の中学生は軍事教練一点張りであり、軍事教官という人がおり、彼らは軍人上がりで、位は少尉や大尉の人もいたとのことであった。軍事教練は中学以上、小学生はやらなかったという。崎元氏が軍事教練を受けているので、同級生であった稲盛も小学時代には訓練を受けたということが考えられる。

### (7) 鹿児島一中の受験不合格と鹿児島中学への進学

小学校の卒業が近づいてきた昭和19年（1944年）の春、稲盛は鹿児島第一中学校を受験した。だがここで挫折に見舞われる。成績はほとんど「乙」でも何とかかなると思われていたのだが、稲盛は不合格になり、やむなく、西田小学校卒業後は尋常高等小学校に入学した。その時、稲盛は他の中学校への進学は考えておらず、ついこの間まで自分の子分だったものが一中の制服で歩いていくのを見て、非常に惨めな思いにとらわれた<sup>68</sup>。

翌年、昭和20年（1945年）稲盛は、担任の土井教諭の勧めで、再度、鹿児島一中を受験した。しかし、また不合格となってしまった。稲盛が不合格になった理由には、当時の時勢と、稲盛の内申書が悪かったことが考えられる。

当時の試験の内容については、軍国主義少年を育てるためのものに大きく変更されたという事実があった。京セラ秘書室経営研究課粕谷昌志氏の研究によれば<sup>69</sup>、昭和15年（1940年）には、入学準備教育の弊害を正すために、また国民教育の確立と徹底を期するために、中等学校入試法が改善された。この改革では学科試験を抜きにし、小学校長の内申書と口述による人物検査、身体検査によって選抜することになったのだった。昭和17年（1942年）には、学業評価も甲・乙・丙…を廃して、平素の状況・実践態度を総合的に評価して、優・良・可とし、席次・操行をつけないことにしたとなった。

『鹿児島県教育史』によると人物をみる口頭試問では次のような問いがなされたという。昭和19年（1944年）3月の口頭試問では、1. 「なぜ中学校を受けるのか」、2. 「爆弾が落ちて2秒して爆発した。この音響からして落下地点までの距離はいくらか」、3. 「足の指を負傷した。どこを抑えたら血が止まるか」、4. さつまいもを一個おき、「重さはどれくらいか」「成分は何か」「容量はどれくらいか」「どんなに利用されるか」また、昭和20年（1945年）3月の口頭試問では、1. 「桜と日本精神の似ている点をあげよ」、2. 「桜の名所をあげよ。それについて歴史的に思い出すことを述べよ」、3. 「吉野朝時代の忠臣3人をあげよ」、4. 「桜の花を詠み入れた和歌をいへ」、5. 「それは誰の作か」といった

68 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）p. 30。

69 粕谷昌志「自主研究『稲盛名誉会長 思想の源流』No1『生命の実相について』（研究レポート1「京セラ秘書室経営研究部」）によると、『鹿児島県教育史』（鹿児島県教育委員会編・1976年）には、「1940年には、入学準備教育の弊を正し、国民教育の確立と徹底を期するために、中等学校入試法が改善した。学科試験を抜きにし、小学校長の内申書と口述による人物検査、身体検査によって選抜することにした。1942年には、学業評価も甲・乙・丙…を廃して、平素の状況・実践態度を総合的に評価して、優・良・可とし、席次・操行をつけぬことにした」とあるとのことである。

ようなものであった<sup>70</sup>。

この年の8月には終戦になるのだが、この時はまだ、軍国青年育成を目標とする教育が最後の時期であり、中学の入学試験も、より軍国主義を反映したものとなっていた。粕谷氏は、稲盛がこの試験に合格できなかったのは、「日頃の就学態度など内申書重視の入学試験に変更された上に、時勢を反映して、1945年の口頭試問にあるように、当人の学力や能力を測るのではなく、軍国少年を育成する方向に選択基準が大きく修正された。このことが名誉会長の2度の受験失敗に大きく影響したことが容易に想像される」と述べている<sup>71</sup>。確かに、ペーパー試験による学力検査よりも今日の言葉でいう面接重視の試験であったことには間違いがない。

この時期の旧制中学の試験については筆者のインタビューを行った大迫氏の証言もある。今、見たように、当時の試験は全てが口頭試問であった。だが、大迫氏の証言によれば、試験は人物をみる口頭試問だけではなく、学科試験もあったようである。ここは多少、上述した内容と矛盾するようでもあるが、大迫氏は以下のように述懐している。

「戦争中（太平洋戦争中）の旧制中学校の入学試験は筆記試験ではなくて、県下一円どの旧制中学校も総ての学科が口頭試問形式で試験が行われた。国語、算数の外に一般常識（今で言う社会科）というものだった。小生は第一の目標を県立第二中学校（今の甲南高校）を受験したが、当時小生は口下手の上、算数の問題では慌ててしまって、分数計算を分子と分母を勘違いして答えてしまったので、あえなく不合格だった。しかし、すべり止めに第二の目標校が私立の鹿兒島中学校だったので無事合格し、嬉しかったことを覚えている。当時の世相は、先づ何よりも旧制中学校に入学することが、将来に備えての第一関門とされていて、旧制中学校への入学が何にもまして必須条件であったように思う<sup>72</sup>」。

戦争中に、全ての試験が口頭試問によって行われていたことは同じでも、時期によって口頭試問の内容が「人物検査」だけの時期と「学科試験」も含む年があったということだろうか。それは考えにくい。問題は違ってもいても基本的な方針は県下一円で同じであったからだ。大迫氏は稲盛とは違って、二中（現在の甲南高校）を受験しておられるが、「県下一円どの旧制中学校も総ての学科が口頭試問形式で試験が行われた<sup>73</sup>」との記述から、大迫氏が二中を受験した年と同じ年に稲盛が受けた一中の試験も、口頭試問には人物試験と学科試験の両方があったと考えることができる。ペーパー試験はなく、全て「口頭試問」形式でなされたが、内容は人物、道徳、思想的な資質をみるものと学制的なものが混在していたと考えるのが自然だろう。

あくまでも「口頭試問」は「口頭試問」であって、表向き、「人物検査」か「学科試験」かの区別はなく、複数の問題の中に、人物、道徳的な側面を見るものと、学制的な能力を見るものが混在しており、そのことを、大迫氏は「総ての学科が口頭試問形式で試験が行われた」と述懐されているのかもしれない。『県教育史』から考えると、そう考えるのも

70 前掲の粕谷氏の研究の出典はいずれも『鹿兒島県教育史』（鹿兒島県教育委員会編・1946年）。

71 粕谷昌志「自主研究『稲盛名誉会長 思想の源流』No1『生命の実相について』（研究レポート1「京セラ秘書室経営研究部」）p. 7。

72 『わが家のルーツわが家の年輪の軌跡』（大迫隆氏の私家版自伝・2003年）p. 11。

73 前掲書 p. 11。

自然である。稲盛が受けた試験も、軍国主義的な世相を反映した選択基準で行われていたという側面はあるものの、それと共に、単に人物検査、道徳的資質をみるだけのものではなく、—それとは分からぬ形で—学科的な問題も含まれていたのかもしれない。

鹿児島一中の試験には二度不合格になった稲盛であったが、再び恩師土井教諭の勧めもあって、今度は私立鹿児島中学校を受験する。当時の稲盛は結核の微熱も続いており、また戦争の空襲が鳴りやまないという状況であった。防空頭巾をかぶった土井教諭が鹿児島中学の願書提出締め切りの日に受験手続きをしてくれた。稲盛自身は病気療養中であり、また、一中に二回不合格となっていたので、気持も滅入っており、受験には消極的であった。この時は、家族も稲盛自身ももう就職をしようと考えていた<sup>74</sup>。

しかし、土井教諭の熱心な勧めで鹿児島中学を受験した稲盛は合格し、中学進学を果たすこととなった。

自伝には『今日が願書の締め切り日だった。とにかく受けてみなさい』といわれても、一中に二回もすべったし、療養中でもあり、私は『もうけっこうです』という気持ちだった。私も家族もこれは就職するしかない、そんな気になっていた。それが先生の熱意に押し切られる形で受験することになり、ようやく中学に進むことができた。あの土井先生の厚情がなかったらどうなっていただろう。心の持ち方といわれても、あまりのつきのなさに暗然とするばかりだった<sup>75</sup>とある。

当時、立身を目指すものや上級学校へ進むことを望むものにとっては旧制中学に進むことは第一関門であったのだから、稲盛にとっては、ここで尋常小学校にとどまらず、例え第一希望ではなかったにしても、旧制中学校へ進学したことは後に大きな意味を持つこととなった。昭和20年（1945年）の4月、戦争の終わる年の春であった。一年遅れでの中学進学だったが、相変わらず空襲が激しく、勉学に励めるという雰囲気ではなかった。

#### (8) 病気になり、谷口雅春『生命の真相』と出会う

一中の受験、失敗から尋常小学校へ入学、(旧制)鹿児島中学進学の時期であるが、稲盛は後にも大きな影響を受け続ける宗教との出会いがあった。中学の入学時期からは前後するが、ここでそのことに触れておきたい。

昭和19年（1944年）の暮れ、稲盛は12歳のころ、結核の初期症状である肺浸潤にかかった。当時、結核は死にいたる病と考えられていた。満州（中国東北部）で警察官をしていた叔父の兼一が一時帰休をしたのだが、稲盛はこの叔父からシラミをもらい、体中が食われて発熱してしまったのである<sup>76</sup>。

結核であることを心配した母キミは稲盛を病院に連れていった。結果は結核の初期症状である肺浸潤という症状だった。肺浸潤というのは、結核による肺の変化の一種で、浸潤陥落型ともいい、細菌感染によって肺の一部が生チーズのような凝固した膿をつくり、これが空洞や結核腫などに変化することもあるという病状である。結核感染のほとんどは、結核菌をもった人の咳やくしゃみによって空中に飛び散った結核菌を吸うことによる感染

---

74 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）p. 34。

75 前掲書p. 34。

76 前掲書pp. 31-32。

である。ほとんどの場合は発病までは至らないが、栄養状態が悪い時や体調不良の時には発病することがある<sup>77</sup>。

母のキミが結核を心配したのには理由があった。家の離れにいた父のすぐ下の弟夫婦が共に結核で亡くなった後に、末弟までが療養中だったからだ。この頃は結核という病気は不治の病といわれており、患者がでた家は周囲に分からないように家で治療をしていた時代だった。しかし、実際には隠しても周囲には分かるもので、当時、稲盛家は「稲盛さんのところは結核の巣」とまでいわれた。このような時代背景と稲盛家の過去から稲盛も意気消沈し、自分も血を吐いて痩せていくのかと心配な日々を送った<sup>78</sup>。

この時、稲盛は後の人生にも大きな影響を受けることになる谷口雅春の『生命の実相』に出会うことになる。自伝には以下の記述がある。

「熱にうなされて病床に伏せっていると、隣の家の借家住まいの奥さんが生け垣越しに声をかけてきた。『和夫ちゃん、ちょっと難しいけどこの本読んでごらん』と渡されたのは『生長の家』の主催者、谷口雅春の『生命の実相』である。もちろん何の本かさっぱりわからない。だが、同居の叔父も結核で明日をも知れないという時なので、藁にもすがる気持ちで、むさぼるように読んだ。ページをめくっているうち、こんなくだりに出会った。『われわれの心の内にそれを引き寄せる磁石があって、周囲から剣でもピストルでも災難でも病気でも失業でも引き寄せるのであります』。子どもながらに思い当たることがあった<sup>79</sup>。加藤氏の『ある少年の夢』にはこの『生命の実相』を貸してくれた人は林田バスの運転手をしていた長野という人の奥さんだったとある。

この本には、林田さんの奥さんが「『生命の実相』全巻を枕元にもってきてくれた」<sup>80</sup>。と書いてあるが、稲盛がこの時に読んだ『生命の実相』は全巻ではなかったようだ。稲盛が最初に読んだ『生命の実相』については京セラ経営研究部の粕谷昌志氏による詳しい研究がある<sup>81</sup>。粕谷氏は、稲盛が最初に読んだ『生命の実相』がどのような本であったかを突き止めるべく努力をされたが、粕谷氏のレポートの中には、レポート提出後に、稲盛本人から「自分が隣家から借りた『生命の実相』は、黒革表紙の豪華本（1巻本）であったことを思い出した<sup>82</sup>」という指摘があった旨が書かれている。

生長の家は、昭和5年（1930年）の立教で、創始者は谷口雅春である。谷口雅春は、明治26年（1893年）11月22日、兵庫県八部郡烏原村（現在の神戸市兵庫区）生まれ。大正3年（1914年）、早稲田大学英文科を中退、求道生活に入る。やがて「人間・神の子」善一元の世界、万教帰一の啓示を受け、この真理を万人に伝えたいとの悲願の下に個人雑誌「生長の家」誌を昭和5年（1930年）3月に創刊した。以後、同誌の普及に連れ、活動は後に宗教法人「生長の家」に発展していった。昭和60年（1985年）6月17日、満91歳

77 粕谷昌志「自主研究『稲盛名誉会長 思想の源流』No1『生命の実相について』（研究レポート1「京セラ秘書室経営研究部」）pp. 5-6。

78 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）p. 32。

79 前掲書 p. 32。

80 加藤勝美『ある少年の夢』（現代創造社・昭和54年）p. 63。

81 粕谷昌志「自主研究『稲盛名誉会長 思想の源流』No1『生命の実相について』（研究レポート1「京セラ秘書室経営研究部」）参照。

82 前掲論文 p. 9。

で亡くなった<sup>83</sup>。

宗教法人生長の家（以下、生長の家と略す）のHPには「生長の家の本尊は『生長の家の大神』と仮に称していますが、『生長の家』とは『大宇宙』の別名であり、大宇宙の本体者（唯一絶対の神）の応現または化現のことです。正しい宗教の本尊は、この唯一絶対なる神を別名で呼んでいるものであるとして、いかなる名称の神仏も同様に尊んで礼拝します。また、生長の家では、本尊を現す像などは造らず、あらゆる宗教の本尊の奥にある『実相』（唯一の真理）を礼拝するため、『實相』と書いた書を掲げています」という記述がある<sup>84</sup>。

生長の家の基本的な教えは、「唯神実相（ゆいしんじっそう）」「唯心所現（ゆいしんしょげん）」「万教帰一（ばんきょうきいつ）」の3つである<sup>85</sup>。

生長の家のHPには以下の解説がなされている。

「唯神実相」とは『唯神実相』の『実相』とは本当にある世界のことであり、唯一にして絶対の神がつくられた世界のことであり、実相の世界は神の御徳が充満していて、人間は神の子であり、神と自然と人間とは大調和している世界です。つまり本当に存在するのは唯、神と神の作られた完全円満な世界だけであるという意味で『唯神実相』と呼んでいます。一方、人間の感覚器官で捉える世界を『現象』と呼んでいます。現象の世界は、全体の膨大な情報量のうち、人間の肉体の目、耳、鼻、口、皮膚で濾（こ）し取ったごく一部の不完全な情報を、脳が組み立て直して仮に作り上げている世界です。ですから、世の中には戦争やテロがあったり、病気などの不完全な出来事があるように見えますが、それらはすべて『現象』であって、本当にある世界の『実相』ではないと説明しています<sup>86</sup>。

「唯心所現」については、『唯心所現』とは、この現象世界は人間の心によって作り出している世界であるという教えを表現しています。唯心所現の「心」とは「コトバ」であり、コトバには行動で表現する「身（しん）」、発声音で表現する「口（く）」、心の中で思う「意（い）」の3つがあり、これら身・口・意の三業を駆使することで、唯心所現の法則によって現象世界をいかようにでも作り上げることができるのです。唯心所現の法則は厳密かつ公平であり、悪いコトバを使えば、悪い世界が現象世界に現れてしまいます。従って善い世界を実現させようと思うなら、実相世界の善きコトバ、神様の御徳である、智慧・愛・生命をコトバで表現すればよいこととなります<sup>87</sup>。

「万教帰一」については、『万教帰一』とは、万（よろず）の教えを一つ（生長の家）にするという意味ではありません。これは後ろから読んで、一つの教えが万の教えとして展開していると説明しています。宗教に違いがあるのは国や地域、民族によって服装が違いうように、宗教も文化的な違いが現れているからだと言えます。目玉焼きに喩えると、中心部分の黄身を普遍的な根本真理と見立て、それぞれの宗教が共有していると考えます。一方、周縁部分である白身は、文化、民族、時代などの違いによって変化している部分だと

---

83 宗教法人生長の家HP (<http://www.jp.seicho-no-ie.org/>) 参照。

84 前掲「生長の家」HP参照。

85 前掲「生長の家」HP参照。

86 前掲「生長の家」HP参照。

87 前掲「生長の家」HP参照。

考えると分かりやすいでしょう。世界の各宗教が、この中心部分（黄身）の共通性と周縁（白身）の多様性をお互いに認め合うことによって、宗教間の対立は消えることになります。それを端的に表わした言葉が『万教帰一』の教えなのです<sup>88</sup>。

生長の家の「生」とは時間の世界をさし、「長」とは空間の世界を指す。また「家」とは時間と空間が結合してできた大宇宙を指す。したがって生長の家の神というのは大宇宙の神と説明されている<sup>89</sup>。稲盛は自伝の中にはそれほど、生長の家から受けた影響については記述していないが、前述の粕谷氏はレポートの中で、「太初に『生命の実相』ありき。稲盛名誉会長の思想がいかに形成されていったのか。この重大なテーマにあたり、まず最初に取り上げるべきは、名誉会長が結核の中で貪り読まれた『生命の実相』であろうと考える。名誉会長ご自身も、ご自分の思想形成にとって多大な影響を及ぼしたものとして、著作、盛和塾講話、社内講話等々、様々な機会をとらえて『生命の実相』体験について述べられている<sup>90</sup>」と述べ、稲盛の思想形成を知る上では最も重要なものの一つに位置付けている。

また、粕谷氏のレポートには、稲盛自身の以下の言葉が引用されている。生長の家についての稲盛の公式の場での発言を引用する。「私の人生観を構築するのにたいへん役にたった」（盛和塾富山：1990. 9. 17）、「小さいころに読んだ谷口雅春さんの教えと天風さんが説く教えは、いつも心の根底にあります」（盛和塾大阪：1992. 10. 28）、「谷口雅春さんが説いていた人間としてどうあるべきかということと、子供の頃に両親から教わったしていいことを悪いことを規範にし、判断基準にして経営して来た」（盛和塾宮崎：1994.10. 28）<sup>91</sup>というものである。

筆者自身も稲盛の思想を語る際に、谷口雅春から受けた影響の大きさは他のどれにも勝るとも劣らぬものであると考える。稲盛の思想について言及するものは、仏教とその最初の邂逅であった「かくれ念仏」のみを強調するが、筆者はそれだけでは説明できないと以前から考えていた。勿論、稲盛の説く「利他」や感謝の念をもつことの重要性は、仏教的思想に基づくものであるが、稲盛は同時に、意志の強さや心の中にあるものが実人生で実現するという強い考え方をもち、むしろ経営者として成功する過程ではこの考え方の方をより強くもっていたとさえ思われる。

例えば稲盛の「経営12カ条」<sup>92</sup>の中の第3条の「強烈な願望を心に抱く—潜在意識に透徹するほどの強く持続した願望をもつこと—」や第7条の「経営は強い意志で決まる—一

88 宗教法人生長の家HP (<http://www.jp.seicho-no-ie.org/>) 参照。

89 小野泰博「生長の家—日本的集合宗教の典型—」(『新宗教の世界V』大蔵出版・1979年) p. 58参照。

90 粕谷昌志「自主研究『稲盛名誉会長 思想の源流』No1『生命の実相について』(研究レポート1「京セラ秘書室経営研究部」) p. 2。

91 前掲書 p. 2。

92 稲盛の経営に関する考え方をまとめたもので以下の12条からなる。第1条は「事業の目的、意義を明確にする」、第2条は「具体的な目標を立てる」、第3条は「強烈な願望を心に抱く」、第4条は「誰にも負けない努力をする」、第5条は「売り上げを最大限に伸ばし、経費を最小限に抑える」、第6条は「値決めは経営」、第7条は「経営は強い意志で決まる」、第8条は「燃える闘魂」、第9条は「勇気をもって事にあたる」、第10条は「常に創造的な仕事をする」、第11条は「思いやりの心で誠実に」、第12条は「常に明るく前向きに、夢と希望を抱いて素直な心で」である。この中の特に第3条や第7条は、心の強さ、願望、潜在意識、強い意志などが強調されている。



営には岩をもうがつ強い意志が必要—」などは強い意志の必要性和潜在意識の重要性を説くもので、これらはまぎれもなくニューソート思想の影響を受けている。第12条の「常に明るく前向きに、夢と希望を抱いて素直な心で」もその流れと考えて良い。願望実現のために強い意志が必要であるという成功哲学を思わせるこの思想は鹿児島独自の「かくれ念仏」や仏教の利他の教えの中にあるものではない。明らかに『生命の実相』から影響を受けたものである。

ニューソート思想とは、19世紀の後半にアメリカで起こった基督教の新しい流れで、既存の教会や会派の解釈にとらわれることなく、聖書に独自の解釈を加えるものである。成功哲学や自己啓発のルーツの一つである。そもそもは禁欲主義を説いたカルヴァン主義への反発として起こった運動であった。日本でもベストセラーになっている「マーフィーの法則」のジョゼフ・マーフィーや、同じく日本でもよく読まれている『人を動かす』のデーブル・カーネギーなども、その流れの人物である。谷口雅春が影響を受けたホルムスはニューソートの中興の祖と呼ばれる人物である<sup>93</sup>。谷口はニューソートを「光明思想」と訳した。これは端的に言えば、気持ちを明るくもつことによって運命が開かれるという思想である。

稲盛の有名な「六つの精進」の中の6つ目に「感性的な悩みをしない」というものがある。それまでの5つは「誰にも負けない努力をする」、「謙虚にして驕らず」、「反省のある毎日を送る」、「生きていることに感謝する」、「善行、利他行を積む」という、自分でできる努力をした上で、後は感謝の念を持ち、他を利するために生きるべきであるという「精進」の内容を説いているのに対し、最後の6つ目だけが「悩まない」という「精進」とは違った内容のものになっている。これも稲盛の「心の中にあるものが現実に起こる」という考え方、ニューソート思想の影響を受けているものだとみることが可能である。

人生における精進や利他行の重要性を説く稲盛が、「反省はしても悩みはしない」という考え方をことさらに強調するのは、結核の経験とこの時に出会った『生命の実相』の影響によるものであることは間違いがないであろう。自伝にも、次のような記述がある。結核の手前の肺浸潤になり『生命の実相』に出会った時の記述である。

「子どもながらに思い当たることがあった。結核の叔父がいる離れの前を通る時、私は感染するのが怖くていつも鼻をつまんで走り抜けた。父には『うつるからそこは通ってはいけない』といわれていた。私は自分でも医学の本を借りてきて少しは勉強し、結核菌は空気感染するというのを知っていた。それで鼻をつまんだのだが、そこは子どもだ。(中略) その父も、平然と歩いていた兄も別条なく、誰よりも注意していた私だけがかかってしまった。(中略) そこから逃げようとしていた私がそういう目にあったのは、結核を気にする心が災いを呼びこんでしまったのではないか。この事実をみただけで、ああ、谷口さんがいっておられるのはその通りだと思った。たとえ自分が結核になっても弟の面倒を徹底的にみるという父の献身的な肉親への愛は実に尊い。いってみれば他人である自分の妻は近づけず、すべて自分一人でやるという死を覚悟した決意でもある。こういう大きな愛に包まれた父には結核菌は取り付きもしない。子どもながらに猛然と反省したことを覚

93 粕谷昌志「自主研究『稲盛名誉会長 思想の源流』No1『生命の実相について』(研究レポート1「京セラ秘書室経営研究部」) p. 14.

えている。この本は心のありようを考えるきっかけを私に与えてくれた<sup>94</sup>。

この経験から稲盛は、心にあるものが現実の実人生を形成して行くという考えかたを強めて行った。『生き方—人間として一番大切なこと—』にも、次のような記述がある。

「人生はその人の考えた所産であるというのは、多くの成功哲学の柱となっている考え方ですが、私もまた、自らの人生経験から、『心が呼ばないものが自分に近づいてくるはずがない』ということを経験として強く抱いています。つまり実現の射程内に呼び寄せられるのは自分の心が求めたものだけであり、まず思わなければ、かなうはずのこともかなわない。いいかえれば、その人の心の持ち方や求めるものが、そのまま人の人生を現実に形作っていくのであり、したがってことをなそうと思ったら、まずこうありたい、こうあるべきだと思うこと。それもだれよりも強く、身が焦げるほどの熱意をもって、そうありたいと願望することが何より大切になってきます<sup>95</sup>。

また、「もちろん、このことは仕事に限ったことではありません。人生において何かをなそうとするときにも、つねに理想形をめざしてやるべきで、そのためのプロセスとして『見えるまで考え抜く』、つまり思いの強さを持続することが必要になってくるのです<sup>96</sup>」とも述べている。

さらには『働き方—「なぜ働くのか」「いかに働くのか」—』（三笠書房・2009年）の中にも「願望を『潜在意識』に浸透させる」という項目があり、稲盛は次のように述べている。

「思いは必ず実現する。それは、人が『どうしてもこうありたい』と強く願えば、その思いが必ずその人の行動となって現れ、実現する方向におのずから向かうからです。ただそれは、強い思いでなければなりません。漠然と思うのではなく、『何がなんでもこうありたい』『必ずこうでなくてはならない』といった、強い思いに裏打ちされた願望、夢でなければなりません。寝食を忘れるほどに強く思い続け、一日中、そのことばかりをひたすら繰り返し考え続けていくと、その思いは次第に『潜在意識』にまで浸透していきます。『潜在意識』とは、自覚されないまま、その人の奥深く潜んでいるような意識のことです。普段は表に出てきませんが、思いもかけないとき、またいざというときに現れて計り知れない力を発揮します<sup>97</sup>。

これらは多くの成功哲学の説くところであり、宗教というよりも、どちらかというとき自己啓発の団体などでもよく説かれる内容である。潜在意識の重要性については稲盛の「哲学」を語る際には絶対に欠かすことができない要素である。著書の多くに、謙虚さや感謝の念をもつことの重要性を説く部分と同等かそれ以上の比率で潜在意識の重要性については出てくる。稲盛の「哲学」が単に正しいことを実行するというものではなくて、自身の夢をどう叶えるかという問題意識から組み立てられている所以である。

稲盛は潜在意識が持つ力については谷口雅春の『生命の実相』のみならず中村天風の影響も強く受けている。だが、まず最初に意識したという意味においては、肺浸潤にかかっ

94 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）pp. 32-33。

95 稲盛和夫『生き方—人間として一番大切なこと—』（サンマーク出版・2004年）p. 40。

96 前掲書 p. 47。

97 稲盛和夫『働き方—「なぜ働くのか」「いかに働くのか」—』（三笠書房・2009年）pp. 82-83。

たこの少年期に『生命の実相』に出会ったことは、何にもまして大きな出来事であったと考えられる。

生長の家は宗教団体であり、谷口雅春は宗教家であるが、生長の家の教義や教えは純粹な宗教的なもののみから構成されているわけではない。粕谷氏のレポートは、谷口の精神遍歴にも触れている。この中で、粕谷氏は「生長の家の教義は、上記のように（年表が示されている）谷口雅春氏の様々な思想遍歴を経て形成された。谷口氏の理想主義的、あるいは求道的な姿勢から、文学、諸宗教の様々な思想を横断し、『万教帰一』の通り、そのエッセンスの蓄積が教団の教義を構成している。しかし、最も重要なのは、やはりホルムスの著作との出会いであろう。それまでに遍歴した思想はいわば思想の断片を形成するパーツに過ぎず、ホルムス（ニューソート）との出会いにより、ようやく教義の全体像が形作られたという意味で、ニューソートは言うならば、生長の家にとってアッセンブリ工程であったと述べよう」と述べている<sup>98</sup>。

稲盛は多くの著作や講演で、経営や人生において、心の持ちようこそが決定に重要であることを繰り返し説いている。粕谷氏も指摘するように<sup>99</sup>稲盛はその後、中村天風の著作やニューサイエンス、松下幸之助の「自然の理法」などの影響も受けている。これも考慮せねばならない。さらには、よく稲盛が語る安岡正篤による『陰陽録』（いんしつろく）の解説などの影響も考慮する必要がある。粕谷氏はこのような世界観は『生命の実相』に固有のものではなく、東洋思想にある『易経』の中にある「積善余慶」に見ることもできる<sup>100</sup>。と指摘している。したがって、稲盛の「心が呼ばないものが自分に近づいてくるはずがない」ということを信念について、少年期のこの『生命の実相』との出会いのみが決定的かつ唯一の影響だということはいえない。しかしその源流が少年時代の肺浸潤の体験とその時期に出会った『生命の実相』による影響であったことは間違いがないであろう。

「経営12カ条」にしても、「六つの精進」にしても稲盛の考え方は仏教的な世界観・価値観からできている部分とニューソート思想を基調としてできている部分がある。かなりの部分、心のあり様が現実世界（現象世界）を創り出すという考え方を稲盛は強調している。これは生長の家の影響だけではないにしても、やはり稲盛の思想（世界観）の一番基本的な部分にニューソート思想があることは間違いがない。子供向けに書かれた自伝もタイトルも『君の思いは必ず実現する』であるが、ここにも「君の思い」という言葉が使われている。

「思いがあれば実現する」、「強い思いこそが人生で成功するにあたっての必須条件である」という考え方は、稲盛以外の実業家も多くの人物がもっている。また、これらの思想と自助努力を説く思想の親和性は高い。例えばサミュエル・スマイルズの『自助論』なども自分の人生は自分の心で作るという極めてシンプルな人生観である。

今日では「利他」や「世のため、人のため」ということを説く実業家としてのイメージが強い稲盛だが、稲盛の全体を理解することで、絶対に軽視することのできない考え方が

---

98 粕谷昌志「自主研究『稲盛名誉会長 思想の源流』No1『生命の実相について』（研究レポート1「京セラ秘書室経営研究部」）p. 14。

99 前掲論文 p. 21。

100 前掲論文 p. 22。

ニューソート思想であると筆者は考える。筆者は、稲盛は少年期の肺浸潤の経験と『生命の実相』との出会い以来、この考えを一番、根底に持ちつつ、他の思想を組み合わせる今日の稲盛の「哲学」が構築されてきたのではないかと考えている。粕谷氏も指摘するように、ニューソート思想的な成功哲学のみで留まらず、利他心を説くところまで行ったのが稲盛の他の実業家とは違った優れた部分であるが、それでも根底に最初にあるのは、まず「思い」ありきという考え方であることは間違いがないであろう。

#### (9) 鹿児島県の戦災と戦後の稲盛家

鹿児島県の戦災と当時の稲盛家の様子について記述しておきたい。当時は（旧制）中学校に進学できなかった人も多かったが、これらの人にも軍事教練があった。回数は1週間に1、2回だった。当時を知る方々に戦争中に疎開がなかったのかも質問したが、鹿児島には他県に見られるような強制疎開はなく、帰農があったとのことであった。先の崎元氏自身は、2週間くらい行かれたそうである。帰農には食糧増産の為という意味合いが強く、疎開のような避難という意味合いは少なかったという。帰農の時期は農繁期で、6月や秋の刈り入れの頃だったとのことだった。

空襲と疎開については、別の証言もある。吉村氏の証言によると、強制ではなくとも自主的に疎開しなければならない雰囲気があったとのことだった。吉村氏は実際に郡山に疎開され、そこに行く前には家の近くの防空壕で4日くらい生活をされたとのことであった。6月17日の大空襲で現実にさらされ、焼け残った人々も昼間は家に帰っても夜は家で寝ず、300、400メートル離れた山の中に小屋を作ってそこで寝るということもあったようである。街の人も常盤の方では防空壕を掘っていたという証言も得た<sup>101</sup>。

いかに昭和20年（1945年）の4月と6月の空襲が大きなものであったのかが伺える。大空襲までは疎開はなく、主に帰農であったが、終戦間近の昭和20年の空襲後くらいから鹿児島県でも疎開をする、もしくは夜は別のところで寝ることが行われるようになっていたようだ。稲盛も小山田へ疎開した。



(甲突川沿いの公園にある戦災復興記念碑：筆者撮影)

---

101 筆者による平成22年3月18日の自強学舎関係者インタビューによる。

6月の空襲が始まった時に、家族は庭にあった防空壕に逃げた。空襲は益々激しくなり、このままここには焼け焦げてしまうということで、稲盛は家族とともに外に出て甲突川の方を目指した。祖父の体が弱っていたので、父の暎市が担いで逃げ出した。祖父の七郎は当時67歳であったが脳溢血で倒れた上に痛風を患っており手足が不自由になっていた<sup>102</sup>。

この時の空襲で、稲盛も母と一緒に防火用水で濡らした毛布を頭からかぶって逃げた。甲突川のほとりに出ると、川下から多くの人が逃げてきているところだった。対岸は火の海となっており、向こう側から多くの人が血だらけになって上がってきた。その人々が川から上がりきらないうちに、第二波、第三波の攻撃が行なわれた。対岸に焼夷弾が落とされ、油脂が飛び散って火の手があがった。人々が火達磨になって転げるのが稲盛のいる岸のほうから真昼のような明るさで見えた<sup>103</sup>。

この6月の大空襲でも稲盛家は奇跡的に焼け残った。しかし、その家は終戦の日の前々日の昭和20年（1945年）の8月13日の爆撃で焼かれてしまった。稲盛はまだ結核で体は弱っていたが、空襲で逃げる間に少しずつ良くなっていった<sup>104</sup>。

昭和20年（1945年）日本は終戦を向かえた。8月15日の玉音放送を稲盛は小山田で聞いた。8月の大空襲の前に一家で疎開していたのである。稲盛家は戦争で家も印刷機も失い、戦後は生活苦に陥っていた。父が老後のために貯金しておいた金もインフレと新円封鎖ですぐになくなってしまった。父暎市は塩を、母キミは着物を闇市で売って米にかえてきた。この時、父が闇市で米にかえてきた塩は自家製のものであった。着物は母が戦前・戦中に苦勞して買いためたものであった。稲盛は家が焼けた後は、兄と共に疎開先の小山田から学校に通った。当時は闇市が盛んな頃で、稲盛家では父の発案でサツマイモの焼酎を作って持ち込んだという<sup>105</sup>。

体が回復してきた稲盛は勉学にも身を入れるようになった。当時、苦手であった数学は特に力を入れ、小学校5、6年生の教科書から学び直し、逆に得意科目としていった。また、稲盛は相変わらずケンカもした。鹿児島特有の荒々しい土地柄・風土もあって勇氣は第一の美風であるという雰囲気の中稲盛はクラスで一番の暴れん坊との決闘もした。

昭和23年（1948年）には鹿児島中学を修了する。当時は戦後の学制改革で新制高校への移行期で、稲盛が旧制中学3年の時に、学校制度が現在の6・3・3制に変わった。戦後のGHQによる教育改革によるものである。それまでの旧制中学は新制中学と新制高校に分かれた。父は稲盛がすぐに働くものと期待をしていたし、本人も当初は中学を出た後は働こうと考えていた。その頃、兄の利則はすでに国鉄に就職して働いていた。しかし、新制度になってから多くの生徒が新制高校に行くようになった。その影響もありこの時期、稲盛も高校に進みたいと考えるようになっていった。

自伝によると、進学を希望する稲盛は父暎市に対して、田舎の土地を売るようにいった。郊外にわずかながら稲盛家が土地をもっていることを稲盛は知っていたからだ。結局、卒業後は就職をするという約束と引き換えに、稲盛は鹿児島中学、市立高等女学校、市立

---

102 加藤勝美『ある少年の夢』（現代創造社・昭和54年）pp. 76-79参照。

103 前掲書 pp. 76-79参照。

104 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）p. 35。

105 前掲書 p. 36。

商業学校などが統合した鹿児島に高等学校第三部に進学した。当時、希望者はそのまま進学することができた<sup>106</sup>。この部分については、後に再び言及する。

#### (10) 紙袋の行商経験

稲盛は、高校の途中までは、大学に進学をするつもりはなく、高校を卒業後は、地元の鹿児島銀行に就職することを希望していた。これは父の畷市の希望でもあった。そのためには当初は勉学にはそれほどは身を入れず、授業が終われば草野球に集中するという日々を送っていた。これは自伝にも書かれている。

その様子を見て当時、米の行商をしていた母が、「苦労して高校にいかせたのに遊びほうけて」と怒りだした<sup>107</sup>。稲盛は母のこの一言で野球をやめて、紙袋の行商をはじめた。稲盛家は戦前、印刷の他に紙袋の製造も行っていた。それが頭にあったので、稲盛は父の畷市に、また紙袋の製造をやろうと持ちかけた。この時に、自分が売ることを父に申し出た。父は最初は稲盛の提案を相手にしなかったが、何度も頼むうちに重い腰をあげて紙袋の製造を再開した。

この経験は稲盛にとって大きな経験となる。自動製袋機が入る前には、近所に住む主婦を雇って内職で作っていた。父が包丁で500枚くらいの紙を一気に切断し、この紙をサイズ別に婦人たちが折って周りに糊を付けていった。これが頭の中にあったので、稲盛は自分から、自分が売りに行くといい、父親に紙袋製造をすることを持ちかけた。

紙袋の行商は、稲盛にとっては初めての営業経験となった。大小10種類くらいの紙袋を竹で編んだ籠に積み上げて自転車の荷台に載せて商店の店先へ飛び込んで行った。当時の自転車は荷台が大きく、スタンドを蹴ってこぎだすと重さのあまり、前輪が浮き上がるくらいだった。初めは手当たり次第に商店に飛び込んで行った稲盛だったが、すぐにこのやり方では効率が悪いことに気がついた。そこで、鹿児島市内を7つに分けて、曜日を決めて毎週同じ曜日には同じ地区をまわることにした。

平日は学校が終わるとすぐに家に帰り、日曜は朝から自転車のペダルを踏んだ。こうして稲盛は路地裏の駄菓子屋に至るまで得意先を開拓して行った。当時は鹿児島市内に大きな闇市がまだ5、6か所存在していた。ここに入り込めば大きな商売になると考えた稲盛は何度も通った。そのうち、闇市を仕切っているおばさんと顔なじみになり、ひいきになれるようになって行った。籠の中に袋が残っている時などは、置いて行くようにいわれ、稲盛は「袋売りの坊や」として評判になっていった。

ある時には、菓子の問屋に呼び止められ、ここに入れると県下の市町村の菓子屋が仕入れに来るので袋も一緒にいるので買いたいとよく頼まれると聞き、卸という商売があることを知った。値段は叩かれたものの、県下の菓子屋の多くに稲盛家製の紙袋が届いた。大量の注文が舞い込むようになり稲盛も父も多忙を極めることとなった<sup>108</sup>。

以下は、京セラ経営研究部の木谷重幸氏が稲盛から直接、聞き取りをされた時の原稿である。自伝よりも詳しく、稲盛自身が当時のことを述べている。貴重な本人による証言な

106 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）p. 38。

107 前掲書 p. 40。

108 前掲書 pp. 41-43。

ので、そのまま掲げる。

「私の父親は、戦前鹿児島市内で印刷屋を営んでいましたが、同時に紙袋の製造販売もしていました。昔は、駄菓子屋に行くと、お菓子でも何でも白っぽい紙袋に入れてくれました。もっと昔は、新聞紙かなにかに包んでくれていたと思いますが、父親は、お菓子を入れるちょうど封筒のような紙袋を、自動機を使ってつくっていました。父親は小学校しか出ていませんでしたが、おそらく戦前にあのような自動機を動かして紙袋をつくるというのは、たいへん進んだ技術を持っていたのだと思います。

しかし、戦争で印刷機械も何もかもすべてダメになってしまって、父親は自信を失い、戦後は働かなくなってしまいました。

そのため、たいへん貧乏な生活をしましたが、私は新制高校に進学した時に『お父さん、昔は紙袋の製造販売をやっていたのだから、今からでも、もう1回商売を始めたらどうだろう。機械はないけど、おふくろから近所のおばさんたちにお願ひして、手で紙をのり付けして袋をつくってもらって、それを売ったらどうか。紙を仕入れてきて、お父さんがそれを裁断して、紙袋の原型をつくってほしい。できたものは私が売っていくから』と父親をせつついて、紙袋の製造を始めました。

私は高校一年生の前半までは草野球などをして遊んでいましたが、後半からは紙袋ができてきましたので、学校から帰ってきたら、自転車の後ろに固定した大きな竹製のカゴの中に紙袋を入れて、毎日鹿児島市内を売って歩きました。

それは昭和23年のことでしたが、戦争が終わってまだ3年しか経っていませんから、まだ焼け野原にバラックが建って、闇市がたくさんあったころです。そこへ売りに行きました。当時の鹿児島市内では、福岡から来た紙問屋さんが紙袋をたくさん売っていましたが、私が闇市のたくましいおばさんたちに、『紙袋はいりませんか。福岡の紙屋さんよりも安く売りますよ』と声をかけますと、『ほんまか。でもかわいい坊やが来てそう言うなら』と、買ってくれました。

そうこうしているうちに、たった半年で鹿児島市内の紙袋は全部私が独占してしまって、福岡からの紙問屋を追放してしまっただけではありません。その後、私が高校を卒業するまで、紙袋のアルバイトは続きました。

当時、鹿児島にはあのボンタンアメをつくっている現在のセイカ食品株式会社さんなどを始め、3つぐらいのお菓子問屋さんがありました。私は問屋というのを知りませんでしたが、ある日、あるお菓子問屋の前を通りかかったら、そこのおかみさんが出てきて、『ぼうや、あんたが紙袋を売って歩いている子か』と聞くので『はあ、そうです』と答えると、『坊やは知らんと思うけど、うちはお菓子の問屋で、地方の串木野や川内のお菓子屋さんがみんな仕入れに来られるんや。だからうちに紙袋を置いて、おばちゃんがそれを売れば、おまえさんが一軒一軒売って歩かんでもすむようになる。これを卸しというのや』と教えてくれました。

私は卸しも小売りも、商売のことは何もわかっていませんから、『それで、卸したらどうなるんですか』とたずねると、『いくらで売っているのか』と聞かれました。袋のサイズごとに、それぞれいくらいくらで売っていますと答えると、そのおばさんは『これはいくらで卸しなさい。ここに置いていけば、この値段で私がうちのお客さんに売ってあげるから』と言われます。もちろんだいたいピンハネされるわけですが、それを卸しというのか

など思いました。

そして、そのおばさんが『とりあえず、お菓子の棚を整理するから、そこに袋を全部置いて、正札をつけておきなさい。それで、2～3日経ったらまた来なさい。そこで袋が売れて在庫が減っていたら、またそこへ詰めて、あんたが新しく置いて帰った分だけ、請求書を書いてくれれば、その分のお金を払ってあげるから』と言われました。

便利だなと思って、言われた通りにしてみると、実際に売れたのです。今までは鹿児島市内を一軒一軒ずっと売り歩いたものが、回らなくてもすむようになったのです。さらにプラスアルファで地方にも売れるようになったわけですから、これはいい商売だなと思って続けた覚えがあります。

そうやって、焼け跡の闇市に紙袋を売り歩くという地味なことを一生懸命やって、高校2年生の時には、鹿児島市内の紙袋市場を全部席卷してしまったわけです。

会社をつくってから、その時に学んだ、『誰にも負けない努力』を通じて得たガッツのようなものが、たいへん活きたと思っています。今日はこのへんで終わります<sup>109</sup>。

自伝にも、「私の一気の攻勢に福岡からきていた同業者が撤収したと聞いた。私の事業の原点はこの行商にある。3年になった時点で従業員込みでその仕事を兄に渡し、勉強に専念することにした<sup>110</sup>」。とある。この営業経験は後の稲盛にとって非常に大きなものであった。

#### (11) 学制改革時代の様子と新制玉龍高校時代

戦後は数年かけて学制改革が行われたが、この時期について、稲盛と同じく旧制私立鹿児島中学から新制玉龍高校に学んだ大迫隆氏に話しを聞くことができた。大迫氏は、戦後、新制鹿児島市立鹿児島玉龍高校から上京して明治大学法学部に学ばれた。大学卒業後は、鹿児島に戻って岩崎観光に長く勤められた方で自身の自伝も出しておられる。

また、ほぼ同じ時期のことについて、自伝や『ある少年の夢』に名前が登場する川辺恵久氏にもお話を伺うことができた。川辺氏へのインタビューは、京セラ経営研究部木谷重幸氏と鹿児島大学稲盛アカデミー神田嘉延特任教授と筆者の3人で行った。川辺氏は後に詳しく記すが、旧制鹿児島中学から、新制玉龍高校、鹿児島大学と稲盛の同級生だった方である。鹿児島大学では農学部に進まれた。

本節では最初は大迫氏への聞き取りを中心に記述して行きたい。筆者が最初は大迫氏にお会いしたのは、平成23年2月22日であった。鹿児島県立図書館においてお話を伺った。その後2回、合計3回お話を伺った。大迫氏の話しによると、鹿児島の街は戦災で殆ど焼け、大きな建物は殆ど焼けたとのことだった。稲盛と大迫氏の母校である、鹿児島中学校も講堂だけは残ったが他は全部焼けたとのことであった。

---

109 京セラ秘書室木谷重幸氏の提供による稲盛本人へのインタビューより。

110 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）p. 43。





(左から、大迫隆氏、稲盛和夫名誉会長、筆者。)

当然、戦争が終わってすぐは授業などではできる環境ではなく、連日、瓦礫の整理をしたという。もっこを持って来たりして学生も駆り出され瓦礫整理をしたとのことであった。行政は助けにやっては来ずに市民自らの力で瓦礫の撤去などをして行ったということだった。そして、瓦礫がある程度取り除かれ、平地になってから授業が始まったとのことであった。授業は屋外でなされた。いわゆる、「青空教室」であり、雨の降る日は休みであったという。また鹿児島中学の講堂は4つに仕切られていて、4年生の卒業間近の生徒が殆ど使っていたとのことであった。

学制改革は非常に複雑で数年間かけて行われた。各県によっても事情は相当異なっていたようである。以前に話を伺った方に、旧制（中学）と新制（高校）の両方を卒業したという方がおられたので、その話をして、当時のカリキュラムについても質問してみた。

この時代は、旧制の学校が直ちに廃止されたわけではなかったもので、旧制は旧制でそのまま行って、新制は新制の別なカリキュラムで授業を受けたとのことであった。ある時に（旧制の教育が）全部とりやめになって、ある年度から一斉に新制になったのではなく、しばらくは、旧制による教育と新制による教育が併存していたのである。大迫氏によれば「そこら辺りは、変則的で、我々、1年の上の連中は旧制で卒業したような感じ」とのことであった。実際には稲盛も大迫氏も旧制で鹿児島中学を修了しているのだが、当時は本当に混乱していたようで、大迫氏の言葉を借りると、当時は「ぐちゃぐちゃになっておった」とのことであった。

ここはなかなか今日の感覚では理解が難しい。筆者自身も正確な知識がなく、「鹿児島中学校は卒業されたわけではなくて、行きつづけて名前が変わったのですか」とお聞きした。大迫氏は、「そういうことですよ。我々は旧制の私立鹿児島中学に入っておりますね。あまり公立（市立鹿児島中学）とは馴染めないというところがありましたね」と言われた。私立は私立の学校方針があり、いろいろと公立と違った感じがあったとのことであった。大迫氏ご自身の思い出の中では、明確にどこかで途切れているのではなく、混乱の時代の中で、ずっと私立鹿児島中学校→鹿児島市高等学校第三部→鹿児島市立鹿児島玉龍高校はつながっているという感じだった。

この時代について、稲盛は自伝では、

「一九四八年、鹿児島中学を修了した。ちょうど学制改革期で新制高校への移行期だった。まわりがほとんど進学と聞いて迷った。家族は多いし、家計のひっ迫も分かっている。

『お前も働け』という父に、『田舎のあの土地を売ったらいい』と抵抗した。郊外にわずかながら土地があるのを知っていた。卒業したら必ず就職するからと押し切った。鹿児島中学、市立高等女学校、市立商業学校が統合して鹿児島市高等学校第三部となり、希望者はそのまま進学した。二年後に玉龍高校に転校、私はその第一回の卒業生となる<sup>111)</sup>。と述べている。

大迫氏の話では丁寧にお伺いしても、旧制と新制の切れ目がはっきりしない部分もあった。これは後に川辺氏からお伺いしたお話で明らかになった。大迫氏のインタビューでは、「我々、1年の上の連中は旧制で卒業したような感じ」とのことであったが、稲盛の自伝では、「一九四八年、鹿児島中学を修了した」とあるので、この学年の生徒も、旧制で卒業をしていたことになる。この辺りは分かりにくい部分であったが、後に川辺氏からお伺いした話によると「修了」といっても今のような「卒業式」や「修了式」がはっきりとあって「修了」したというものではなく、次にどこの学校に行くかがはっきりとした段階で文字通りその学校での学びについては「終了」というような感じだったようだ。

先の崎元氏の証言にもあったように、この学年の生徒は全てが稲盛や大迫氏のように、「旧制で修了」をしておらず、途中から新制に移った人もいる。したがって、個人によって同じ学年でも歩まれた道が違うということがあったのだ。同じ学年の生徒が同じ道をたどったとは必ずしもいえないのである。川辺氏の証言では同級生が集まると「本当の母校はどれにあたるのかな」という話しが戦後でもかなり出たようである。

ここで川辺氏について記述しておく。川辺氏へのインタビューは平成23年8月2日に行った。事前に連絡をとって霧島市の「ホテル京セラ」にきて頂いた。

川辺氏の生まれは大隅半島の佐多である。昭和20年(1945年)に旧制中学入学のために佐多から鹿児島に出て来られた。稲盛も旧制中学の鹿児島中学であるが、この頃からの同級生ではないという。川辺氏は今の鹿屋高校、当時の鹿屋中学の出身である。昭和19年(1944年)は学童疎開の時期で、川辺氏のお兄さんなどは全部、鹿児島に出て行って中等教育を受けていたが、ご本人だけは鹿屋中学に行かざるを得なかったという背景があったとのことである。

昭和19年(1944年)ごろになると離島の人たちは大口(現:伊佐市)のあたりに学童が疎開していたとのことであった。ちょうど小学生の時がその時期にあたったとのことである。そのときには学区制が決まっており、佐多は肝属半島の福山中学や鹿屋中学を受験しなさいと言われたとのことであった。川辺氏は後に鹿屋から鹿児島に出て転校して旧制(私立)鹿児島中学に入る。この時から稲盛と一緒にいる。学制改革期について筆者は川辺氏にも詳しく聞いてみた。

川辺氏は、「…これが複雑なんです。終戦後のことで、私は自分のことから先に言うようですけども、鹿屋中学校から転校して鹿児島中学校に入りました。それから後は稲盛と同じコースに入るんですが、稲盛などは鹿児島中学に入っているから、当時は旧制中学生です。新制中学校というのが22年5月にできますよね。そのとき我々は旧制中学の3年になりますかね。これは併設中学というのです。だからその連中は新制中学には行けないわけですよ。いわば新高校に対して併設する中学に行ってから新高校に編入するという格

111 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』(文庫版・日本経済新聞社・2004年) p. 38。

好でしょうかね。今でいう高校1年になってからのことで。23年4月ですね。

いわば、学制改革、制度の変換期にまともに入ってきているということです。だから旧制中学は4年でも卒業できたけれども、卒業するより進学、旧制高校に行く手数もありましたね。5年でも行けました。当時はどこの中学校も旧制中学は5年制ですね。それで5年までフルにおった人と4年で行く人とおったわけです。わたしらも5年生のまでの途中で終戦になって新制中学校ができた。その過渡期になったもんだから、ぐりぐり変わっているのです」と述べられた。

この学制改革については以下のような状況であったと川辺氏が教えて下さった。表を掲げる。

旧制高校（ナンバーズクール）はただちに廃止となって新制高校になったが、旧制中学と新制中学は数年間併存していたというのが重要な部分である。旧制中学がなくなって新制へ移行したのが昭和22年（1947年）の併設中学校からである。この中学に行ったものは新制高校に進学できる資格を得た。稲盛はまず旧制私立鹿児島中学からこの新制の併設中学校に入り、そして昭和23年（1948年）4月に鹿児島市高等学校第三部に入る。ここに2年通った後に、新制玉龍高校の3年生となったのである。

#### 教育制度の改革（六・三・三制度）

旧中等教育制度				新中等教育制度				
区分	旧制中学校		新制高校		新制中学校		新制高校	
1年生	S20年							
	入学							
2年生	21年							
3年生	22年	併設中学校となる			1年生	22.5.1 新中学設立		
4年生	23年		1年生	23.4.1 第3部へ	2年生			
5年生	24年		2年生	〃	3年生			
	25年		3年生	25.4.1 玉龍高校へ			1年生	
	26年			26.3.6卒			2年生	
							3年生	

（川辺恵久氏の作成による）

筆者と木谷氏、神田教授は川辺氏に次のような質問もした。ここはまとめて文章化せずそのまま載せる。

吉田：ちょっとお伺いしたいことが、この図（下記の表を指す）を見て分かったんですけども、川辺さんは旧制私立鹿児島中から、ずっと稲盛さんと一緒だったということでしたので、市立高等学校第三部には行かれてなかったんですかとお聞きしようと思ったんですが、私立の鹿児島中学からも、第三部と第一部に行った人に分かれたということなんですわね。

川辺：そうそう、甲突川の区域で分かれたのではというのは、そんなことなんです。

吉田：よく三つの学校が合併して第三部になったと書かれているものが多いんですが、全部ではなくて、第一部の側に行った人と第三部に行った方がおられて…。

川辺：これが本当ですよ。稲盛は間違ってるかもしれませんがね。第三部というのは県立の分にあるのですよ。

吉田：ここが複雑で、何回、何人の方に聞いても、図で見ないと。私立鹿中の人も、割合でいうと半々ぐらいで行かれた。第一部と第三部に。

川辺：そうそう。中身は分かりませんが、だいたい区域が分かれてるみたいですね。私はそう感じますわね。

木谷：すると川辺さんと稲盛は、第一部に行ったわけですね。

川辺：いや、第三部です。

吉田：川辺さんはやっぱり第三部なんですね。

神田：これですね。私立の鹿児島中学に入って、こっちに移ったと。

川辺：そうそう、ここの中には鹿児島商業と、ここですね、これと女子興業ですね。これが第三部です。ここは、市立中学のこれが第一部だと思う。これが最終的には合体して玉龍となったのです。

木谷：第三部のほうにお二人は行かれたわけですね。

川辺：そうです。人間不思議なものですね、隠したがる人がおりますよ。わかりますかね、その気持ちが。というのはですね、エリートでないというふうに思われるわけですよ。一中、二中というのが今の鶴丸、甲南でしょう。そこを出た者を、稲盛はとっても嫌う風がありましたね。不思議ですね。一中を受けたのに2回も失敗したわけでしょう。それがどこかにあるんだなと思いますわね。稲盛には。そんなことを言ってみても、というのを今までも言ってきたことですけどね。最近はそれがずいぶん取れて丸くなってきましたね。人を恨まないと書いてあるじゃないですか。恨んだり妬んだりするなど。私はそう言いたいんですね。昔からそう思ってるんです。恨む心が自分の中にあると自分をだめにするよと。今も私は言い続けていますけどもね。

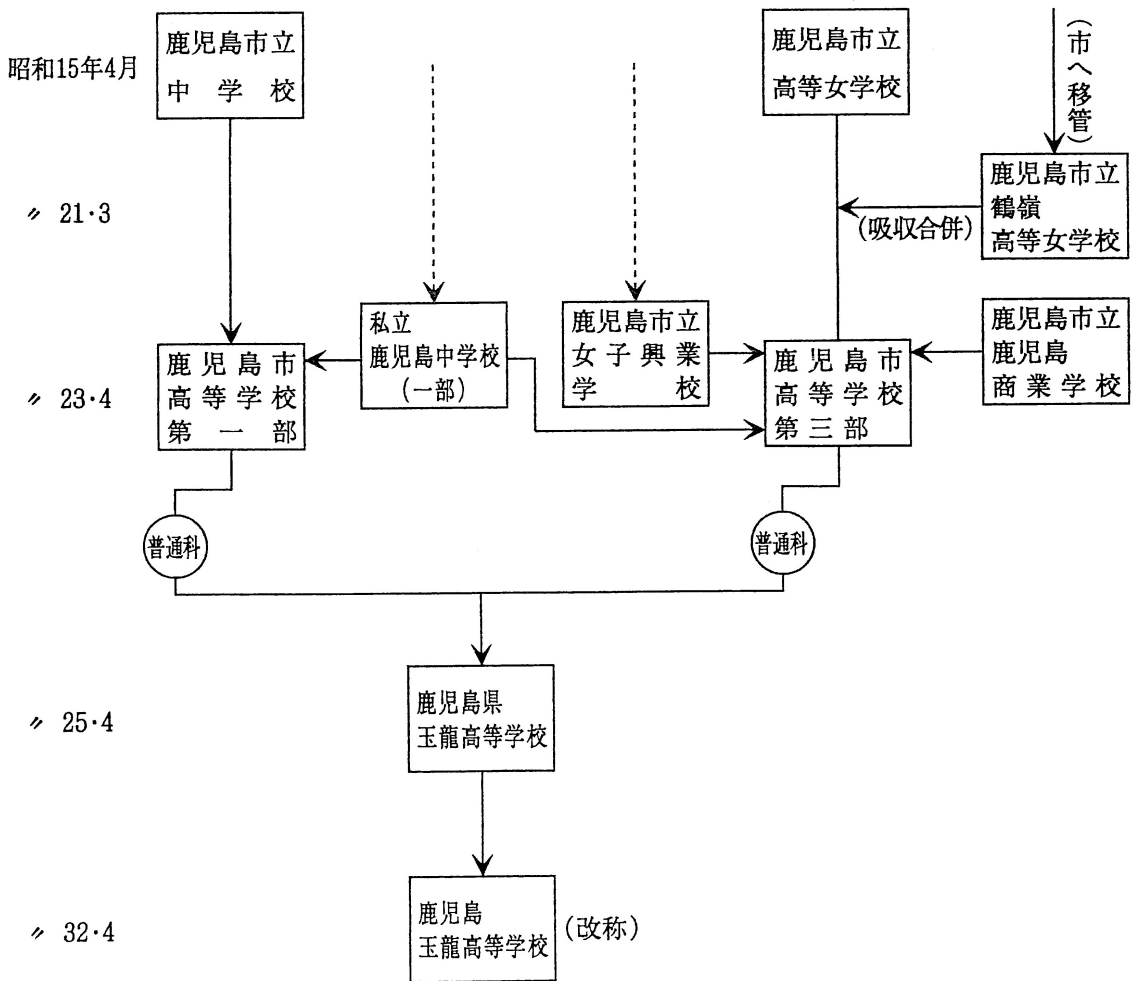
神田：この私立の中から一部の方々がここに入ったってことなんですね。

川辺：そうそう。今言った、甲突川の西側の方々は、大まかですけど第三部に行ったんです。こっちから東側の方々は、城山、鶴丸、今の黎明館あたりを中心にして、昔の上町地区、あそこの方々が第一部のほうに行ったということです。そんなふうになっているみたいです。玉龍になって行ってみたら、昔の中学生の連中がおるわけですよ。あー、なるほど地域で分けたんだということですよね。希望もあったかもしれませんが。

吉田：この25年4月にですね、鹿児島玉龍高等学校になった、このときに県立から市立に替わったんですかね。今、鹿児島市立ですもんね。これは県とも市とも書いてないですけど。

川辺：これはですね、鹿児島県鹿児島玉龍高等学校という名称になっていた時期があるのです。25年の4月でしょう、このときに一年間だけ、鹿児島市立とも県立ともつかない時期があるんですよ。だから「俺たちは鹿児島県立だよ」と言う人も実際おったんですが、それはもう学制改革の流れの中でそうになってしまったということですね。実際はそれではありませんね。やはり鹿児島市立です。私などは25年の4月に、玉龍高校3年のときですから、第三部から分かれて普通科だけが全部集まったということです。ここの一部の連中も普通科だけが集まったということです。いわば女子高校とか鹿児島商業というのはそれぞれに独立したということですね。

(表) 鹿児島玉龍高等学校の変遷



この証言を読んでも複雑である。はっきりしているのは、4つの学校が合併して新しい学校がつけられたことである。稲盛は自伝に「鹿兒島中学、市立高等女学校、市立商業学校が統合して鹿兒島市高等学校第三部となり、希望者はそのまま進学した」と書いているが、私立鹿兒島中学、市立高等女学校、市立女子興業学校、市立商業学校の4つの学校が合併して鹿兒島市高等学校第三部になったのが実際である。

また稲盛の出身である旧制私立鹿兒島中学の人も全てが同じ学校に行ったのではなく住んでいた区域によって「第一部」と「第三部」に別れたということだった。したがって、旧制私立鹿兒島中学は他の3校と合併して「第三部へ組織が変わった」というのは半分は正しいが完全に正確なのではないということになる。

稲盛は、旧制の私立鹿兒島中学校を修了し、新制鹿兒島市高等学校第三部へ進学した。希望者はそのまま進学した。入試による選抜があつて、新制高校へ入ったのではなかった。鹿兒島市高等学校第三部は、私立と公立の合併によって発足したのだが、このようなことは、今では考えられない。

合併して誕生した鹿兒島市高等学校第三部が2年後には、鹿兒島市立鹿兒島玉龍高校になったわけだが、当時の学制改革は「現実に生徒がいるなかで、学校を再建し、新しい制度の中で学校を作らなければならない」<sup>112</sup>という時代の要請から、今日の目から見れば多少変則的な改革も行われたのが実情のようである。

稲盛の自伝での記述では「転校」とあるが、これは別の学校に転校したということではなく、鹿兒島市高等学校第三部が鹿兒島市立鹿兒島玉龍高校と改称し場所も移転したということである。名称も変わり場所も移転したので、実感としては「転校」といえるかもしれないが、一つの学校を退学して、別の学校への「転校」をしたわけではなかった。

大迫氏は「だから我々としては本（後に出された同窓会の文集。『不断の響き』旧制鹿兒島中学校同窓会（平成9年）を指す）に書いてあるように学制改革に振り回されてね、約一年くらい、落ち着いて勉強出来ませんでしたね。本格的に腰を落ちつけて勉強出来るようになったのは一年後くらいです」と述懐しておられた。

川辺氏もインタにビューの中で、同窓会で「『おいたが母校はどこやとよ』と言ったぐらい。『最後に卒業したところが母校じゃっと思わんな、いくら心配してもたまらんが』と言いましたけどね」と述懐しておられた。それほど当事者にとっても非常に複雑な学制改革であったということである。

新制玉龍高校の時代のことを川辺氏は、「私なんかモッコを持って整地をしました。しかし実際には入ってません。校舎が出来上がるのは私どもが卒業してから後だったんです」と振り返っておられた。先の大迫氏の述懐と全く重なるものである。稲盛は最初の新制玉龍高校の卒業生になるのだが、実際に新しい校舎で学んだわけではなかった。

学制改革後の玉龍高校の様子について『青春友情』第三巻（鹿兒島新報社・昭和53年）のなかの「玉竜（ママ）高校」の中には以下のような文章がある。この文章には戦前から前身となった各学校の歴史も書かれているが、ここではその部分は省略し、戦後の様子を記述しておく。

「こうした学制改革によって二十五年に市立中学と市立高女が統合して玉竜（ママ。以下

112 筆者による平成23年2月22日の大迫隆氏インタビューより。

同じ。正しくは『龍』高校と改称され、男女並学から男女共学高校となり、校地も新しく現在の玉竜山福昌寺跡に移され、それから五カ年の歳月をかけて施設が整備された。とくに静かな環境に恵まれていたこの敷地は、かつて三州第一の名刹だった玉竜山福昌寺が五〇〇年にわたって栄えた跡で、当時およそ千五百人の僧りよがいて修業に励み、三州の教育文化の中心をなしていた。この由緒ある土地にあやかって本県の人材育成センターにしよとの理想をかかげ、この寺が行ってきた禅門も教育方法である『行学一体』『師弟同行』の教えを精神の支柱として、戦後の再建がスタート、初代校長に豊増栄次が着任した。

しかし二五年前後はまだ混乱から抜けきらず、着る物も不自由な時代であっただけに、生徒の服装もまちまちで、やっと二十七年に原則として制帽を着用することが定められた。下駄ばきがズック靴になったのもかなりあとで、三十年にやっと全校生徒の制服がそろったという。校名の制定にあたっては種々議論が交わされ玉竜のほか多賀山、稲荷などが提案され、とくに玉竜という名は芸者のようだと生徒に強い反対の声が起こり、これを当時の市長、勝目清（故人）が説得、正式に決まった<sup>113</sup>。

「そのこと福昌寺跡には、島津墓地のほかに一般の墓地も数多く、周囲にはカヤがいっぱい茂っており、配在の水源池付近は湿地でコケ、シダ類が繁茂して昼間でも薄暗く気味の悪いところだった。荒れ放題の整理はかなり苦勞したが、ちょうど二十五、六年の在学生在が体育時間など、この整地作業に従事、スコップを握り、モッコをかついで地ならしをしたが、墓地のあとだけに、石棺や白骨化した頭がい骨がよく出てきたという<sup>114</sup>。

「こうした市と職員、生徒の努力で二十六年にはまず、二、三年生が新校舎を使用、さらには翌年十月には全校生徒が現在の清水中校舎から移って学習することができるようになった。そして玉竜山の緑に映えるクリーム色の校舎は、興隆の意気に燃えてひととき美しく、文部省のモデルスクールとして指定された<sup>115</sup>」とある。



(現在の鹿児島市立玉龍高等学校：筆者撮影)

113 鹿児島新報社『青春友情』第三巻（昭和53年）pp. 197-198。

114 前掲書 p. 198。

115 前掲書 p. 198。

いうまでもないが、戦後の学制改革で変わったのは、単なる制度（学制）だけではない。教育内容が戦前と前後では大幅に変わった。いわゆる、戦前の軍国主義教育から戦後の民主教育への転換であった。戦前の軍国主義教育については、先に紹介した崎元氏の証言にもあったが、鹿兒島においても戦後はいわゆる「民主教育」へ転換した。戦前には軍事教練があつて、空襲の後には瓦礫を片づけ、状況が変わって行ったわけである。戦前は軍人を目指す子どもが多かったのは全国共通であったが、鹿兒島は特にその傾向が強い土地であった。それが戦後、どのように変化したのかは大変、興味深いところであった。この辺りについて、

大迫氏は、「一時は終戦になって、日本が負けて我々みたいな旧制中学校の連中は今後、一体、どうなるんだろうかと思った。そういう事を本当に憂えた。しかし、その当時の先輩たちが、良い風に導いてくれたたなあとという感じだった」と述懐された。そして、「もう軍人になれんから、新憲法も発布されて、言論の自由討論の時代だということで（私は）自ら部長になって弁論部を作った。稲盛君は理系ですから、真面目な勉強一本の学生だった」と述懐された。

これらの証言からは、日本全体が急速に戦後の価値観で再出発した中で、鹿兒島も例外ではなかったことが伺える。戦争時代の花形であった陸軍士官学校、海軍士官学校在学中に出陣することなく敗戦を迎えた人々の間には、戦後の風潮を受け入れることができない人も多くおられたようであったが、稲盛や大迫氏のように、(旧制) 中学時代に終戦を迎えた世代は、割合、早く戦後日本に馴染むことができたということなのであろうか。

大迫氏の述懐によれば、当時の稲盛は、その頃から化学などの方に関心をもっていたとのことであった。筆者は、当時のエピソードについても尋ねた。当時の稲盛は草野球を熱心に行っていたとのことであった。後に稲盛は大学時代には空手に力を入れることになるが、この時は専ら野球一本だったという。稲盛が当時から数学や化学が好きで、将来はや理系に進み、当時から技術者になろうというようなことを思っていたのだろうか、ということについても質問した。

大迫氏は、「大学を受験するその時はそうだったみたいですね。その前はそうでもなかった。とにかく医者になろうと思っていたみたいです。叔父さんが亡くなられるのをみて、それでは医者じゃないといかんとって、だから阪大の医学部を受けようとされました」と述懐された。稲盛は自伝の中で、薬学を志していたということを書いているので、大迫氏の述懐は少し違うが、阪大の医学部を受けようと思っているということを稲盛が当時から周囲にそう公言していたので、大迫氏は稲盛が医者を目指しているのとらえていたのかもしれない。

しかし、後で触れるが川辺氏は少し違った証言をされた。いずれにせよ、稲盛は広い意味では既に高校時代から理系であった。この時点で明確に技術者を目指していたわけではなかったようである。

筆者は、この時代に後の稲盛の経営者としてのリーダーシップの萌芽があつたのではないかと考え、そのことについても質問してみた。小学校の同級生の証言でも、稲盛は負けん気が強かったという証言があつたので、高校の頃になれば、相当、今日の稲盛に近い様々なリーダーとしての資質が表に出てきていたのではないかという仮説によるものであつた。



大迫氏は「リーダーシップはありましたよ。遊びの中でも。そういう原動力がありました。稲盛君は結構、気が強い、負けず嫌い、何でも挑戦して諦めない…」と述懐された。稲盛の自伝によると、少年期から「ガキ大将」であったことが強調されているが、稲盛の高校時代のリーダーシップはどのようなものであったのかも聞いてみた。また、稲盛は西郷隆盛の人柄に心酔しているが、当時から「親分肌」などころはあったのだろうか。



(左：西郷隆盛像。城山：筆者撮影)

(右：大久保利通像。高見橋：筆者撮影)

大迫氏によれば、そのような雰囲気は当時からあったようであった。大迫氏は、「友達を大事にする。故郷を大事にする。親を大事にする。そしてまた西郷隆盛、または彼が信ずる敬天愛人の思想というのでしょうか、かなり彼は徹していますよ。最近では開眼して大久保の事も…」と述べられた。大迫氏の述懐から、高校時代の稲盛にリーダーシップがあり、すでに親分肌を感じさせるものが表に出てきていたということはどうやら間違いのないことのようなのである。しかし、既に当時から、後の大実業家になるというような、そういう芽もあったのだろうか。ここについても聞いてみた。

すると、大迫氏は、「中学時代、高校時代はそんな事は…。就職した後、しかし、社長と袂を分かって、一つ同志と共に京セラを立ち上げるのは親分的なものがないと出来ませんよ。福の神が彼を膨らませて行ったなあと思いますね」と述べられた。おそらく、これは偽らざるところであろう。確かに先天的に稲盛にはリーダーシップが身につけており、また非常に親分肌であったことは確かにしても、まだ中学・高校時代に今日の大実業家、大経営者としての成功までを感じさせるものはなかったであろう。

よく、成功者について語られる時、業種や分野を問わず、「梅檀は双葉より芳し」といわれることがある。一方、また「大器は晩成す」という言葉もある。前者の場合は、少年期から周囲に抜きん出た突出した能力をもっていた人物の場合や、何かキラリと光るものを内包していた人物などに使われる表現である。一方、後者の方は、幼少期にはさほど、目立ったところのなかった人物が、年を経るに従って大を為し、晩年になるほど大きな仕事をした時に語る際に使われる言葉である。

小学校時代の同級生や、大迫氏へのインタビューから、稲盛の場合は、このどちらかで

はなく、二つの要素を併せ持っているのではないだろうかと筆者は感じた。義侠心があり、親分肌で、またリーダーシップがあったという面に着目すれば、稲盛には「梅檀は双葉より芳し」の面もあり、その少年時代から内包していた素質がそのまま花開いたと考えることができる。また逆に、少年時代は、「ガキ大将」ではあっても、それほど目立たなかった存在であったのが、当時には想像もつかなかった大成功をおさめ、しかも人生で後になるほど、大きな仕事をしているという側面を強調すると、「大器は晩成す」ともいえるかもしれない。

また、筆者は大迫氏に、稲盛が薩摩・鹿兒島の風土や薩摩・鹿兒島の風土や考え方から一貫して受けている影響があると思うかどうかについても質問した。大迫氏は、「受け継がれていますね。明治の偉大な先人達の考え方というか、信念、弱い時は弱く響く、大きい時は大きく…。天性のものとしてそのようなものが備わっているような」と答えられた。そして、稲盛について、「非常に友達とか両親、お世話になった人に、すごく尽くす方ですね。友達甲斐がある、鹿兒島弁でいう『だちがい』といいます、非常に信頼性があります。百万の敵がおっても、稲盛を味方になるというくらいの『だちがい』のある人です。信義が篤い人です」とも述べられた。

新制玉龍高校3年生時代のことについて、稲盛の自伝には以下のような記述がある。

「…鴨池球場での対鹿兒島商業高校戦にみんなで応援に行くことになった。

惜しくも敗退したが、問題はその帰りだった。市電で戻れるが、もったいない、歩こうと提案した。すると、『学校の近くで降りる時は定期がある。どうせどこから乗ったかわからんし、さっさと出ればごまかせる』と押し切られてしまった。

駅について仲間は何食わぬ顔でどんどん降りていく。大勢で次々、逃げるようにいけば不審に思われる。後ろめたいものでつい到最后になった私だけがとがめられ、キセルがばれてしまった。買ったばかりの定期券は没収され、罰金までとられた。みんなからは『要領の悪いやつ』と笑われる始末だ。

翌日、教室で担任の辛島政雄先生に『ちっとぐらい勉強ができるからといって調子に乗るな。わが校の恥じだ』と厳しく叱責された。辛島先生は、鹿兒島中学の校長でありながら、一教師としてわれわれ生徒といっしょに玉龍高校までついてきてくれた先生だ。その先生の言葉は胸にこたえた。

学校にはやむなく歩いて通うことになった。そこへ、『お前一人を犠牲にするわけにはいかん』と徒歩通学につき合ってくれた男がいた。

川辺恵久君だ。なんという友情。持つべきは本当の友だ、と感激しきりだった。ところが、後年、川辺君が『実はあの時、私が最後だった』といってきた。私が車掌に説教されているすきに後ろから逃げ出した、と白状したのである。友情は罪滅ぼしであったのか<sup>116</sup>。

この時まで稲盛と川辺氏はまったく交流はなかったとのことだった。このことがきっかけで、家が同じ薬師町ということもあって稲盛と川辺氏の交流が始まった。高校3年の9月で2学期に入ってからのことだった。当時、川辺氏と稲盛は9月から3月まで7ヶ月近くもの間、一緒に歩いて薬師町から玉龍高校に通った。稲盛と川辺氏は学校からの帰り道などは歩きながら、英単語を覚えるための勉強などをした。

116 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）pp. 44-45。

川辺氏は当時の中学時代の稲盛の印象については、「彼が体が弱くって、中学2年ごろでしょうかね、私もそこははっきりしません。2年ごろでしょうか、ひとり孤独な格好をして座っていたのを記憶してるんです。なんでかなあと今、当時のことを思い出すと、あのときから結核を患っていたのかな、という印象がずっと残ってるんですよ。ひとり孤独にですね、校庭の、まだ終戦で学校が復旧されてないところがあるんです、そこに座って。洋服まで覚えていますがね。古い上着を着て座っていたところを覚えてます」と述べられた。



(現在の市電いづろ駅周辺の様子：筆者撮影)

また稲盛の両親の印象については「それが鹿児島女性そのものですね。負けず嫌いで活発で明るい方でしたね。お父さんはおっとりとした人です。おっとり型で寡黙な人でしたね。なかなか慎重な方でした。お母さんはさらっとした人いい人でしたね」と述べられた。

大迫氏の証言でも稲盛は負けん気が強かったようであるが、川辺氏も同じような印象をもっておられた。また、稲盛の負けず嫌いは学業の面でも発揮されていたとのことだった。高校の時の稲盛は数学と物理がクラスの中では1、2番目で、数学はⅠ、Ⅱ、Ⅲの全てが良い成績だったとのことだった。

稲盛が数学と理科が得意だったという証言は大迫氏のものと同じである。この辺りには稲盛が精神的、思想的なものを大事にする人間であると同時に、職業として進んだ方面が技術者であったことの萌芽がみられる。川辺氏は、当時の稲盛の数学の得意ぶりについて、稲盛は数学の公式を全て覚えていたと証言された。高校3年の2月に卒業前の実力テストがあり、50番目まで順位が張り出されたが、稲盛が7番、川辺氏は15番だったと述懐された。

## (12) 鹿児島大学工学部に入学

先にみた紙袋の行商体験はその後の事業の原点になるほど貴重なものであったが、稲盛は、玉龍高校の3年になる時にこの仕事は従業員込みで兄に譲った。高校卒業後は就職しようと思っていた稲盛に対し、またも恩師辛島教諭が進学を勧めてきたことから、勉学に力を入れるためにであった。

稲盛はそれまで、学校が終わってからは野球に熱中し、その後は紙袋販売の行商に専念していたために大学受験の準備をしていなかった。稲盛はある時に友人の一人から『蛍雪時代』という受験雑誌を見せてもらった。その友人が読んでいらなくなった『蛍雪時代』を借りて深夜に読むようになった稲盛は大学へ進学したいという気持ちをさらに高めてい

くこととなった。そして、秋頃になると大学受験が話題に上り始めた。

稲盛は結核の苦い経験から大学に進み薬学の研究をしたいと考え始めていた。しかし、兄の利則は旧制中学（現高校）卒業後、実社会に出ていた。その兄が両親に「和夫だけは大学にやらせてくれ」と頼んでくれた。父の暎市はふだんはおとなしい人物だったがこの時は怒鳴った<sup>117</sup>。高校を卒業すれば就職するという条件で高校進学を許したからだ。

稲盛は父の反対と弟妹のことを考え、これ以上のわがままをいうことには気が引けて、地元の鹿兒島銀行への就職を考え、そのことを担任の辛島教諭に話した。すると、辛島教諭は、自分が父親と直接話すといい、次の日に父親に会いにきた。そして「稲盛君は他の生徒にはない何かをもっています」と話し、大学進学を認めるように父に話をしてくれた。辛島教諭は鹿兒島中学校の校長も務めたこともある人格者であった。

辛島教諭が帰った後、父は「大学といっても帝大ならいいが、そうでなければやめておけ」といった<sup>118</sup>。辛島に頭を下げられた父暎市は、奨学金とアルバイトで学費を出し、家計には一切の迷惑をかけないという条件で稲盛の大学進学そのものは認める考えになって行ったのだが、難関大学の名前を出してわざと稲盛が進学を諦めるならば、諦めさせようとした。

稲盛は、辛島教諭へ九州大学を受けようと思うということを話した。すると、辛島教諭は、福岡に出るのなら思い切って大阪大学を受けてみたらどうかと勧めてきた。当時、稲盛は全国一斉の進学適性試験で、県下でも有数の好成績をとるようにならなっていた。高校の前半は勉強時間が少なかったが、この頃の稲盛は誰よりも懸命に学習をするようになっていた。辛島の勧めもあり、稲盛は大阪大学医学部を目指すことにした。

大迫氏も辛島先生が稲盛にとって非常に大きな影響を与えた人物で恩人であることを述懐された。

「彼はね、家が貧しいので鹿兒島銀行に入ってお金取りをしないさいと。その気になっておったのを辛島先生が、数学の、教頭の、校長になられましたが、その先生が自宅に足を運ばれ説得をされたようですね。そして、稲盛君は大学までやらんといかんと。鹿兒島市やいろいろ奨学資金があるので、市の方で奨学資金を出してもらえば、お父さんは彼の金策をする必要はないでしょうというようなことを言われて、ようやく、お父さんは納得されて、そして鹿大を受けられて通ったということですねわけですね」との述懐をされていた。

辛島先生の人柄についても尋ねた。大迫氏は「辛島先生はとにかく、鹿兒島中の何というか、生徒は自分の子供のように考えておられました」と述懐された。稲盛の自伝でも辛島先生は大変、思い出深い恩人として登場するが、大迫氏の述懐においても、その人柄の優しさが伝わってきた。辛島先生の熱心さを、大迫氏は「何回も稲盛の家に足を運ばれるくらいですからね。彼は数学ができましたから…」と思い出しておられた。

玉龍高校の創立50周年記念誌「飛龍」（平成2年）に寄稿した「母校の思い出」という文章がある。稲盛はこの文章で辛島教諭の思い出も書いている。

「最後に私が高校生活で忘れることのできない方に恩師の辛島先生がおられます。実は

117 加藤勝美『ある少年の夢』（現代創造社・昭和54年）pp. 109-110参照。

118 前掲書 p. 110参照。

私が大学へ行けたのも辛島先生のお陰だと思っています。当時、家が貧乏だったので高校卒業と同時に地元の銀行にでも勤めたいと思っていましたが、先生は大学に行くべきだと必死に勧めてくださいました。親を一生懸命説得していただいたのも辛島先生です。その後、何年も経ってから、京都で私が仕事に幾らか成功して、会社が中小企業の規模になった頃、先生から、旧制鹿児島中学の同窓会で東京に行くので、その途中で会いたいというご連絡をいただきました。早速京都でお迎えし、先斗町の鴨川べりの床で夜風に吹かれながら夕食を共にしたことがあります。その時先生は、『大変立派になってくれた。これからはさらに精進するように』と言われて、あの厳しかった数学の授業の時とは違って、素晴らしい柔和な顔で大変喜んでくださいました。高校時代に会った一人の先生のご指導が、今の私をつくってくれたと、今でも心から感謝している次第です<sup>119</sup>」。

この文章からもいかに辛島教諭が素晴らしい先生であったか、そして稲盛にとって大きな役割を果たしたかが分かる。

この時期について川辺氏は以下のように述べられた。川辺氏の話によると「そのときにはまだ進学という方向は分かってもどこを受けるということは言わなかったんですが、工学部に行きたいというのは言ってましたね。鹿大の工学部。県立鹿大の工学部に行きたいと。そして応用化学科に行きたい。(中略)『やがちゃ、おいが薬を作っでね』。というのは応用化学ということですよ。薬を作っで、何かあったときはみんなに提供すると言うから。青春の夢みたいなものです」とのことであった。

以下は川辺氏へのインタビューの時のやり取りの一部である。

吉田：すみません。あともう一つだけ。高3のときですね、進学は決めても、まだどこに行くかは決めてなくて、3人でお話をされたときに、薬を作るというふうに稲盛さんがおっしゃって、応用科学科に行きたいというふうに話されてたということでしたけど、薬学部を目指されているようなことはなかったですか

川辺：それは聞いておりません。阪大に行くという、それはまったく聞いておりません。鹿大に行って、(応用科学に行くという)それは事実です。場所も覚えています。「俺は薬を作っでね」と。「俺は自動車を」、「家を」というふうな話をしました。

木谷：多分その後だろうと思うんですけども、辛島先生が稲盛のご両親のところに、「大学に行かしてやっってください」みたいなことを言いに行かれたということが書いてありますけど。

川辺：それは知りません。

木谷：その後、どうせ行くんだったら帝大に行けとお父さんに言われて、それで最初は九大に行くと言ってて、それだったら阪大に行けといわれたらしいんですよね。

川辺：ああ。なんか私の勘ですけどね、大阪には親戚がおられたんじゃないですかね。でしょう。なんか、そんな感じでしたよ。私の印象。なんで九大に行かずに大阪に行ったんだというのは、私もそれは本を見てから分かった話で、私はまったく聞いておりません。それでほかのことは聞いておりませんが、みんな自分の(第一)希望の学校のことは黙ってますね。

---

119 玉龍高等学校創立五十周年記念誌「飛龍」(平成2年) p135。

担任の辛島教諭との間では大阪大学を受けたいということを目から聞いていたのかも知れない。また大迫氏も稲盛が大阪大学の医学部を目指していたということは当時から知っておられたようだった。が、川辺氏との話では、そこまでは話していなかったようだ。

翌年、昭和26年（1951年）稲盛は、大阪大学医学部薬学科を志望し、夜行列車で大阪を目指した。これまで試験で苦杯をなめてきた稲盛はこの時は入念に勉強をして自信をもっていたが、不合格になってしまった。稲盛はショックを受けたが、浪人する余裕はなく、試験が遅くあった地元の県立鹿児島大学工学部を受験し合格した<sup>120</sup>。

現在の鹿児島大学は、様々な学部の前となる組織が合流して、戦後の昭和24年（1949年）の5月に国立大学として設立された。この時は、第七高等学校、鹿児島師範学校、鹿児島青年師範学校、鹿児島農林専門学校、鹿児島水産専門学校を母体としてそれぞれが文理学部・教育学部・農学部・水産学部となって設立された。医学部と工学部の前身は昭和24年（1949年）2月に設置された県立鹿児島大学の中にあつた。同じ年の6月に、鹿児島県立大学と改称された。この2学部が国立に移管したのは、昭和30年（1955年）であつた。



(現在の鹿児島大学。正門から本部棟を臨む：筆者撮影)



(左、現在の鹿児島大学「稲盛通り」の標識：筆者撮影)



(右、現在の鹿児島大学工学部周辺：筆者撮影)

---

120 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）p. 47。

稲盛は応用化学科に所属し薬学と関係のある有機化学を専攻することとなった。自伝によると当時の稲盛家は家計には余裕はなく、稲盛はジャンパーと下駄ですごした。参考書が高価で手に入れることが困難だったので、稲盛は図書館で勉学にあけくれた<sup>121</sup>。

稲盛の学んだ当時の鹿児島大学工学部は、化学、電機、機械、建築の4学科から成り立っていた。工学部全体でも同期の学生数は60人から70人と少なかったために学科の隔てはなく仲良く学生が集まる雰囲気があった。また教員と学生の交流も密であった<sup>122</sup>。

大学時代の稲盛については、川辺氏は以下のように話された。

「稲盛の話によるとコンパですかね、大学に行ってからコンパをした後、照国神社の近くらしいですよ、アルコールを飲んでるから不良からたかられたと。それで、『よし』という気になった。打たれたかどうかは知りませんよ。とにかくやんちゃなことを言ったんじゃないかな。焼酎を飲めばふざけたことを言うじゃありませんか。相手に対して。どんな人でも。そのときにやられたらしい。それから空手を始めて。そのころ、やっぱり自信がついてきたんじゃないですか。本当に。勉強も頑張るようになったけれども。本人が言ってましたから、『俺が応用化学の中では一番やったっど』と自分で言ってましたからね。ある意味、世間を知るようになってきて強くなってきた。気持ちか。それは事実です。そしたら空手をして練習したら、背が高いですからリーチが長いですよ。私とためしの練習じゃという意味で、ほんとにするわけじゃないけど、するわけですよ。だから空手をしたことによって、自分の何かも自信がついてきたことは確かですよ」。

稲盛は大学時代に空手を始めたが、そのきっかけは不良から絡まれたことが原因であった。稲盛が、負けず嫌いであったことは、これまで大迫氏や川辺氏やも証言されたが、空手を始めたきっかけも不良に絡まれた時の悔しさだったというのは、稲盛らしいエピソードである。本人は自伝の中では「体も鍛えねばと空手部に入った。これも、空手着一枚あればいいというので貧乏学生向きだ。素手の勝負で、道具がいらぬ<sup>123</sup>」と書いているだけだが、空手を始めた背景には一つの事件があったのだった。

大学時代に稲盛はアルバイトをしていたことを自伝で、

「アルバイトにも精を出した。百貨店、山形屋の夜警の際、女子店員にひかれたことがある。山形屋に親せきがいるという川上君の骨折りで映画に誘い出すことに成功した。(中略) 食事をして家まで送り届けたのだが、気の利かない介添人がどこまでも世話を焼き、ついに2人だけにしてくれなかった。その後、やっと二人きりで会えた晩、『もうすぐ東京にお嫁に行きます』と告白された<sup>124</sup>」と述べている。非常に淡い思い出である。

---

121 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）p. 47。

122 当時の様子については、神田嘉延「鹿児島大学工学部創設期の教育状況—稲盛和夫の学生時代の背景—」（鹿児島大学稲盛アカデミー『稲盛アカデミー紀要』第1号・2009年）に詳しい。

123 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）p. 47。

124 前掲書 pp. 47-48。



(現在の山形屋：筆者撮影)

この時のことを川辺氏は、「それは私が直接それを何するわけじゃないけども、彼が話をしてましたからね。山形屋に行っているいろいろあってと。本当のところまでは知りませんよ。山形屋に行ったら好きな女の子がおって云々というのは、ありうる話ですけどね。お菓子屋さんに行ってたときがあるんですよ」と話された。稲盛は山形屋以外でもアルバイトをしていた可能性があるようである。

### (13) 恩師島田先生との出会い—入来粘土の研究を行う—

勉学に励み、体も鍛え充実した学生生活を送っていた稲盛は、昭和29年(1954年)の春には鹿児島大学の4年になっていた。自伝によると、卒業と就職が迫ってきた時期に、稲盛は石油化学の関係の会社に行こうと考え始めていた<sup>125</sup>。当時の社会情勢は朝鮮戦争の特需が一巡して雇用情勢は厳しくなっていた。

当時は就職が厳しく、旧帝大の学生でも狭き門だなどといわれるような情勢であった。有名企業は強力なコネクションがないと難しいといわれていた。応用科学の恩師竹下寿雄教授も様々なつてを通じて就職先を探してくれたが、求人は僅かしかなかった。稲盛は帝国石油をはじめ、次々に入社試験を受けたが、コネがなく新設大学の学生ということもあって、どこにも受からなかった。鹿児島大学での稲盛の成績は優秀であったが、コネがなければいくら成績がよくても相手にしてくれない企業社会に対して、「どうせ、こんな不公平な世の中ならば、いっそインテリヤクザにでもなろうか」と仁義に厚いヤクザ社会の方がましだと思ったという<sup>126</sup>。

しかし、実際に稲盛は仁侠の世界に入るなどというようなことはしなかった。貧しい家に自分の就職を心待ちにする5人の弟妹がいることを思い出したからである。稲盛は世の中の不公平をうらんだところで人生がうまくいくものでもないと考え直し、気を取り直して頑張ることにした<sup>127</sup>。

後に、稲盛は子供向けに書いた『君の思いは必ず実現する』(財界研究所・2004年)の中で、

---

125 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』(文庫版・日本経済新聞社・2004年) p. 50。

126 前掲書 p. 51。

127 前掲書 p. 51。



「…若い読者のみなさんも、うまくいかないことがあると、『何で自分はこんな目にあわなければならないのか。一体、自分がどれほど悪いことをしたのか』と世の中をうらんだり、すねたりする気持ちが起こってくるだろうと思います。わたしも若いころ、そうした気持ちになったのです。(中略)しかしわたしは、いろいろ悩んだ末に『世の中をすねてうらんでみても、自分の人生がうまくいくわけがない。確かに今までは運が悪く、何かもううまくいかなかった。でも、きっと神様は人生を公平に見てくれるだろう。だから、23歳までは不幸だったかもしれないが、これからの人生の中で神様はわたしに幸運を授けてくれるかもしれない。だから、これからは人生を前向きに明るく生きていこう』そう思い直しました。どんなにつらいことがあっても、希望を捨てないで前向きに生きていこうと、ギリギリのところまで悪の道に入るのを踏みとどまることができたのです<sup>128</sup>」と述懐している。

この時の稲盛がヤクザになろうかという気持ちは一瞬のものであったにしても、かなり切実なものであったことを物語っている。

ここで、稲盛が述べている、自分の運について考えるところは、後に大きな影響を受ける松下幸之助の若い日の姿とも共通点がある。

松下は15歳のころ、セメント会社で臨時運搬工として働いていた。大阪電燈（後の関西電力）へ正式の就職が決まっていた時期だったが、すぐには採用にならず短期間だけ働いていたのだった。その時に、蒸気船で仕事場に通っている時のある夕方、夕陽をみて潮風に吹かれていたところ、どうしたはずみか、誤って海に転落してしまった。松下は必死で泳いだが、蒸気船ははるか先を行ってしまい、一瞬自分はもう助からないと思ったところ、蒸気船が引き返ってきて溺れずに助かったということがあった。この出来事があった時、松下はこれまでは運が悪いとばかり思ってきた自分が、実はとても運が良い人間であったと考え直したという話は有名である。松下自身、この話は長くいろいろなところで語っているが、運が悪いと思っていた自分が運の良い人間であるという認識が変わった瞬間だったという<sup>129</sup>。

稲盛の場合は、この時点では、状況のプラスの側面を運が良いと捉えなおしたというのでなく、「例えこれまでは運が悪かったとしても、前向きにやっていたら、今後は神様が幸福を与えるようになるかも知れない」という風に考え方を自分で転換させたのだった。

この年の夏、稲盛は恩師の竹下教授から呼ばれる。そして、京都の碍子製造会社である松風工業を紹介された。早く就職を決めて親を安心させたかった稲盛は即座に竹下教授に「お願いします」と頭を下げた。しかし、稲盛が専攻してきたのは有機化学で、碍子製造は無機化学の分野だった。また、先方も磁器関係を研究している学生を採りたいという意向だった。

稲盛はこの時、残り半年の学生時代を無機化学の研究にあてようと思い、島田欣二教授について、鹿児島で取れる入来粘土の研究をした。その成果は「入来粘土の基礎的研究」という卒業論文にまとめられた。

筆者は木谷氏、神田教授と共に島田先生にもインタビューを行った。我々が、島田先生

---

128 稲盛和夫『君の思いは必ず実現する』（財界研究所・2004年）pp. 65-66。

129 松下幸之助『私の行き方考え方』（文庫版・PHP文庫・1986年）pp. 40-41など参照。

にお目にかかってお話を伺ったのは平成23年8月2日であった。

島田先生は当時の社会情勢と稲盛の指導をすることになった経緯について、

「…稲盛さんの自伝の中でも書いてありますけども、当時は非常に就職難でしたね。それで、なかなか就職の目処がなかったんです。それで、稲盛さんは大体、有機のほうであり、その頃有機が非常に優勢ですね。ちょうど石油化学が出始めの頃ですから、稲盛さんもそちらのほうに非常に興味がありまして、そこの教授をやっておりました竹下教授のところ、卒論を受ける予定だったんです。そうしたら、竹下教授は就職の世話をしなくてはならない、というようなことになりましてね、稲盛君のですね。それでたまたまその知り合いが松風工業ですか、そこに幹部としておられると。その人と相談したら、採用してもいいというような話だという内定があったんです。そして、条件をつけましてね。とにかく卒論の時にセラミックを勉強してくるように、ということだったのです。そういう条件がついたものですから」と述懐された。

当時、島田先生自身がまだ若く研究者としては駆け出しであった。当時島田先生は、菊池三郎という先生のもとで研究を進めておられた。菊池三郎先生は当時の鹿児島大学教授であった。戦争が終わった時は東北大学の教授であった。それが、終戦後、不在地主は財産を没収されるということという噂があり鹿児島に帰ってこられたのだという。島田先生は、この菊池教授から当時の最先端のセラミックの研究者であった河嶋千尋という教授を紹介された。

島田先生は「当時はあんまり、東大でもセラミック関係の人はあんまりいませんでした。京都大学のほうもですね、ガラスはやってますけど、ファインセラミックスなんていうことをやってませんでした。そういうことでやっぱり河嶋千尋先生が一番先端をいっておられるのではなかったかと思います」と述べられた。

稲盛は島田先生との出会いによって粘土の研究に入り、後に人生を大きく変えることになる「セラミック」との出会いも果たしている。この頃は、この島田先生自身が菊池教授から河嶋教授を紹介されセラミックの研究に入られたころであった。河嶋教授の助手に斎藤進六という人がおられた。この方は、後に東京工業大学の学長にもなり、セラミック協会の会長にもなった方だが、島田先生はこの方などと一緒に勉強されていた。

その時は、今のような研究のための道具はなく、ちょうど電子顕微鏡が入ったばかりだったという。「電子顕微鏡で粘土の電子顕微鏡写真をとったり、非常に感激しました」とのことであった。島田先生自身が、粘土に関心を持っておられた。その時のことを「もう普通、土と鉱物ということの考えが全然なかったです。それは、きれいな六角形の結晶ですね。あるいは、円筒形のやら、まだ不定形のもの、いろいろ写真を見せてもらいましたね。非常に興味がわきまして」と述べられた。

島田先生が河嶋教授から与えられた研究テーマが薩摩焼の研究であった。そして、島田先生が研究を始められた直後に出会ったのが稲盛であった。

「それで、そういうのをテーマに与えていただいてやって。セラミックの基本になるのは、やっぱり粘土ですもんね。粘土の性質を調べないと。これは基本だと。それで、いろいろ粘土の性質を調べる装置とか、ああいうふうなことは見せてもらいましてですね、勉強したわけです。そういう状態で、稲盛さんも、やむを得ず。それで、仕方がないから、私のところでセラミックをせざるを得なくなつた、ということになりますねえ。本当は、

有機のほうにいく予定だったんですけども」

「また私としては、その親方、菊池教授がですね、『おまえ、セラミックを始めとるから、おまえ指導せよ』といわれるのです。で、熟慮したんですけど、初めて、第1号と指名いただいて、非常に感激しましたですね。初めて卒論の担当をするという。だけど、道具はゼロに近かったですね。何もないんですよ」

当時の鹿児島大学は、伊敷にあった兵舎を教室に使っていた。当時の実験設備や研究の手法などについては島田先生は、

「実験室なんかは、まあ一番初めにできたのはですね、このちゃちな実験室でですね、その頃4講座ありましたが、平屋建てのですね、みんな小さいところに入っていたのです。学生も、私なんかも一緒ですよ。本当、設備はほとんどゼロでした。ですから、装置から作らんといかんわけです。それで私は、東京工大で測定器を全部スケッチしましてね。どうしても買わなくちゃならないもの以外は、コンクリートとか、こちらのほうの頼んで、自分たちで作ります。そういうようなことですね、まあ熱膨張計とかですね、示差熱分析装置とかですね、そういうような測定装置をですね、できる範囲で作って、それを材料と、その作り方とかが大変だったですね。その装置を作っていくというのがですね」と振り返られた。

全てが手作りで、熱膨張計や電気炉も全部、手作りだった。電気炉はニクロム線を巻いて自分たちで作ったという。

稲盛との研究テーマをなぜ、入来粘土にしたのかということについても我々は質問した。これにも理由があった。そもそも島田先生は冶金を専門とされていた。昔は採鉱と冶金は一緒に、山師の人なども付き合いがあったという。山師というのは、金鉱脈を探し当てる人のことである。山師の人は金の鉱脈を探しているのだが、金を見つけるために穴を掘っている過程で白い層の粘土があるということが分かり、それを教えてもらい表面の白いところだけを採って実験試料にしたとのことであった。この白い粘土を稲盛は島田先生と一緒に採掘に行くことになった。

粘土がどういう鉱物から構成されているのかを全部調べるのが稲盛の仕事だった。島田先生は入来粘土のあと、これが発端となって指宿の粘土などの研究も続けていかれたということだった。指宿の粘土は非常に質の良いものでこれは島田先生と稲盛が発見したとのことであった。いうなれば、稲盛と島田先生との粘土の研究は南九州の粘土の性質を研究した第一号であった。これらの研究は元をたざせば、河嶋先生の粘土鉱物の研究から始まったのだった。

この粘土研究はその後、実際に工業化されるころまで発展して行った。元々、指宿の粘土は島田先生が成分の分析をする前から薩摩焼の原料として使われていた。その頃は成分の分析などがなされていたわけではないが、薩摩焼の昔の陶芸家は直感で適した土を使っていたのだった。

粘土の採取に行く時は、稲盛と島田先生はリュックサックを背負ってウイスキーを入れて山に登って行ったという。そして山を歩いて白い粘土が見つければそれを採取して行ったとのことであった。二人は表面の入来の白い粘土を取ってきてそれをサンプルとして持ちかえり、成分分析の研究を行った。

卒業論文を始めた時期は、大学4年生の始めくらいからだった。完成は卒業前の3月く

らいで良かったとのことであった。しかし、稲盛の場合は途中から就職先の業種に合わせて粘土の研究を始めたので約半年くらいで卒業論文のための研究を完成させたということである。島田先生は当時を「まあ根本的に、ちょっと、のんびりした時代ですからね」と振り返られた。

稲盛は工学部でも応用化学科に在籍し、4年生になっていた。有機化学に在籍したまま、別の専門の先生に指導を受けるということが比較的自由にできたのか、当時から珍しくて特例だったのか。

これについては、島田先生は「特例と言えば特例だし、容易であったと言えば容易であったということですね。本当は、稲盛さんは有機をやりたいかった。その会社が要求をしたもんだから、セラミックをやらざるを得なかったと。そういうようなかたちで、セラミックを。それでこういうね、セラミックで大きな会社が変わっていったということなので、何が運命であるかはね…」と話された。

稲盛は無機化学専攻に転科をして島田先生のもとについてというわけではなく、必要に迫られて個人的にお願いに行った。島田先生は、「会社の命令ですよ、言わば。これを勉強してこいということになったら、そら、強いですよ。でないと、私は採用しません、ということと同じだからな。そうだから、もういやいやながらセラミックへ、移らざるを得なかったということでしょうね」と話された。

稲盛の人生を全て考える上でも、ここでの転機は非常に大きなものだった。ここまで見てきたように、かくれ念仏との出会い、生長の家の『生命の実相』との出会い、さらには薩摩の文化風土の中で得た基本的なものの考え方といったものは、稲盛の精神形成を考える上で非常に大きなことである。しかし、それはいわば「人間稲盛和夫」の精神形成の上での重要事項である。稲盛のフィロソフィーの形成過程における重要事項である。

それに対して「経営者稲盛和夫」について考える上で、学生時代、就職以前に実は恩師との研究を通じて「セラミック」と出会っていたというのは特筆すべきことである。元は就職の内定した会社からの命令によって卒業までの半年を入来粘土の研究に費したわけであるが、松風工業に入る前に鹿児島で粘土と出会っていたということは、大きな縁を感じさせることである。

島田先生は、そのことについては「ああ、その時には、まあそんな深い意味はなかったと思いますがね。まあ偶然と言えば偶然でしょうね。セラミックのほうに、最初はね」といわれた。当時は稲盛自身も、後にセラミックで新しい会社を起し、その企業が世界的大企業になるとまでは夢にも思っていなかったに違いない。

稲盛は、学科を変わずに卒業論文執筆のために島田先生の指導を受けに行った。学科や学部が変わるのは昔は今よりは簡単だったという。島田先生も「あまり難しくはなかった」と述懐された。30年くらい前は農学部から教育学部に移る学生もいたという。島田先生によると、昔は工学部から医学部に行くということもあったようである。特に同じ学部内であると、自分がいる学科に籍をおいたまま違う専門の先生について習うということも、それほどハードルの高いことではなかったのだ。

当時は、何とって食べること自体が、大変だった。島田先生の家にも時々、学生が遊びに行き食事をさせてもらおうということがあった。そういう中で島田先生はよく学生と一緒にお酒を飲むということがあった。当時の食糧難の時代にあっても不思議と焼酎だけは

飲めたとのことであった。また、学生がどこかから何か材料をあつめてきて鍋をつくってたべるといふこともあったと述懐された。

当時はあまり細かいことをいわない時代で、実験室や研究室でも実験が終わったあとに焼酎を飲むということもあったようだ。島田先生はその時代を「それは非常に愉快的な時代でした」と述懐された。稲盛は酒が強いほうだったとのことであった。島田先生の記憶によると「酔ったところは見たことがない」とのことだった。島田先生自身が焼酎を飲むのと学生と話すのが好きで、コンパをやるというのが普通のこととして定着して行ったようだった。稲盛は京セラを起業してから、コンパを大事にするということをしてきたが、この考え方には島田先生のもとで研究していたときの思い出や良い体験が活かされていることは間違いないだろう。

島田先生も、このことについて「やっぱり、そういう影響はあったのかもしれませんが。少しはですね。アルコールを飲んで、お互いに虚心坦懐に話をするというのがですね、非常に楽しくて、また仕事にも影響してきたような感じがしますですね」と述べられた。当時飲んでいた酒は殆どが芋焼酎で、ビールは非常に贅沢なもので、ビールが飲めるようになったのは大分、後になってからのことであったという。当時は夜の10時か11時ころまで飲んでいたこともあったとのことであった。

飲んでいるときの話の内容は化学の話もするが、他の一般的な話もよくしたということだった。当時の稲盛の様子について、島田先生は「体格がよく、成績も良かったのでリーダーであったことは間違いないですね」と述懐された。成績については、工学部全体では分からないが応用化学科では一番だったようである。応用化学科の当時の一学年の人数は25名から30名弱くらいだったという。島田先生は其中で当時、無機化学や珪酸塩工業などを教えておられた。

当時はセラミックという言葉はまだあまり使われていない時代だった。当時はまだ窯業という言葉が主に使われていた。当時の稲盛についての人柄については、非常に素直な印象だったという。「言ったことは全てよくやっていたし、反抗した記憶は全くない」とのことであった。島田先生は、稲盛について内定した会社の命令とはいえ、有機から無機の方へ移ってきてくれたことは、「ありがたく思っている、自分自身も非常に力になった」と話された。

当時は無機化学はあまり人気がなかったということだった。当時は石油化学の勃興期でもあり、有機化学の方が学生に人気があり、工学部応用化学科の学生は7割が有機化学分野に行き、残りが無機というそういう時代であった。有機、無機というのは応用化学の大きな一つの柱で、そのほかに化学工学、電気化学史などの専攻もあった。

卒論発表会は、昭和30年（1955年）2月17日に行われた。当時の資料によると発表の順番は一番目だった。卒業論文のはじめの方には以下のような記述があるので載せておく。これは、筆者が鹿児島大学稲盛アカデミー棟の1階の廊下に掲げてある卒業論文の最初の部分の写真を書きうつしたものである。

## 緒論

南九州一円に豊富に分布する白色粘土類は未だ研究の対象とならず、ましてや利用されていない有様です。そこで我々は南九州一円に分布する白色粘土の一貫した基礎的研究を目的としました。私はその研究の一助として入来粘土の基礎的研究を行ひましたが、何分浅学非才の者の研究故十分なる研究結果を提出できなかったことを惜むと共に、此の研究結果の幾分なりとも粘土の研究に役立つならば甚だ幸とする所があります。此の研究の御指導、御援助を授かった恩師菊池、島田、小牧の各先生方に深甚の謝意を表すものであります。

註 各種グラフは便宜上各頁に付けましたが正確なグラフは巻末に一括して集録致しました。

## 位置及び交通

入来粘土は鹿児島県薩摩郡入来町入来駅北東約1kmの入来高等学校、校庭及び裏山一体に産する白色稍硬質の粘土である。山元は鹿児島本線川内郡——宮之城線入来駅と交通至便であり駅より山元迄のトラックの輸送は比較的便利である

## 産出状態

入来高等学校一帯に広範囲に分布し山道新設等為等により露床も数カ所あり。概ね表土3~1mであり採取には不便を感じず。鉢床は塊状、外観は灰白色~純白のものなり。その間に褐色の粘土質を塊に含有する部分あり、又所によっては未だ風化作用不完全なる甚だ硬質の岩石状のものあり、概ね均一性を欠く、又附近に金鉢山の廃鉢あり

ここでも島田先生への謝辞が述べられている。稲盛が島田先生のもとで研究をしていた時、一緒にリュックを背負って入来粘土のサンプルを取りに山に行ったのは一回だけだったという。そのサンプルを調べた結果、ハイドロハロイサイトという粘土であるということが分かった。その後、工業技術センターの人が国から助成金をもらって、それで穴を掘って調べると様々なことが分かり、工業材料として非常に有望であるということが分かったという。

稲盛の研究に対する情熱は強いものがあったという。島田先生は当時のことを思い出されて、後の稲盛のために非常に役に立ったのは、機械作りを一からやったことだと話された。粘土の質量分析の前に、まず、質量分析をする機械そのものを作る必要があった。ある意味、無機化学、粘土の研究でありながら、半分は機械工学科みたいな部分があり、この時の経験は稲盛が京都セラミックを創業したあとに非常に役にたったのではないかと島田先生も述懐された。

島田先生は「いささか影響があったんじゃないでしょうか。無からやっていくわけですからね。ですから、その点は創立後の状態とちょっと似たところがありますよね」と述べられた。この時代は装置を作るのが一番の問題であったという。当時工学部の専門課程の中に、「化学機械設計製図」や「機械工学論」という講義があり、稲盛もこれらの講義を学んだ。

島田先生との研究の途上では、電子顕微鏡なども別の研究室から借りてくることもあつ

た。その当時、そのようなことはいわば「当たり前だという気」があったとのことだった。このころは、まだ充分にものがなく、その中で手探りで研究を進め、必要な機械は自分たちで作ったり、別の研究室から借りるといことが普通のことなのであった。

この辺りに、稲盛のものづくりのルーツがあると考えられる。ものは充分にないながらも自由闊達な雰囲気の中で、教員と学生がともに創意工夫をして研究を進めていくという経験は後の稲盛に大きな影響を与えた。島田先生はその後、京セラの工場を見に行かれることもあったという。初めに独立して京都セラミックを起業したときにも一度、見に行かれたという。その後、蒲生工場ができてからは、2ヶ月に1回くらいは行っておられた。蒲生工場ができたのは昭和38年（1958年）なので、昭和40年前後まで続いたのである。名目上は「技術指導」ということで、島田先生は竹下教授と一緒に蒲生工場を訪問されていたとのことであった。

稲盛の卒業論文は一つの出会いをもたらした。この年に鹿児島大学の教授になっていた内野正夫の目にとまったのだ。内野は戦前に満州の軽金属会社の創設にも関わった著名な技術者であったが、戦後はパージにあい、公職追放になっていた。これが解けて鹿児島大学に赴任していた。内野教授は卒業論文の発表会に参加した時に、稲盛の卒業論文を絶賛した。稲盛はかねてから内野教授を尊敬していた。

そして、その後卒業式の後の謝恩会で内野は再び稲盛に声をかけ、将来君は立派なエンジニアになると言った。さらにこの後、内野は稲盛を喫茶店に誘った。そこで、内野はエンジニアの心構えなどをじっくり稲盛に話した。このことは自伝の中にも書かれている<sup>130</sup>。これが縁で、稲盛は後に起業後も内野には様々な相談に乗ってもらう心の師としての交わりを続けていくことになった。昭和30年（1950年）、鹿児島大学工学部を卒業した稲盛は家族に見送られて就職のために京都に向かった。

## おわりに

ここまで稲盛の幼年時代から学生時代までの事績をみてきたが、この時期に将来の稲盛の人生を予感させるものがいくつもみられる。否、かなりの要素が出そろっているといっても良い。それらは大きく分けて5つに分けられと考える。1つ目は信仰心の強さである。また、心のありよう（自身の内面の状態）が現実の人生をかたち作って行くという強い信念をもったのもこの時期であった。

2つ目は中学・高校時代から数学や理科が得意で、職業としては理科系方面の技術者としての方向に進むという素地が青年期にあったということである。3つ目はリーダーシップの問題である。この中のどれかが欠けても後年の稲盛はなかった。これらは現在の稲盛の成功を考える上でいずれも重要なものである。4つ目は反骨精神である。ここの反骨精神はリーダーシップと一緒に論じても良いのだが、稲盛独自のリーダーシップとチャレンジ精神を論じる上では外せないと思われるので、1つのカテゴリーとして考えたい。5つ目は商才の芽である。

善なることを行えば善なる結果が出て、逆もまたしかりであるという信仰心の強さと心（内面）のありようが人生を作っていくという稲盛の哲学（フィロソフィー）の原点は幼

---

130 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版・日本経済新聞社・2004年）pp. 52-53。

少期から青年期にあり、ほぼ原型は確立されていた。この時点では稲盛は後に影響を受ける臨濟宗の西片老師とも出会ってはいないし、また安岡正篤の東洋哲学からの影響もない。これらは後に出会うことになる。本稿でみたのは学生時代までだからこれは当然のことである。だが、「かくれ念仏」の部分で確認したように、稲盛は物心がついたころに非常に素朴な意味での信仰心をもった。これはその後の人生をずっと貫くものだった。

さらには、肺浸潤に侵された時に出会った谷口雅春の『生命の実相』の影響である。本文で触れたが、筆者は稲盛を理解する上で一番重要なものは、この時期の挫折とこの時期に得た信仰心だと考えている。この信仰心はこの時点では、まだ今日のような「因果応報」や「利他」を中心とする仏教的なものではなく、光明思想（ニューソート思想）によるものだった。これは、正しい心をもつことの重要性と、思っていることは実現し、思っていないことは実現しないということを説くものである。

これはこの後の稲盛が長く強く持ち続ける考え方であり、「京セラ経営12カ条」や「六つの精進」にもその影響が見られるものだ。人間は人生において何度か大きな精神的な転機を経験するが、一番大きな転機、その後にも影響を与える転機—真我の自覚、悟りを得る、性を知るなど宗教や思想によって表現は様々であるが、一種の「回心経験」—が、若い時の稲盛にすでにあったとするならば筆者は、肺浸潤の時の『生命の実相』との出会いだと考える。それほどこの経験は大きかったのではないかと考える。

事実、稲盛はその後、企業経営の中で何度も、心を正し、正しいことを思うことが成功のカギだということを繰り返し説いていく。盛和塾でもこのことを強調し、若い経営者たちを指導していく。また、これは稲盛が第二電電（DDI）設立の決断をするまでの間、何度も自身に問うた「動機、善なりや、私心、なかりしか」という言葉を思い起こすものでもある。

これはただの道徳論ではない。また観念的な哲学でもない。稲盛においてフィロソフィーの共有が、稲盛の経営する（指導する）組織において極めて重要視されるのは、これが単にビジネス成功の秘訣といったレベルのものではなく、人間界を貫く法則であるからである。稲盛自身が体験で何度も経験していることだからこそ、この信念は社員や一緒に仕事をする仲間と共有する必要があると考えたのだと思われる。

現在の稲盛は社会的には経営者として有名であり、技術者や発明家というイメージは、さほどない。また、京都賞を贈る「稲盛財団」を主宰し社会に奉仕する企業家としてのイメージも強い。さらには児童養護施設も経営するなどの慈善家としての評価も定まっている。そして、最近では「利他」を説く宗教的な経営者であるというイメージが世間的には一番広まっている。

しかし、元々は京セラの起業は、稲盛が最初に就職した松風工業で研究したセラミックの技術の成果を世に問うためであった。稲盛は単なる会社経営の専門家としての経営学をおさめたアメリカ型の「職業経営者」ではなく、まぎれもない技術者である。ここを十分に理解せずして稲盛を語ることはできない。この技術者方面に進むということの芽も比較的初期の段階にあったことが分かった。

高校から大学へ進学する時に、心の問題に関心があったが稲盛が文学部ではなく、工学部を選んでいるのは—当初の医学部に行って薬学の研究をしようという志とは別の方面になったといえども—稲盛に理系の要素が強くあったからである。同級生からいずれも理科



と数学が得意だったという証言を得たが、このことは後に稲盛が先端技術を売り物にする製造業の企業で成功したと無縁ではない。

リーダーシップの問題もその後の稲盛について語る時に欠かせない。これについても、同級生の方々の証言から少年時代からその芽があったことが判明した。これは先天的な稲盛自身の気質と薩摩（鹿児島）の風土から受けた影響という後天的なものがあることがあいまって確立されたと筆者は考える。これは稲盛の負けず嫌いという性格とも非常に関係があると筆者はみている。誤解をおそれずにいえば、稲盛は人の風下に立つことを非常に嫌う人間である。

これは、組織の一員として出世をして行ったのではなく、若くして組織のトップになった稲盛のこの後の人生を考える上で重要な部分だ。「むしろ鶏口となるも牛後となることなかれ」（寧為鶏口無為牛後）という言葉が『史記』「蘇秦伝」の中にあるが、稲盛は小さな組織でも上に立つことを選ぶ人間であった。この芽は少年期に見られる。この稲盛の性格は、ガキ大将だった時の思い出についての稲盛の述懐にもすでにあらわれている。

また正義感が人一倍強いのも稲盛の少年時代からの特徴である。卑怯なことや不正を受け入れられない気質は少年の時のエピソードにも見られる。例え目上の人間であっても自分が正しいという確信をもったことには一歩も下がらないということがすでに少年の頃にあった。このことは小学校6年生の時の担任教師とのやり取りにみることができる。

だがリーダーというものは、ただ、負けん気が強く人の風下にたつことが嫌いな人間なら誰でもなれるかというところではない。そうであれば協調性のないわがままな人間でもリーダーになれる。しかし、真のリーダーは組織の構成員の利益を守り人々を守る存在でなければ務まらない。利己的なリーダーは必ず指導力を失い失脚するからだ。このことは古今東西の歴史が証明しているし、今日の政界や戦後の実業界、身近な組織をみても明らかである。

人心を失えばいかなる権力者といえども、周囲から批判されその地位を去らねばならない。長く指導的な立場を維持するには本当の意味でのリーダーでなければならない。稲盛はこのようなリーダーに必要な資質とは何かということについても幼い時から考えて実行してきた。このリーダーシップの問題を考える際に、薩摩・鹿児島伝統的な郷中教育から受けた影響や西郷隆盛や大久保利通の存在は大きいものであった。

郷中教育はただ年上が威張るというものではない。年上が年下を育て、その過程で周囲から認められ、衆目の一致する人間が自然にリーダーに推されて行くというものである。したがって上に立つ者は同僚や下のものから認められたものである。権威主義ではない。また郷中教育は精神修養を重視するため、卑怯な買収や談合も通用しない。「駆け引き」や姑息な行動を恥ずかしいものとする論理が貫かれている。その中では人間自体の総合的な評価が周囲からなされる。

郷中教育の精神は、封建時代にありながらも、決して家柄重視の考えでも権力者が下のものを無理に抑え込むというようなものでもなかった。郷中教育には、ある意味において一良い意味での一実力主義の考え方があった。そして、その「実力」には人望や指導力、懐の深さといったものも包含されていた。西郷隆盛が台頭してきたのも、郷中での指導力と人望によるものだった。稲盛のリーダーシップの原点は、かなりの部分は本人の資質によるものだったとしても、幼年期から青年期に薩摩（鹿児島）の文化・気風から受けた影

響によるものも大きいということは確実にいえるだろう。

また、稲盛は非常に反骨精神が旺盛である。このことは、実業家になってからNTTの寡占状態に対して第二電電（DDI）を起こすという決断をしたことなどをみても分かる。稲盛はその前にも京都セラミックを起業してから絶えず既存の権力（官僚の規制や大企業の系列による支配）と闘って風穴をあけ事業を拡大してきた。このようなことが稲盛に何故に可能だったかは、リーダーシップ論だけで論じられるものではない。

リーダーの中には既存の守られた組織の中でリーダーシップを発揮できてもそうではない組織ではリーダーシップを発揮できない人物もいるからだ。軍人や官僚のような階層のはっきりした組織におけるリーダーシップと起業家のような一からものを起こす人間に必要なリーダーシップは、必要とされる資質や能力が違うことは容易に理解できる。

その意味で稲盛のリーダーシップは反骨精神と表裏一体のものだと筆者は考える。極端な想像だが、稲盛が銀行員や公務員になっていたら今日ほどの成功をおさめたであろうか。銀行員や公務員の稲盛というのは、今では誰が考えてもそれは考えようのないくらいに不自然なものである。だが、実際に稲盛は大学に進学すると決める前には父の畷市の勧めもあって銀行に入ることも考えていた。例え、リーダーとしての資質が小さなころから稲盛にあったとしても、そのことと稲盛の今日の成功はそのままイコールではない。

ではこの反骨精神はどこからきたのだろうか。気性が荒いとか、負けん気が強いというのは個人の資質である。地域性とか教育による影響というものに先だってその「個人」にあるものだ。しかし反骨精神というのは個人の資質にもよるが、環境による経験による影響によって徐々に醸成されてくるものだとも考えられる。生まれつき「気の強い」傾向がある子供はいても、生まれつき「反骨精神旺盛」な子供はいないだろうからだ。稲盛の反骨精神の原点は、子供の時からの挫折経験と生育環境の2つによって徐々に養われてきたものではないだろうか。

1つには2回に及ぶ旧制鹿児島一中への受験の失敗によって感じた挫折感からくるものであり、もう1つは薬師町に住んでいた旧士族への反発からだろうと考えられる。稲盛は自伝や子供用の『君の思いは必ず実現する』の中でも一中受験の挫折については自ら何度も言及しているが、薬師町のことにはあまり言及していない。しかし、本稿で引用した母親のキミのエピソードの文章にみることができるよう、当時の薬師町に新住民と旧来から住んでいた人々との間には少し壁があったことは確かのようなのだ。

郷中教育の精神は良いもので、教育の方法やリーダーの選び方は特に封建的ではないものとしても、鹿児島において（旧）士族身分のものの中に昭和の初期まで、士族意識を感じさせる言動や振る舞いがあったことは確かである。幼い時の稲盛がこれらの（旧）士族の日常的な言動や独特の雰囲気反発したことは想像される。

事実、日本においては、終戦後の昭和22年（1947年）の民法改正による家制度廃止まで、正式に華族や士族という江戸時代の身分に基づいて明治に新たに作られた身分が戸籍に記されていた。士族は特に国から優遇されていたわけではなかったが、特権意識をもつものは多くいた。

一定の年齢層以上の（80代くらい）の世代には、自分が（旧）士族の出身であったことを誇りに思っている人はいまでもおられるようだ。鹿児島は特に他の都市と比べて、今でもそういう気風の残る街である。市章にも丸に十字の島津家の家紋をあしらったデザイ

ンが使われているくらいである。

本稿の最初にみたが、稲盛家は祖父の七郎の代に小山田から出てきた。最初、西田に住んだ祖父七郎は稲盛の父の暎市が18歳の時薬師町に住むようになった。また、本人も書いているが戦前には、鹿児島では小学校の出席簿にまで士族か平民かを書く欄があった。稲盛は今でも官僚嫌い、公務員嫌いであるがその反骨精神の原点は少年時代にあったのかもしれない。

こう考えると稲盛が鹿児島時代に受けた影響というものは少し複雑になる。稲盛は西郷隆盛をこよなく尊敬しており、京セラの社是は「敬天愛人」である。また、郷中教育から良い影響を受けたと自身でも自伝で述べている。そして、リーダーシップの大きな部分は個人の資質によるものだったとしても、薩摩（鹿児島）の文化によって影響を受けて育まれたものも多い。だが、それはだけでは一面的な見方になる。

この視点はこれまであまり書かれてはこなかったと思われる。気質においても考え方においても薩摩的な稲盛であるが、幼少期のこうした（旧）士族との交わりで経験したものが、大きなものや権力的なものに挑戦するという反骨精神の原点をつくり、この精神こそが後に稲盛をベンチャーの旗手にしたともいえるのである。

最後に商才である。現在の稲盛には技術者（セラミック）、企業のリーダー（京セラ、KDDI、日本航空）、信仰者（臨済宗）、慈善家（稲盛財団主宰、児童養護施設経営）としての顔がある。これらは皆、同列に論じられがちである。だが、京セラとDDI（現：KDDI）という二つの企業を一から起業し成功に導いたということは何にもまして商売人（経営者）としての突出した先見性とセンス、そして実行力があつたわけである。

稲盛は、技術開発はするが、実際の経営は他の人物に任せるというタイプの技術者の経営者ではなく自ら先頭にたつて経営を行ってきた。これは27歳で京都セラミックを起業してから日本航空の会長を務める今日まで一貫している。経営者としての必要な資質も多くの要素に分割できるが、いわゆる商才（ビジネス感覚）という最も基本的な能力も必要である。

紙袋の行商という短い経験が後に独立して商売を始めた時に役に立ったと本人が回想していることから、商売人としての資質も稲盛にはあつたことが推測される。だが、筆者は紙袋の行商経験からだけでは、そこまでは断定できないと考え、この5つ目は保留にしようと考えていた。が、川辺氏に再びお会いした際に、このことについても聞いてみた。すると、川辺氏は、稲盛は青年時代から商才はあつたと述べられた。当時の稲盛は大変、愛想が良かったとのことである。

商才というものは社会が今後どう変化していくかを見抜く先見性が必要である。ある商品の需要を見込んだり、存在しない需要を自ら作っていったりしなければならない。市場を新規に開拓していく戦略を練ることも必要である。「商才」と一言でいっても、実際には様々な能力が複合的に必要である。信用を積み重ねることも大事な要素だろうし駆け引きの能力も必要だろう。したがって、愛想良くものを売るのが上手いということのみで「商才」があつたとまではいえない。

だが、稲盛は紙袋の行商の時に、日を決めてどこの地区をまわるかを考え出し、闇市のおばさんに気に入られて大きなチャンスをつかみ、高校2年の時には鹿児島の紙袋市場を席卷した。これは福岡からきていた同業者を撤退に追い込むくらいのものであつた。このエ

ピソードから考えると、やはり、稲盛に将来ビジネスで成功する人間として必要な資質が、この頃から備わっていたことは確かだろうと筆者は考える。

以上が今日の稲盛の成功を考える上で既に幼年期から学生時代を過ごした鹿児島時代に見出すことのできた要素である。

本稿は「はじめに」で述べたように鹿児島時代の稲盛和夫氏の事績について極力、事実を掘り起こしたものである。最初に述べたとおり、この時期の稲盛氏について知るための資料は本人が書かれた自伝『稲盛和夫のガキの自叙伝』と加藤勝美氏の『ある少年の夢』の二つの書物である。したがって本稿も歴史的な事実については全てこの二つの書物をもとにして記述した。

### 【謝辞】

本稿の執筆にあたっては多くの方々にお世話になりました。特に京セラ秘書室経営研究部木谷重幸氏と鹿児島大学稲盛アカデミー神田嘉延先生には大変お世話になりました。また、研究会を通じてアドバイスを頂いた、鹿児島ご出身の京セラ秘書室長大田嘉仁氏、かくれ念仏や生長の家と稲盛氏の出会いについての研究を参考にさせて頂いた京セラ粕谷昌志氏に感謝申し上げます。

また、インタビューに答えて頂いた鹿児島市西田学区、自彊学舎の関係者の方々、自彊学舎関係者を紹介して下さった松山道氏、ご高齢ながら貴重なお時間を頂いた島田欣二先生、川辺恵久氏、大迫隆氏に心から感謝申し上げます。

さらに、川辺氏へのインタビューのきっかけを作って下さった同級生の牛山氏、牛山氏をご紹介して頂いた尾上氏、大迫氏へのインタビューのきっかけを作って下さった鎌田氏にも心から感謝申し上げます。大迫氏、川辺氏は直接に会えたのではなく、不思議なくいつかの出会いが重なった結果、お会いすることができました。

本稿の執筆課程でお世話になった全ての方々に心より感謝致します。

## 【参考資料】

### 1. 書籍（鹿児島関係）

- 『ふるさとの思い出 写真集 明治・大正・昭和』  
『写真と年表でつづる かがしま戦後50年』  
本田斉『あれから10年 鹿児島戦災録』昭和30年  
鹿児島県立図書館刊行『薩摩の郷中教育』昭和47年  
『鹿児島大百科事典 別冊』南日本新聞社・1981年  
豊増哲雄『古地図に見るかごしまの町』かごしま文庫30 春苑堂書店・平成8年  
松本彦三郎『郷中教育の研究—薩摩精神の真髓—』尚古集成館・2007年復刊  
五木寛之『日本人のこころ2』（講談社・2001年）

### 2. 書籍（稲盛氏の著作・伝記）

- 加藤勝美『ある少年の夢』現代創造社・昭和54年  
稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』（文庫版）日本経済新聞社・2004年  
稲盛和夫『君の思いは必ず実現する』財界研究所・2004年  
稲盛和夫『生き方—人間として一番大切なこと—』サンマーク出版・2004年  
稲盛和夫『京セラ経営12カ条』京セラ株式会社・2005年  
稲盛和夫『敬天愛人—私の経営を支えたもの—』（文庫版）PHP研究所・2006年  
稲盛和夫『働き方—「なぜ働くのか」「いかに働くのか」—』三笠書房・2009年  
稲盛和夫『稲盛和夫講義集「六つの精進」「人は何のために生きるのか」』（鹿児島大学稲盛アカデミー叢書 I・2010年）  
稲盛和夫『稲盛和夫講義集「なぜ経営に哲学が必要か」「経営12カ条」「ベンチャー成功の条件」』（鹿児島大学稲盛アカデミー叢書 II・2010年）

### 3. 学校の記念誌・郷土史・自伝などの資料（刊行年順）

- 鹿児島玉龍高等学校『玉龍三十年の歩み』昭和45年  
社団法人西田文化協会『西田町のあゆみ』昭和46年  
『青春友情第3巻』鹿児島新報社・昭和53年  
財団法人自彊学舎『舎史（百年記念号）』昭和53年  
西田校区公民館運営審議会『西田校区郷土史誌』1980年初版及び2007年版  
西田小創設百周年記念実行委員会『西田小創設百周年新校舎落成記念誌』昭和61年  
鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校「飛龍」（玉龍高校創立五十周年記念誌）・平成2年  
旧制鹿児島中学校同窓会『不断の響き』平成9年  
西田一九会『あしたうらら』穂高書店・2000年  
大迫隆『わが家のルーツわが家の年輪の軌跡』・大迫隆氏の私家版自伝・2003年  
西田小学校創立130周年記念事業実行委員会編「西田小創立百三十年史記念誌 にしだ」平成18年  
財団法人自彊学舎『舎史（百三十年記念誌）—大西郷を偲びつつ—』平成21年

### 4. 論文・レポート

- 小野泰博「生長の家—日本的習合宗教の典型—」（『新宗教の世界Ⅴ』大蔵出版・1979年所収）

神田嘉延「鹿児島大学工学部創設期の教育状況—稲盛和夫の学生時代の背景—」

(鹿児島大学稲盛アカデミー『稲盛アカデミー紀要』第1号・2009年所収)

吉田健一「稲盛和夫の少年時代と鹿児島の精神教育—自彊学舎関係者インタビューから—」(鹿児島大学稲盛アカデミー『稲盛アカデミー紀要』第2号・2010年所収)

粕谷昌志「稲盛名誉会長 思想の源流 No.2～「敬天愛人」の思想について～」(『研究レポート』1 所収) 京セラ株式会社秘書室経営研究部

粕谷昌志「稲盛名誉会長 思想の源流 No.1～『生命の実相』について～」(『研究レポート』1 所収) 京セラ株式会社秘書室経営研究部・2011年

粕谷昌志「稲盛名誉会長 思想の源流 No.3 ～かくれ念仏について～」(『研究レポート』2 所収) 京セラ株式会社秘書室経営研究部・2011年

#### 5. 筆者によるインタビュー (実施年順)

崎元吉博氏 (平成22年3月16日)

松山道氏 (平成22年3月16日、3月18日)

吉村松治氏 (平成22年3月18日)

宮内信正氏 (平成22年3月18日)

東久雄氏 (平成22年3月18日)

宮内博史氏 (平成22年3月18日)

税所篤央氏 (平成22年3月18日)

大迫隆氏 (平成23年2月22日他)

島田欣二氏 (平成23年8月2日・京セラ木谷重幸氏、神田嘉延教授と共同で実施)

川辺恵久氏 (平成23年8月3日・京セラ木谷重幸氏、神田嘉延教授と共同で実施。平成24年2月18日)

#### 6. 参考ホームページ

西本願寺鹿児島別院HP <http://www.hongwanji-kagoshima.or.jp/>

生長の家HP <http://www.jp.seicho-no-ie.org/>

自彊学舎HP <http://www.jikyuu.org/>

鹿児島三大行事保存会HP <http://kasayaki.karakasa.com/>

【稲盛和夫氏年譜（鹿児島時代）】

西暦（元号）	年齢	出来ごと
1932年（昭和7年）	0歳	・鹿児島市薬師町に出生。
1933年（昭和8年）	1歳	
1934年（昭和9年）	2歳	
1935年（昭和10年）	3歳	
1936年（昭和11年）	4歳	
1937年（昭和12年）	5歳	・この頃、かくれ念仏と出会う。
1938年（昭和13年）	6歳	・鹿児島市立西田小学校に入学。（1年）
1939年（昭和14年）	7歳	
1940年（昭和15年）	8歳	
1941年（昭和16年）	9歳	
1942年（昭和17年）	10歳	
1943年（昭和18年）	11歳	
1944年（昭和19年）	12歳	・鹿児島第一中学校を受験するが失敗し、尋常小学校に入学。
1945年（昭和20年）	13歳	・肺浸潤で療養中、『生命の実相』を読む。 ・担任の土井先生の勧めにより私立鹿児島中学校を受験し、進学。 ・空襲により実家が消失。 ・終戦を小山田でむかえる。（8月）
1946年（昭和21年）	14歳	・鹿児島中学
1947年（昭和22年）	15歳	・鹿児島中学
1948年（昭和23年）	16歳	・鹿児島市高等学校第三部に進学。 ・家計を助けるため、紙袋の行商を始める。
1949年（昭和24年）	17歳	・鹿児島市高等学校第三部2年
1950年（昭和25年）	18歳	・玉龍高校3年
1951年（昭和26年）	19歳	・大阪大学医学部薬学科の受験に失敗し、県立鹿児島大学工学部応用化学科に入学 ・鹿児島大学1年
1952年（昭和27年）	20歳	・鹿児島大学2年
1953年（昭和28年）	21歳	・鹿児島大学3年
1954年（昭和29年）	22歳	・不況による就職難の中、竹下教授の紹介で松風工業へ就職が内定。 ・鹿児島大学4年 ・島田先生と入来粘土の研究を行う。